多賀城関連遺跡発掘調査報告書第10冊

名生館遺跡 V

宮城県多賀城跡調査研究所

序　　文

昭和59年度の多賀城関連遺跡の発掘調査は、昭和58年度多賀城跡調査研究指導委員会で承認された第３次５か年計画の初年度にあたり、名生館遺跡の城内地区を対象に実施した。

この城内地区では、昭和55・56年の発掘調査で、四面廂付建物を中心に一本柱による塀で区画された東西約53ｍ、南北約61ｍの官衙中枢部が８世紀初頭に存在したことを始め、７世紀後半から９世紀にかけて一貫して古代玉造郡の中心的な官衙として機能していたことを把握している。

本年度の第５次調査は、再び城内地区を対象とし、官衙中枢部全体の規模と構造を確定するとともに、その西側地区における遺構の広がりを究明することを目的として実施したものである。調査の結果、官衙中枢部の西辺および南辺の塀跡が検出され、この中枢部の規模が確定できたほか、中枢部全体の建物配置も明らかになった。また、その西側では多数の掘立柱建物跡や竪穴住居跡、区画溝跡などが確認され、この古代官衙がかなり広範囲にわたっていたことも判明した。

現在、昭和55年度から本年度まで５年間継続した名生館遺跡の発掘調査の成果を踏まえ、本遺跡の史跡指定の実現に向かって努力中であるが、幸い古川市をはじめ地元住民の方々の盛り上がりも顕著で、大いに期待できる気運になってきたことは、まことに喜びに堪えない。

本年度の調査にあたり、多くの御指導を賜った多賀城跡調査研究指導委員会の諸先生をはじめ、文化庁、古川市教育委員会、調査地を快く提供された地主の笠原せつ・大場連の両氏、および地主であり、調査の準備から埋戻しに至るまでお世話頂き、自宅を本部として提供された笠原良夫氏に厚く感謝申し上げる。さらに、猛暑のさなか発掘調査をすすめられた地元の調査参加者諸氏に対しても心から謝意を表するものである。

昭和60年３月

宮城県多賀城跡調査研究所
所　長　佐々木　光　雄

目　　次

序　　文
Ⅰ．調　査　要　項 …… 1
Ⅱ．多賀城関連遺跡の調査計画 …… 2
Ⅲ．遺 跡 の 概 要 …… 3
Ⅳ．これまでの城内地区発掘調査の成果 …… 8
Ⅴ．調　査　経　過 …… 11
Ⅵ．発見された遺構と遺物 …… 12
　1　南　地　区
　　(1)　塀　　跡 …… 12
　　(2)　掘立柱建物跡 …… 15
　　(3)　竪穴住居跡 …… 20
　　(4)　土　　坑 …… 30
　　(5)　　溝　　 …… 33
　　(6)　井　戸　跡 …… 35
　　(7)　　墓　　 …… 35
　2　西　地　区
　　(1)　掘立柱建物跡 …… 36
　　(2)　竪穴住居跡 …… 44
　　(3)　土　　坑 …… 50
　　(4)　　溝　　 …… 52
　　(5)　井　戸　跡 …… 55
Ⅶ．考　　察 …… 56

例　　言

1．本遺跡の地区割りは城内地区にある三角点を発掘基準原点(0.0)とする直角座標で設定したものである。発掘基準線の北は第Ｘ系座標北と一致する。本書で用いた方位はすべてこの発掘基準線をもとに計測したものである。

2．本書の作成にあたっては当研究所の佐々木光雄、進藤秋輝、白鳥良一、高野芳宏、古川雅清、後藤秀一、佐藤則之、佐藤和彦が協議・検討を行い、執筆・編集には白鳥良一と後藤秀一があたった。またこれらの作業を平山三津子、和田容子、鎌田あさ子、伊藤和子、田仲紀美子、伊丹早苗、浅野浩美、岡田富子が援けた。

Ⅰ．調　査　要　項

1．遺　跡　名　　名生館遺跡

2．所　在　地　　宮城県古川市大崎字名生館、城内、名生小館、名生北館、弥栄

3．調査主体　　宮城県教育委員会（教育長　郷古康郎）

4．調査共催　　古川市教育委員会（教育長　千田清志）

5．調査期間　　昭和59年７月２日～９月20日

6．調査顧問　　多賀城跡調査研究指導委員会委員長・東北大学名誉教授　伊東信雄

7．調査担当者　　宮城県多賀城跡調査研究所長　佐々木光雄

8．調　査　員　　宮城県多賀城跡調査研究所：進藤秋輝、白鳥良一、高野芳宏、古川雅清、後藤秀一、佐藤則之、佐藤和彦

東北歴史資料館：桑原滋郎、小井川和夫、岡村道雄、千葉景一、佐々木常人、村山斌夫、吉沢幹夫

宮城学院大学教授：工藤雅樹、石巻高等学校教諭：三宅宗議

古川市教育委員会社会教育課：伊藤　隆、藤村良平、柴原一雄

9．調査参加者　　万城目喜一、二郷　等、平山三津子、和田容子、伊藤和子、鎌田あさ子、伊丹早苗、田仲紀美子、浅野浩美、岡田富子、伊藤康子、桜田逸子、田中千登勢、遊佐博子、日野邦子、松井良子、笠原良夫、大場松治、笠原良助、菅原喜美男、佐々木秀一、大場正志、門脇幸一郎、佐々木善右エ門、佐々木富男、加藤利男、中村鉄夫、都築庄助、笠原ましゑ、菅原たよ、大場とよ子、鹿野田洋子、佐々木はつえ、佐々木もとよ、加藤みき子、鹿野千恵子、阿辺トシ子、笠原すみ子、笠原みよ子、福田政子、笠原きえ子、門脇みえ子

10．調査協力者　　地主：笠原良夫、笠原せつ、大場　連

本部提供：笠原良夫

II．多賀城関連遺跡の調査計画

当研究所では特別史跡多賀城跡の調査・研究と併行して、多賀城に関連する宮城県内の城柵・官衙遺跡についても５か年計画に基づき継続的な調査・研究を実施している。これは、多賀城を中心として展開された当地方の古代史を多角的に把握し、多賀城をその歴史的な背景の中に正しく位置づけることを目的とするものである。

昭和49年度からの第１次５か年計画では桃生郡河北町の桃生城跡と、栗原郡築館町の伊治城跡、昭和54年度からの第２次５か年計画では伊治城跡と古川市の名生館遺跡の発掘調査を実施し、多くの成果を収めてきた。

昭和59年度からは第３次５か年計画に入り、昭和58年６月28日に多賀城跡調査研究指導委員会で承認された表１に示した計画により調査を実施することとしている。昭和59・60年度は第２次５か年計画に引き続き名生館遺跡およびその関連瓦窯跡の調査を行うものであり、昭和61年度は古代の官衙跡と推定される宮崎町の東山遺跡についての初めての調査を実施する予定である。また、昭和62・63年度には昭和49・50年度に調査を実施した桃生城跡について政庁の規模・構造を確定することなどを目的とした調査を組み込んでいる。

本年度は第３次５か年計画の初年度にあたり、名生館遺跡の城内地区を対象とし、Ｂ期官衙政庁の南辺区画施設および南門の検出と、その西隣接地区における官衙遺構のあり方を把握することを目的に発掘調査を実施した（多賀城関連遺跡調査費 7,000 千円、うち50％国庫補助）。

	年度	遺跡名	事業	内容	報告書
第一次5ヵ年計画	49年度	桃生城跡	地形図作成・第１次発掘調査	内郭地区および外郭線の調査	「桃生城跡Ⅰ」
	50年度	桃生城跡	第２次発掘調査	同上	「桃生城跡Ⅱ」
	51年度	伊治城跡	地形図作成		
	52年度	伊治城跡	第１次発掘調査	外郭線および郭内の調査	「伊治城跡Ⅰ」
	53年度	伊治城跡	第２次発掘調査	郭内の調査	「伊治城跡Ⅱ」
第二次5ヵ年計画	54年度	伊治城跡	第３次発掘調査	同上	「伊治城跡Ⅲ」
	55年度	名生館遺跡	地形図作成・第１次発掘調査	城内地区の調査	「名生館遺跡Ⅰ」
	56年度	名生館遺跡	第２次発掘調査	同上	「名生館遺跡Ⅱ」
	57年度	名生館遺跡	第３次発掘調査	小館・内館地区の調査	「名生館遺跡Ⅲ」
	58年度	名生館遺跡	第４次発掘調査	小館地区の調査	「名生館遺跡Ⅳ」
第三次5ヵ年計画	59年度	名生館遺跡	第５次発掘調査	城内地区の調査	本書
	60年度	名生館遺跡	第６次発掘調査	範囲確認調査・関連窯跡調査	
	61年度	東山遺跡	地形図作成・第１次発掘調査	遺構分布確認調査	
	62年度	桃生城跡	第３次発掘調査	政庁地区の調査	
	63年度	桃生城跡	第４次発掘調査	外郭北方地区の調査	

※昭和59年度までは実績、昭和60年度以降は予定。

表１　多賀城関連遺跡調査計画

Ⅲ. 遺 跡 の 概 要

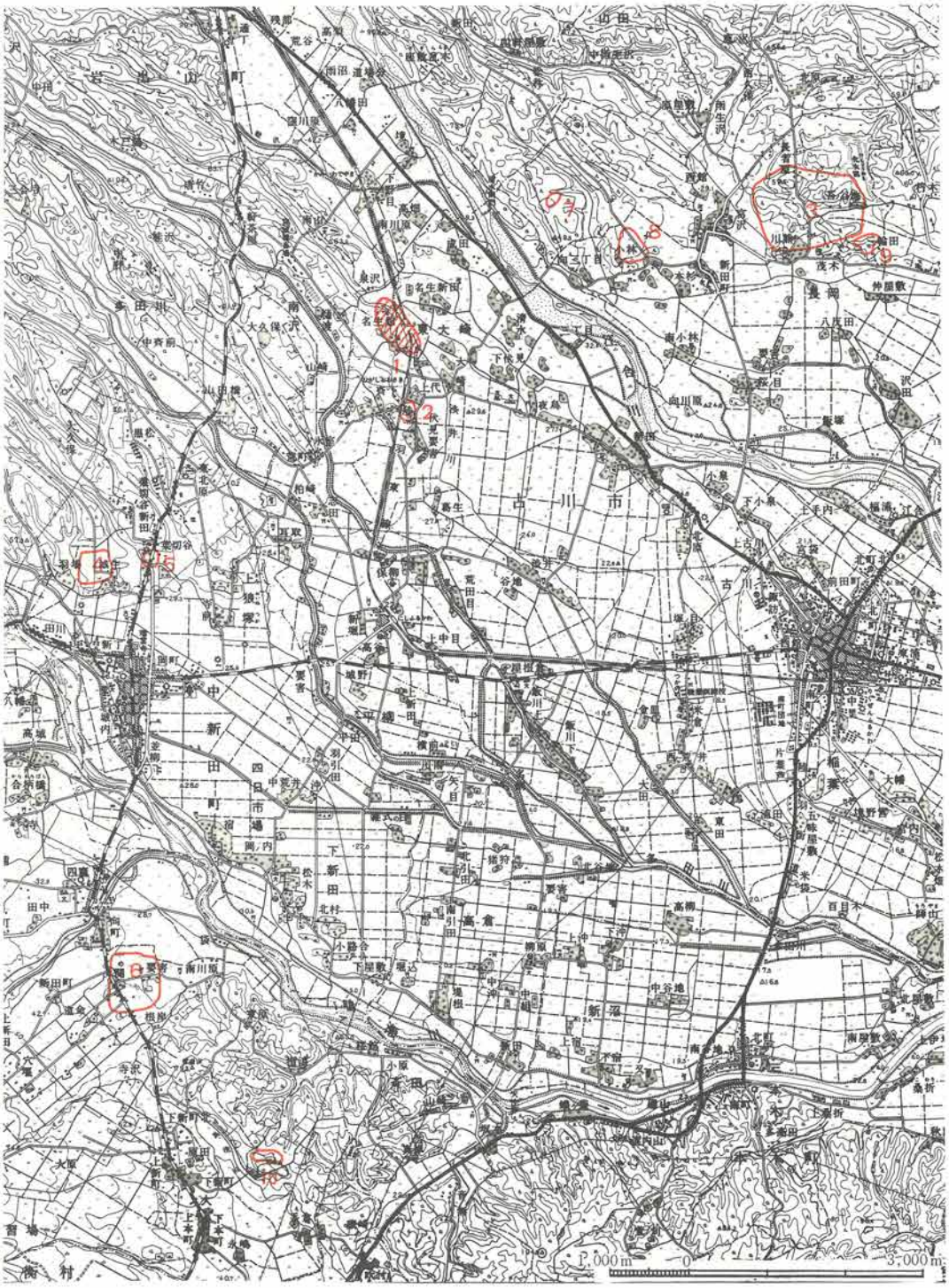
名生館遺跡は古川市大崎に所在する。遺跡は多賀城跡の北約30kmに位置し、箆岳、玉造、大松沢の各丘陵に囲まれて北の江合川と南の鳴瀬川の両河川の流域に広がる大崎平野の北西端にある。江合川の南岸には標高約40m、沖積地との比高約10mの火砕流台地が北西から南東に延びており、遺跡はこの台地の東南端付近に立地している(第1図)。

本遺跡は、北と東は浸触崖によって画され、南は小館地区の南側に東から入り込む小さな沢によって限られている。一方、西側は台地上の平坦面が続き、遺跡がどこまで延びるのかは地形的には判然としない。こういった状況から、本遺跡の範囲は南北約1,000m、東西は遺物の散布状況からみて少なくとも700mほどであると思われる。遺跡地は現在大部分が畑地として利用されており、一部は水田や宅地となっている(第2図)。

この地区は現在古川市に属しているが、「和名類聚抄」の玉造郡俯見郷にあたるとみられる「伏見」が本遺跡の南約1kmに位置していることから、古代にはこの地区が玉造郡に属していたことはほぼ間違いがないものとされている。

遺跡内には古代の土器や瓦が散布しているのをはじめ、中世の土塁や空堀が遺存している。このうち、古代の瓦の散布は城内地区と小館地区の2か所に集中している。両地点から出土する瓦は文様や製作技法に違いがみられ、城内地区の瓦が山田寺系単弁蓮花文軒丸瓦、ロクロ挽き重弧文軒平瓦であるのに対し、小館地区の瓦は多賀城創建期の重弁蓮花文軒丸瓦などである。また、本遺跡は中世に奥州探題大崎氏の居城である名生城が築かれた場所でもあり、遺跡内には各所に土塁や空堀などが残る他、「名生館」「城内」「小館」「北館」「内館」などの地名にも当時の名残をとどめている。

本遺跡は比較的古くから多くの研究者に注目されてきている。最初に文献に名がみえるのは、寛政10(1798)年に里見藤右ェ門が著した「封内土産考」である。里見は本遺跡出土の布目瓦に注目し、その製作法について鋭い指摘をしたが、瓦は中世大崎氏に関わるものとしている(註1)。次いで明治年間には、本遺跡出土の瓦は古代のものとみられるようになり、原秀四郎は「寺院は瓦葺き」という当時の定説に従って、本遺跡を寺院跡とした(註2)。大正年間には、鈴木省三はこの地区を踏査し、「玉造軍団跡」に擬定した。鈴木はその中心施設を伏見宝龍社(伏見廃寺跡)とし、本遺跡をその付属施設跡とみた(註3)。戦後になると、当時古川工業高校教師であった佐々木忠雄による踏査により、本遺跡の瓦が伏見廃寺跡の瓦と同種のものであることが判明した。昭和45年に佐々木茂楨は伏見廃寺跡の発掘調査を行い、金堂跡と推定される基壇とその周辺から多量の瓦を発見し、この寺跡を俯見公



第１図　名生館遺跡位置図

１．名生館遺跡　２．伏見廃寺跡　３．宮沢遺跡　４．城生遺跡　５．菜切谷廃寺跡
６．一の関遺跡　７．大吉山窯跡群　８．小林杉ノ下窯跡　９．三輪田遺跡　10．日の出山窯跡群

名生館遺跡地形図

第2図　名生館遺跡地形図

第1～4次調査地区

第5次調査地区

の氏寺と推定し、瓦の年代を平安時代と位置づけた。また、本遺跡を、同種の瓦が出土することから「玉造塞」に比定した(註４)。その後、進藤秋輝により伏見廃寺跡出土瓦の再検討がなされ、この瓦が様式的・技法的に多賀城の創建瓦より遡るものであることが明らかにされた(註５)。さらに、本遺跡の小館地区からは、昭和45～48年の土取り工事の際多量の多賀城創建瓦が採集され、本遺跡と奈良時代の玉造柵との関係が一段と注目されてきた。

ところで、本遺跡の周辺には多賀城と密接な関連をもつ城柵官衙遺跡、寺院跡、生産遺跡が数多く存在する。

本遺跡の南約１kmには前述の伏見廃寺跡があり、基壇と多数の瓦などが発見されている(註４)。また、江合川を挟んで対岸の東方約５kmには奈良時代後半から平安時代にかけての城柵官衙遺跡である宮沢遺跡がある。調査の結果、外郭線は時期が異なる築地や土塁であり、規模は東西約 1,400 m、南北約 850 m で平面形は不整方形をなすことが判明している(註６)。この宮沢遺跡の南東隅に近接して三輪田遺跡があり、ロクロ挽き重弧文や偏行唐草文の軒平瓦が出土している(註７)。一方、本遺跡の南西約５kmには城生遺跡とその付属寺院である菜切谷廃寺跡がある。城生遺跡は一辺約 350 m の方形であり、周囲は築地によって区画されている(註８)。また菜切谷廃寺跡では金堂とみられる東西12.7m、南北10.8 m の乱石積基壇と多量の多賀城創建期の瓦が発見されている(註９)。さらに、本遺跡の南約９kmには、規模・基壇化粧等で菜切谷廃寺金堂と酷似する基壇をはじめ、多数の掘立柱建物跡が検出された色麻町一の関遺跡がある(註10)。

また、この地域の丘陵には多賀城創建期の瓦窯が集中して営まれている。本遺跡の東約２km、江合川の対岸には大吉山窯跡群があり、南約10kmには日の出山窯跡群がある(註11)。

註１．里見藤右ェ門「封内土産考」(『仙台叢書』第３巻　復刻版　1981)

註２．原秀四郎「玉造塞址につきて」『史学雑誌』第19巻18号　1903

註３．鈴木省三「玉造軍団及名生城」『宮城県史跡名勝天然紀念物調査報告書第二輯』1924

註４．佐々木茂楨「宮城県古川市伏見廃寺跡」『考古学雑誌』第56巻３号　1971

註５．進藤秋輝「東北地方の平瓦桶型作り技法について」『東北考古学の諸問題』1976

註６．宮城県教育委員会「宮沢遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ』1980

註７．古川市教育委員会『三輪田遺跡』　古川市文化財調査報告書第４集　1980

註８．中新田町教育委員会『城生遺跡』　中新田町文化財調査報告書第１・２・４～６集　1978～1982

註９．伊東信雄『菜切谷廃寺跡』　宮城県文化財調査報告書第２集　1956

註10．宮城県教育委員会「一の関遺跡」『宮城県文化財発掘調査略報(昭和51年度分)』1977

註11．宮城県教育委員会『日の出山窯跡群』　宮城県文化財調査報告書第22集　1970

Ⅳ．これまでの城内地区発掘調査の成果

山田寺系単弁蓮花文軒丸瓦などが集中的に散布する城内地区については、これまでに昭和55年度の第１次調査と昭和56年度の第２次調査を実施し、計約3,600㎡を発掘している。

その結果、掘立柱建物跡22、一本柱列による塀跡４、竪穴住居跡44のほか多数の土坑や溝などを検出しており（第３図）、これらの遺構は相互の重複関係や遺構の方向と規則性、出土遺物などの検討からＡ・Ｂ・C_1・C_2・Ｄの５期に大別された。各期の年代と様相は以下のとおりである。

〔Ａ期〕　７世紀末頃の時期で、掘立柱建物跡７と土坑１がある。この時期の建物跡の特徴としては、方向が発掘基準線にほぼ一致するものが多く、柱穴が0.3ｍ～0.5ｍと小規模で、埋土が黒色土であることなどがあげられる。

〔Ｂ期〕　８世紀初頭頃の時期で、掘立柱建物跡４と一本柱列による塀跡４がある。この時期の遺構の特徴としては、建物跡・塀跡の方向が発掘基準線に一致し、柱穴が一辺1.0ｍ～1.2ｍの方形で、埋土が黒色土と黄褐色地山土との互層をなすことなどがあげられる。これらは、四面廂付きの瓦葺き建物を正殿とし、その西に桁行の長い南北棟建物を柱筋を揃えて２棟並べ、これらの建物とそれに接続する一本柱列による塀によって、方形に区画した一郭を形成している。区画の規模は東西が52.54ｍで、南北は東辺の長さから約60.6ｍと推定された。また、四面廂付き建物の東には身舎の北側柱列に柱筋が一致する東西棟の建物を配している。

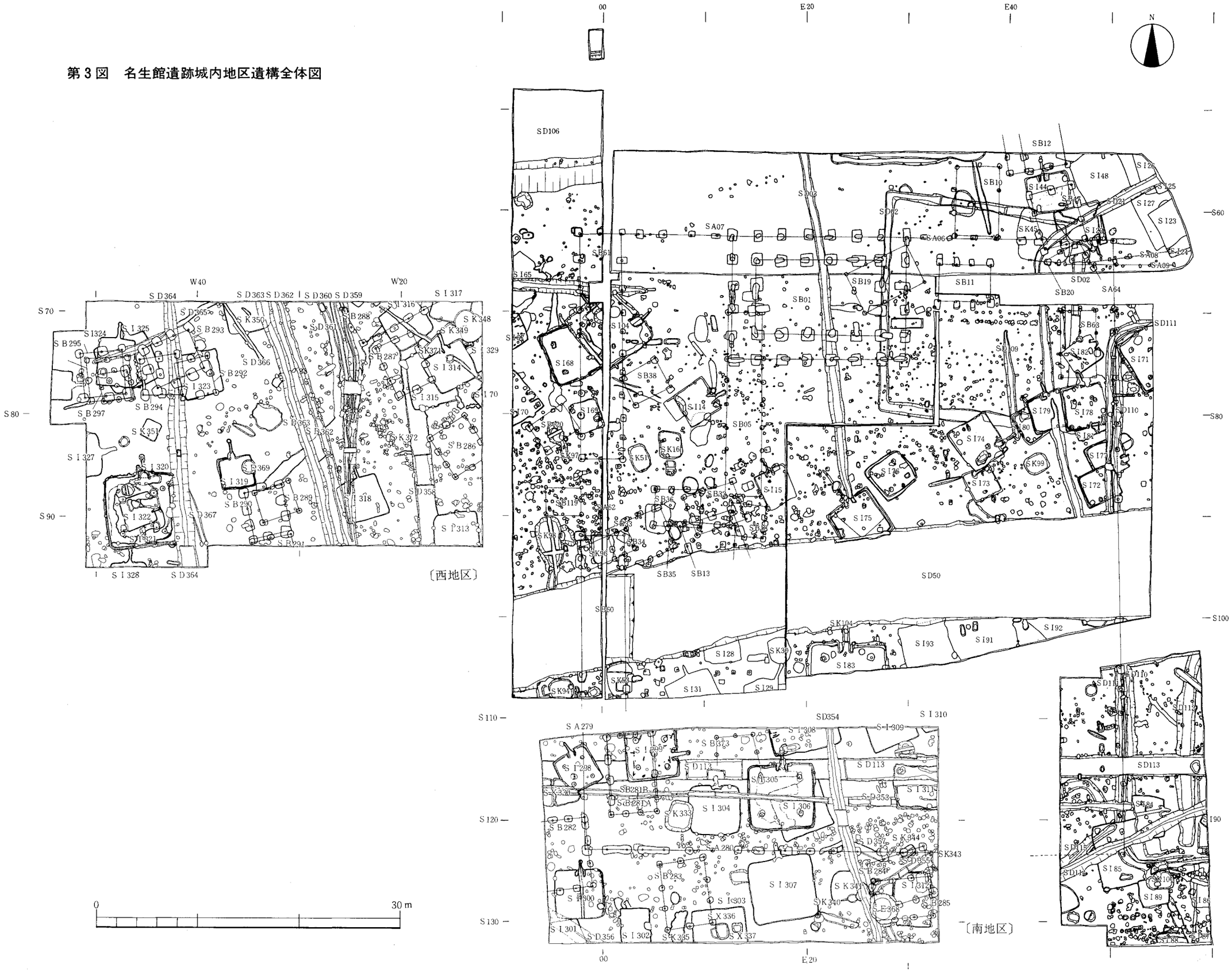
〔C_1期〕　８世紀後半頃の時期で、掘立柱建物跡２と溝１がある。この時期の遺構の特徴としては、建物跡・溝跡の方向が発掘基準線にほぼ一致し、建物跡の柱穴が１辺0.5ｍ～0.7ｍの方形でＢ期に比べてやや小さいことなどがあげられる。

〔C_2期〕　８世紀後半から９世紀の時期で、掘立柱建物跡９、竪穴住居跡12、溝４がある。この時期の建物跡の特徴としては、方向が発掘基準線に対し北で西へ12度～38度ほど振れており、柱穴が１辺0.6ｍほどの方形で、埋土が暗褐色土または褐色土であることなどがあげられる。

〔Ｄ期〕　15世紀頃の時期で、溝２がみられる。古代の遺構を切っており、中世大崎氏の名生城に関わるものである。

以上のような成果から、本遺跡は７世紀末から９世紀までの長期間にわたり継続的に営まれた官衙遺跡であり、C_2期の遺構から出土した「玉厨」の墨書土器などから古代玉造郡で中心的な役割を果たしていたものと推定された。

第３図　名生館遺跡城内地区遺構全体図



V．調　査　経　過

第５次調査は城内地区を対象とし、前章で述べたＢ期官衙中枢部のうち、まだ調査がおよんでいなかった南辺部分を検出して中枢部全体の規模・構造を確定することと、その西隣接地における官衙遺構の様相を把握することをおもな目的として実施した。

７月２日に発掘器材を搬入し、測量基準点をもとにして中枢部南辺部分(南地区)と中枢部西側(西地区)の２か所に調査区を設定した(第２図)。ついで７月３日に鍬入式を行い、ただちに南地区から表土剝ぎを開始した。

南地区では厚さ約20cmの表土(水田の耕作土)下が直接地山になっており、開田工事の際に遺構面がかなり削平を受けたものとみられた。表土剝ぎは７日に終了し、引き続き12日まで遺構検出作業を行ったところ、地山面で竪穴住居跡15、掘立柱建物跡７、塀跡２、土坑、溝、井戸跡などの遺構が多数検出された(第３図)。これらのうちＳＡ 279・280はＢ期官衙中枢部の西辺および南辺を区画する一本柱列による塀跡であり、これらの検出によりこの中枢部の規模が明確になったほか、建物配置もほぼ確定した。ただし、当初予想していた南門は検出されず、南辺には大規模な門は設けられていなかったことがわかり、あったとしても塀に取り付く棟門程度のものと推定された。この後、８月４日まで検出遺構の精査を行い、相互の新旧関係や各遺構の規模・構造・年代などの把握に努めた。その結果、精査を行った４棟の古代の竪穴住居跡はすべて８世紀前半のものであり、ＳＡ 279塀跡とＳＤ 113溝はこれより古く、ＳＢ 281・282建物跡はこれらより新しいことなどが判明した。また古代の遺構のほかには、古墳時代の竪穴住居跡も数棟みられた。

西地区については南地区の調査に並行して７月10日から表土剝ぎ、16日から20日まで遺構検出作業を行った。西地区も厚さ30cmの表土下がすぐ地山であり、この面で竪穴住居跡18、掘立柱建物跡12、土坑、溝、井戸跡など多数の遺構が検出された(第３図)。遺構は調査区の東端部および西半部に密集しており、とくに北西部では２棟の竪穴住居跡と３棟の掘立柱建物跡が重複していた。また、この付近の建物跡には倉庫とみられる総柱建物跡が数棟含まれており注目された。これらの遺構については７月24日から精査を行った。

各地区の遺構精査を行った後、南地区は８月５日から、西地区は８月24日から遣り方を設定し平面図を作成するとともに、写真撮影、補足調査、埋め戻し作業などを行い、９月20日に調査の一切を終了した。この間、８月２日には調査の成果を報道関係機関に発表し、８月４日には一般を対象とした現地説明会を開催した。

なお、今回の発掘面積は南地区800 m²、西地区1,000 m²の計1,800 m²である。

Ⅵ．発見された遺構と遺物

今回の調査で発見された遺構には、塀跡２、掘立柱建物跡19、竪穴住居跡33、土坑13、溝17、井戸跡２、墓２、などがある。これらはすべて地山面で検出された。以下では主要な遺構を中心としてその概要を南地区、西地区の順に説明する。

１　南　地　区

南地区では塀跡２、掘立柱建物跡７、竪穴住居跡15、土坑７、溝６、井戸跡１、墓２、などが検出されている(第４図)。

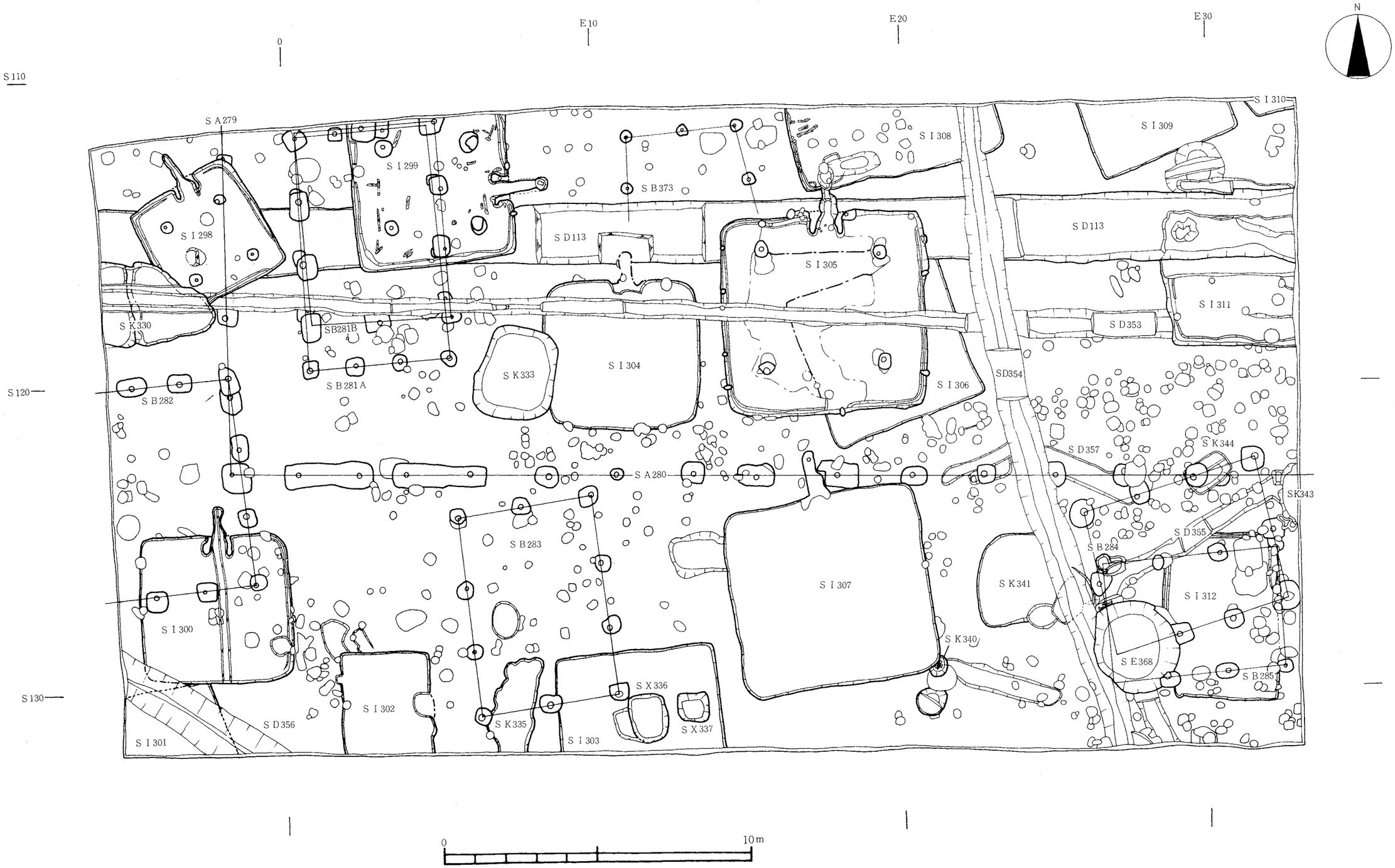
(1)　塀　　跡　（第４・５図）

城内地区Ｂ期の官衙中枢部を区画する一本柱列による塀跡である。今回は区画の南西隅から南辺部分の調査を行い、ＳＡ 279 西辺塀跡とこれに接続するＳＡ 280 南辺塀跡を検出した。このうちＳＡ 279 は柱筋がＳＢ60建物跡の西側柱列に一致している。また、ＳＡ 280 は、調査前に予想した通りＳＡ64東辺塀跡の南端に一致する位置で検出された。これらの塀跡の発見により、Ｂ期の官衙中枢部全体の規模、構造などが明確に把握できるようになった。

ＳＡ 279 塀跡　（第５図）

Ｂ期官衙の中枢部の西辺を区画する一本柱列による塀跡である。南端部約11ｍを検出した。この塀跡はＳＢ 282 建物跡、ＳＩ 298 住居跡、ＳＤ 113 ・ 353 溝と重複しており、ＳＢ 282、ＳＩ 298、ＳＤ 353 より古いが、ＳＤ 113 との新旧関係は把握できなかった。柱穴はＳＩ 298 と重複する部分を除く４個を検出しており、すべての柱穴で径20～25cmほどの円形の柱痕跡が確認された。柱間は南から2.49ｍ・2.59ｍ・5.13ｍ(２間分)である。塀跡の方向はＮ１°Ｗである。柱穴は80×60cmほどの長方形をなし、深さは南端の柱穴で65cmある。埋土は黒色土と地山ブロックを多量に含む黄褐色土が互層をなす。遺物は出土していない。

なお、第１・２次調査において、本塀跡の北で検出していたＳＢ60建物跡は本塀跡の検出により今回の調査区までは及んでいないことが判明し、その南妻は未調査部分である農道下に位置することが明らかになった。したがって、柱間寸法などからみてＳＢ60は東西２間、南北８間の南北棟と考えられる。


N
0
E10
E20
E30
S110
S120
S130
S A279
S I 298
S I 299
S B373
S D113
S I 305
S I 308
S I 309
S I 310
S D113
S I 311
S D353
S K330
SB281B
S B281A
S B282
S K333
S I 304
S I 306
SD354
S D357
S K344
SK343
S A280
S B283
S I 307
S K341
S B284
S D355
S I 312
S I 300
S K340
S E368
S B285
S X336
S X337
S I 302
S K335
S I 303
S D356
S I 301
0
10m

第４図　南地区全体図

ＳＡ 280 塀跡 （第４図）

Ｂ期官衙の中枢部の南辺を区画する一本柱列による塀跡である。西端から15間分約35ｍを検出した。この塀跡はＳＢ 284 建物跡、ＳＤ 357 溝、ＳＩ 307 住居跡、ＳＫ 343 ・ 344 土坑、ＳＤ 354 溝と重複しており、ＳＤ 357 より新しく、ＳＩ 307 ・ＳＫ 344 ・ＳＤ 354 よりも古い。

柱穴はＳＫ 343 と重複する東端部を除く15個を検出しており、うち14個の柱穴で径20～25cmほどの円形の柱痕跡が確認された。柱間は西から2.18ｍ・1.99ｍ・1.51ｍ・2.03ｍ・2.60ｍ・2.19ｍ・2.48ｍ・1.96ｍ・2.70ｍ・2.46ｍ・2.35ｍ・2.33ｍ・2.25ｍ・（２間分不明）となり、1.51～2.70ｍの間でかなりのバラツキがみられ平均は2.23ｍである。塀跡の方向はＥ１°Ｎで、ＳＡ 279 と直交する。柱穴は70×90cmほどの長方形をなすものが多く、深さは45～60cmである。西から２間目および４間目の柱穴では２個分の柱穴を途中まで溝状に接続させて掘り下げ、その後に個々の柱穴部分を深く掘り下げている。埋土はＳＡ 279 とほぼ同じである。

遺物は柱穴埋土から土師器杯・甕の破片が少量出土している。これらはいずれも非ロクロ調整で、杯は内面をヘラミガキ・黒色処理したもの（以下では内面をヘラミガキ・黒色処理したものを「内黒」と略述してゆく）である。

本塀跡の検出によって、Ｂ期の官衙中枢部の規模は東西が北辺で52.45ｍ、南辺で53.00ｍ、南北が東辺で60.64ｍ、西辺で60.61ｍであることが確定した。

なお、この南辺の塀に取り付く門の存在を予想し、精査を行ったが、明確な痕跡は検出されなかった。したがって、南辺には大規模な門は設けられなかったらしく、あったとしても棟門程度の小規模なものと考えられる。

(2) 掘立柱建物跡

ＳＢ 281 Ａ・Ｂ建物跡 （第５図）

調査区の北西部で検出した南北棟の掘立柱建物跡である。Ａ建物跡とＢ建物跡は同位置で重複しており、Ａ建物跡の方が古い。また、これらの建物跡はＳＩ 299 住居跡、ＳＤ 113 ・ 353 溝跡とも重複しており、ＳＤ 113 ・ＳＩ 299 より新しく、ＳＤ 353 より古い。

ＳＢ 281 Ａは桁行４間、梁行３間の建物跡である。柱穴は12個検出しており、うち８個で径15～20cmの円形の柱痕跡を確認している。規模は桁行が東から２間目で7.56ｍ、梁行が南妻で4.36ｍで、柱間は桁行の南端１間分が1.95ｍ、梁行は南妻で西から1.56ｍ・1.41ｍ・1.39ｍである。建物の方向は東から２間目の柱筋で測るとＮ５°Ｗとなる。柱穴は一辺が50cmほどの方形のものが多く、深さは30～40cmである。埋土は地山の小ブロックを多

量に含む、褐色土と極暗褐色土が互層をなす。遺物は出土していない。

ＳＢ 281 Ｂは桁行３間、梁行２間の建物跡である。すべての柱穴を検出しており、うち９個で径15～20cmの円形の柱痕跡を確認している。規模は桁行が東側柱列で6.38ｍ、梁行が北妻で4.58ｍで、柱間は桁行が東側柱列で南から2.24ｍ・1.98ｍ・2.17ｍ、梁行が北妻で西から2.24ｍ・2.35ｍである。建物の方向は東側柱列で測るとＮ５°Ｗとなる。柱穴は80×60cmほどの長方形のものが多く、深さは約55cmである。埋土は地山の小ブロックを含む黒褐色土、極暗褐色土、褐色土が互層をなす。遺物は柱穴埋土から非ロクロ調整の土師器甕と、須恵器甕の破片が少量出土している。

Ａ・Ｂ両建物跡は、同位置に連続して建てられていること、北妻の位置と規模および建物の方向が一致することなどから、桁行４間、梁行３間のＡ建物を後に桁行３間、梁行２間のＢ建物に建て替えたものとみられる。柱穴はＢ建物の方が大きく、深さもやや深い。

ＳＢ 282 建物跡　（第４図）

調査区の西端で検出した南北３間、東西３間以上で、さらに西側に延びる掘立柱建物跡である。この建物跡はＳＡ 279 塀跡、ＳＩ 300 住居跡と重複しており、これらより新しい。

柱穴は８個検出しており、いずれにも径15～20cmの円形の柱痕跡が認められた。規模は南北が6.81ｍ、東西が 4.5 ｍ以上で、柱間は南北が東側柱列で南から2.27ｍ・2.19ｍ・2.34ｍ、東西は北側柱列で東から1.61ｍ・1.63ｍである。建物跡の方向は東側柱列で測るとＮ７°Ｗとなる。柱穴は80×60cmほどの長方形のものが多く、深さは25～40cmである。埋土は地山ブロックを含む極暗褐色土や暗褐色土が互層をなす。遺物は出土していない。

なお、本建物跡の北側柱列の柱筋はさきに述べたＳＢ 281 Ａ建物跡の南側柱列とおおむね一致し、両者の間隔は約 2.6 ｍである。

ＳＢ 283 建物跡　（第４図）

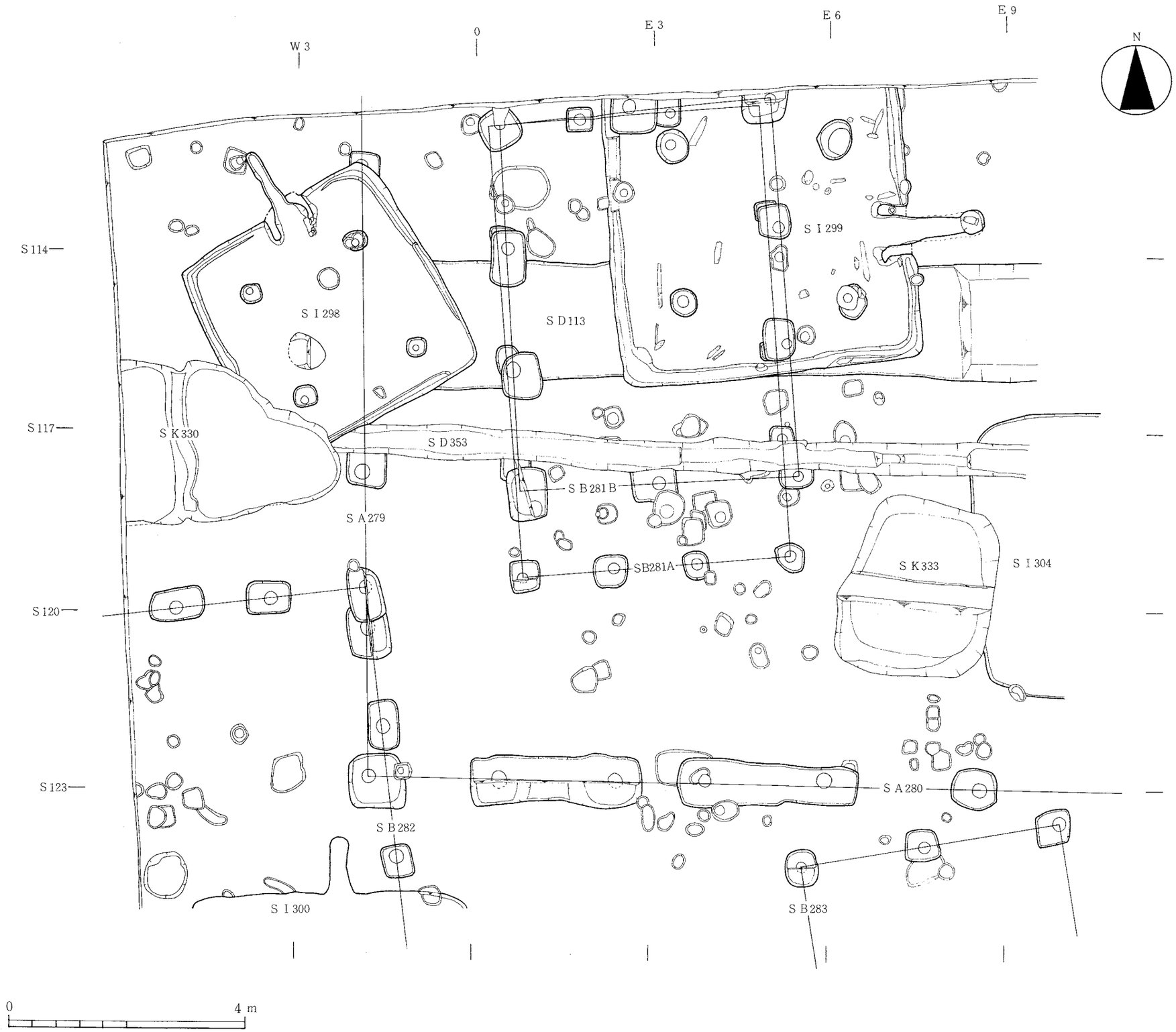
調査区の西半部南寄りで検出した桁行３間、梁行２間の南北棟掘立柱建物跡である。この建物跡はＳＩ 303 住居跡、ＳＫ 335 土坑と重複しており、これらより新しい。

柱穴はすべて検出しており、いずれにも径約20cmの円形の柱痕跡が認められた。規模は桁行が東側柱列で6.52ｍ、梁行が南妻で4.49ｍで、柱間は桁行が東側柱列で南から2.16ｍ・2.14ｍ・2.25ｍ、梁行が南妻で西から2.26ｍ・2.23ｍである。建物跡の方向は東側柱列で測るとＮ７°Ｗとなる。柱穴は一辺が50cmほどの方形のものが多く、深さは35～40cmである。埋土は地山の小ブロックを多量に含む黒褐色土と暗褐色土が互層をなす。

遺物は柱穴の埋土から非ロクロ調整の土師器杯と内黒の甕の破片が少量出土している。

ＳＢ 284 建物跡　（第４図）

調査区の南東隅付近で検出した桁行３間、梁行２間の東西棟掘立柱建物跡である。この



第５図　南地区北西隅付近検出遺構

建物跡はＳＩ 312 住居跡、ＳＢ 285 建物跡、ＳＡ 280 塀跡、ＳＫ 344 土坑、ＳＤ 355 溝、ＳＥ 368 井戸と重複しており、ＳＩ 312・ＳＢ 285・ＳＡ 280・ＳＫ 344 より新しく、ＳＤ 355・ＳＥ 368 よりも古い。

柱穴はＳＥ 368 と重複する南西隅の柱穴を除く９個を検出しており、うち８個で径20～30cmの円形の柱痕跡を確認している。規模は桁行が北側柱列で5.84ｍ、梁行が東から２間目で4.62ｍで、平面形は若干歪んでいる。柱間は桁行が北側柱列で西から1.85ｍ・1.94ｍ・2.07ｍ、梁行が東妻の北側が2.45ｍである。建物跡の方向は北側柱列で測るとＥ17°Ｎとなる。柱穴は70×70cmほどの隅丸方形ないし円形をなすものが多く、深さは50～60cmである。埋土は地山の小ブロックや細粒を含む黒褐色土や暗褐色土が互層をなす。

遺物は柱穴の埋土から土師器杯・甕、須恵器杯・甕・瓶の破片が出土している。土師器はいずれも非ロクロ調整のものである。須恵器には底部を手持ちヘラケズリした杯がみられるほか、長頸瓶や甕の破片もある。

ＳＢ 285 建物跡　（第４図）

調査区の南東隅付近で検出した桁行３間、梁行２間と推定される東西棟掘立柱建物跡である。ＳＩ 312 住居跡、ＳＢ 284 建物跡、ＳＤ 354・355 溝、ＳＥ 368 井戸跡と重複しており、ＳＩ 312 より新しく、ＳＢ 284・ＳＤ 355・ＳＥ 368 より古い。

柱穴は南西隅および両妻棟通り下の柱穴を除く７個を検出しており、うち４個で径15～30cmの円形の柱痕跡を確認している。柱痕跡が判然としなかった柱穴ではその中央に柱位置を想定すると、規模は桁行が北側柱列で約 5.6 ｍ、梁行が東から１間目で3.84ｍで、柱間は桁行が南側柱列で東から1.88ｍ・1.95ｍとなり、梁行が不明である。建物跡の方向は南側柱列で測るとＥ５°Ｎとなる。柱穴は40～60cmほどの楕円形ないし方形をなすものが多く、深さは断ち割り調査を行っていないため不明である。埋土は地山の細粒を含む極暗褐色土、暗褐色土などで、柱痕跡は地山の細粒や焼土・木炭を少量含む暗褐色土で埋まっている。

遺物は柱穴の埋土から土師器杯・甕、須恵器杯・蓋・甕の破片が出土している。土師器はすべて非ロクロ調整のもので、須恵器杯には底部を手持ちヘラケズリしたものがみられる。

ＳＢ 373 建物跡　（第４図）

調査区の北端中央部で検出した東西２間、南北２間以上の掘立柱建物跡である。南側部分がＳＤ 113 溝跡、ＳＩ 304・305 住居跡によって壊されたと推定されることから、この建物跡はこれらよりも古いものと考えられる。

柱穴は北側柱列を含む５個を検出しており、いずれにも径約13cmの円形の柱痕跡が確認

された。平面形にはかなりの歪みがみられ、東側柱でとくに著しい。規模は東西が北側柱列で3.51m、南北が2.5m以上である。柱間は東西が北側柱列で西から1.80m・1.71m、南北が西側柱列の北1間目で1.65mである。建物の方向は歪みが大きいため各辺で異なる。柱穴は径40cmほどの円形をなすものが多く、深さは断ち割り調査を行っていないため不明である。埋土は地山の細粒を含む黒褐色土である。遺物は出土していない。

(3) 竪穴住居跡

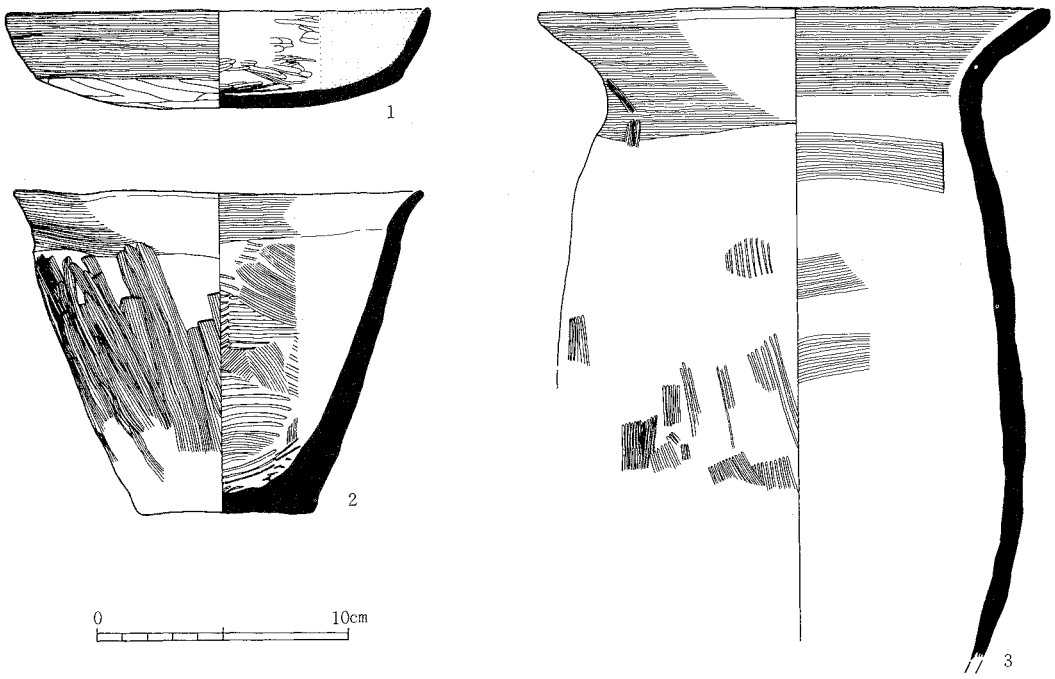
竪穴住居跡は15棟検出している(ＳＩ 298 ～ 312)。これらの住居跡のうち、今回全体の精査を行ったのはＳＩ 298・299・305の3棟だけであり、他については部分的な精査ないしは平面確認のみで埋め戻した。各住居跡の検出状況、重複関係、平面形、規模、構造、方位などは表2に示したとおりである。以下、全体の精査を行った3棟の住居跡を中心に概要を述べる。

ＳＩ 298住居跡 (第5図)

調査区の北西隅で全形を検出した竪穴住居跡である。この住居跡はＳＤ 113溝、ＳＡ 279塀跡、ＳＫ 330土坑、ＳＤ 353溝と重複しており、ＳＤ 113・ＳＡ 279より新しく、

遺構No.	検出部分	重複関係	平面形	規模	住居内施設				方向	備考
					床面	主柱穴	周溝	カマド		
ＳＩ298	全形	ＳＤ113 ＳＡ279→ＳＩ298→ＳＫ330→ＳＤ353	方形	東辺約4.0m 北辺約3.7m	全面貼床	対角線上に4個	ほぼ全周、幅10～15cm、深さ約5cm	北辺中央	東辺でN32°W	全面精査
ＳＩ299	ほぼ全形	ＳＤ113→ＳＩ299→ＳＢ281Ａ→ＳＢ281Ｂ→ＳＤ353	方形	南辺約5.0m 西辺5.0m以上	全面貼床	対角線上に2個	検出部全周、幅15～20cm、深さ約12cm	東辺中央 南寄り	南辺でE6°N	全面精査
ＳＩ300	全形	ＳＡ279→ＳＢ282 ＳＩ301→ＳＩ300→ＳＤ356	隅丸方形	東辺約4.8m 北辺約4.8m	壁周囲を貼床	東半部に2個	東辺部、幅10～15cm深さ約3cm	北辺中央	東辺でN2°W	東半部精査
ＳＩ301	北東部	ＳＡ279→ＳＢ282 ＳＩ301→ＳＩ300→ＳＤ356	方形？	南北2.5m以上 東西3.0m以上	？	？	？	？	東辺でN17°W	未精査
ＳＩ302	ほぼ全形	なし	長方形	北辺約3.0m 南北3.5m以上	？	？	？	？	北辺でE1°S	未精査 (古墳時代)
ＳＩ303	北半部	ＳＸ336・337 ＳＩ303→ＳＢ283	方形？	北辺約5.2m 南北3.5m以上	？	？	？	？	北辺でE6°N	未精査
ＳＩ304	全形	ＳＫ333 ＳＤ113→ＳＩ304→ＳＤ353	隅丸方形	東辺約4.5m 北辺約4.7m	？	？	？	北辺中央	東辺でN1°W	未精査
ＳＩ305	全形	ＳＩ308 ＳＩ306→ＳＤ113→ＳＩ305→ＳＤ353	方形	東辺約6.3m 南辺約6.4m	壁周囲を貼床	対角線上に4個	北東部以外、幅10～15cm、深さ約10cm	北辺中央	東辺でN2°W	全面精査 建て替え
ＳＩ306	全形	ＳＩ308 ＳＩ306→ＳＤ113→ＳＩ305→ＳＤ353	方形	南辺約5.3m 西辺約5.0m	？	？	？	東辺中央 ？	南辺でE21°N	未精査 (古墳時代)
ＳＩ307	全形	ＳＫ340 ＳＡ280→ＳＩ307	方形	東辺約6.2m 南辺約5.3m	？	？	？	北辺中央	東辺でN9°W	未精査
ＳＩ308	南半部	ＳＤ354 ＳＩ308→ＳＩ305	方形	南辺約6.8m 西辺2.8m以上	検出部分全面貼床	なし	西辺と南辺、幅5～10cm、深さ約5cm	？	南辺でE14°N	検出部精査 (古墳時代)
ＳＩ309	南半部	なし	方形	南辺約4.7m 西辺2.8m以上	？	？	？	？	南辺でE21°N	未精査
ＳＩ310	南西隅	なし	方形？	南辺1.3m以上 西辺0.7m以上	？	？	？	？	南辺でE18°N	未精査
ＳＩ311	ほぼ全形	ＳＩ311→ＳＤ113→ＳＤ353	長方形	西辺約4.5m 南辺4.1m以上	検出部分全面貼床	なし	西辺と南辺、幅10～15cm、深さ約5cm	？	南辺でE1°S	検出部精査 (古墳時代)
ＳＩ312	全形	ＳＫ343 ＳＩ312→ＳＢ285→ＳＢ284→ＳＤ355→ＳＥ364	長方形	南辺約3.4m 南北約5.4m	全面貼床	なし	北辺と西辺、幅15～20cm、深さ2～3cm	なし	南辺でE3°S	全面精査 (古墳時代)

表2　南地区検出竪穴住居跡一覧



1	床　面	土師器	杯		3	床　面	土師器	長胴甕	頸部にわずかな段
2	床　面	土師器	小型甕	頸部に段					

第6図　ＳＩ 298住居跡出土遺物

ＳＫ 330・ＳＤ 353より古い。

南西隅がＳＫ 330・ＳＤ 353により壊されているものの、残存状況は良好で、壁の高さは25～30cmある。平面形はほぼ方形をなし、規模は東西約 3.7 m、南北約 4.0 mである。住居の方向は西辺で測るとＮ32°Ｗとなる。床面は全面が黒色土の小ブロックを少量含む黄褐色土により貼床されている。柱穴は住居の対角線上で4個検出しており、いずれも径30cmほどの円形で、柱痕跡は径10～15cmである。カマドは北辺の中央部に付設されている。貼床上面より粘土で構築されており、焚口部東側壁には土師器甕が埋め込まれて補強されている。内幅40cm、奥行約50cmで、奥壁は20cmほど立ち上がり、煙道に続いている。煙道は幅約20cm、長さ約１ｍで、底面は先端に向かって低くなっている。周溝は貼床上面より掘り込まれており、幅10～15cm、深さ約５cmで、断面は緩やかなＵ字形をなす。周溝内の堆積土は地山の細粒を多量に含む黄褐色土で、住居跡内の堆積土とは区別される。その他、床面中央のやや南西寄りに径60cm、深さ10cmの皿状の浅いピットがみられた。

住居跡内の堆積土は５層に分けられる。第１層は地山の小ブロックを多量に含む黒褐色土で、住居跡のほぼ全面に分布し、南半部では直接床面を覆っている。第２層は凝灰岩粒

を少量含む暗褐色土、第３層は地山の細粒を少量含む褐色土で、いずれもカマド付近に堆積した層である。

遺物はカマド東側壁に埋め込まれた土師器甕のほかに、床面上のピット、床面、カマドや住居跡内の堆積土から多量の土師器、須恵器が出土している(第６図)。これらの中では土師器が圧倒的に多く、須恵器は堆積土１層から数点出土したにすぎない。土師器はすべて非ロクロ調整のものである。

カマド焚口部東側壁から出土した土師器甕は内外面をハケ目調整した長胴甕で、口頸部を欠くものである。床面上のピットから出土した土師器には体部下端の外面に軽い段をもち、口縁部外面をヨコナデした内黒の杯がみられる。床面からは土師器杯・甕が比較的多く出土した。杯には体部と底部の境に軽い段をもち、体部から口縁部にかけて若干内湾気味に短く立ち上がり、口縁部外面をヨコナデした内黒の丸底杯(図１)がある。また甕には、口縁部が大きく外反する長胴甕(図３)と、頸部に軽い段をもち、口縁部がわずかに外反する小型甕(図２)とがみられる。両者とも口縁部は内外面にヨコナデ、体部は内面がナデ、外面がハケ目調整されている。住居内の堆積土からは床面出土のものと同じ特徴をもつ杯・甕のほかに、体部外面をヘラミガキした内黒杯なども出土している。

ＳＩ 299 住居跡 (第５図)

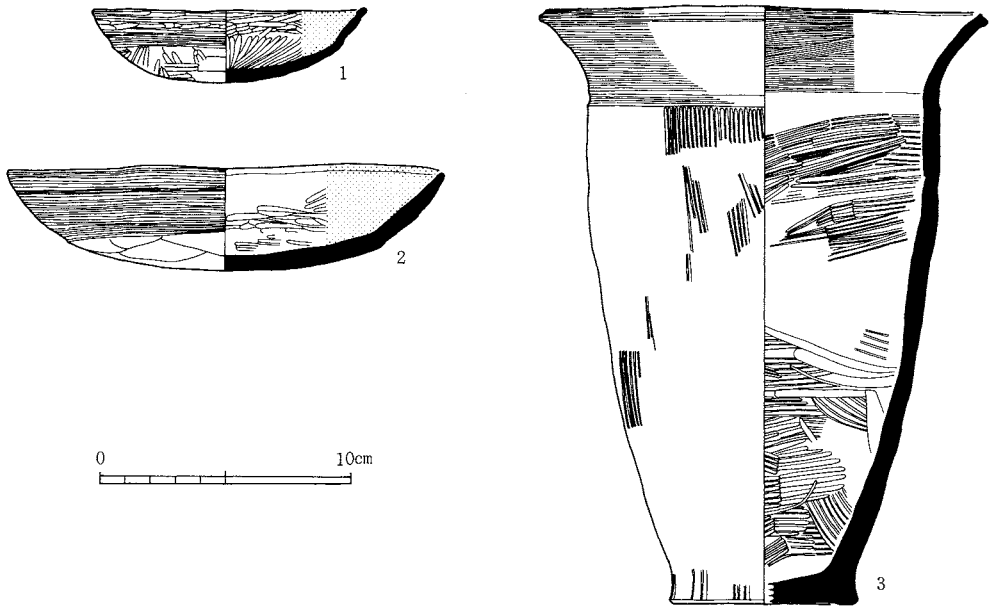
調査区の北西部でほぼ全形を検出した竪穴住居跡で、北辺部は調査区外に位置する。この住居跡はＳＤ 113 溝、ＳＢ 281 Ａ・Ｂ建物跡、ＳＤ 353 溝と重複しており、ＳＤ 113 溝より新しく、ＳＢ 281 Ａ・Ｂ、ＳＤ 353 溝より古い。

残存状況は比較的良好で、壁の高さは15～20cmある。平面形はほぼ方形で、規模は東西が約５ｍであり、南北は柱穴の位置などから、5.5ｍほどと推定される。住居の方向は南辺で測るとＥ６°Ｎとなる。床面は全面が地山ブロックを含む極暗褐色土により貼床されている。柱穴は住居のほぼ対角線上で４個検出している。いずれも径50～70cmの円形で、うち西側の２個に径20cmの円形の柱痕跡、東側の２個には柱の抜き取り穴が認められた。また、カマド南北の壁際にはほぼ対称の位置に20×15cmほどの楕円形の柱穴がみられた。カマドは東辺のやや南寄りに付設されており、粘土で構築されている。内幅は約50cmで、奥壁の立ち上がりがなく、平坦なまま先端に煙出し孔をもつ煙道へと続いている。煙道は幅約40cmでカマドの焚口から煙道の先端までは約 1.9 ｍある。煙出し孔は径約40cm、深さ50cmである。カマド内にはスサ入り焼粘土が多量に落ち込んでいることから、天井部はスサ入り粘土で構築されていたことが知られた。また、煙出し孔には半裁された土師器甕が落ち込んでいた。周溝はほぼ全周しており、幅が15～20cm、深さ約12cmで、断面はＵ字形をなす。周溝内の堆積土は地山ブロックを含む極暗褐色土で、住居跡内の堆積土とは区別

される。その他、住居跡中央部付近の貼床上面には東西約50cm、南北約60cmの焼面および径25cmのピットがみられた。

住居跡内の堆積土は4層に分けられる。第1層は地山ブロックを含む暗褐色土で、住居跡のほぼ全面に分布し、中央部では直接床面を覆っている。第2層は地山の細粒を含む暗褐色土で、住居跡の西半部に分布している。第3層は地山ブロックを多量に含む明黄褐色土で、住居跡東半部に分布している。第4層は地山の細粒や炭化材、木炭を多量に含む暗褐色土で、床面のほぼ全面を直接覆っていることから、本住居の火災によって形成された層とみられ、その後に東側の2本の柱が抜き取られている。

遺物は床面および周溝、煙道、住居内の堆積土から土師器、須恵器などが多量に出土している(第7図)。量的には土師器が圧倒的に多く、須恵器は少い。土師器はすべて非ロクロ調整のものである。床面およびその直上からは土師器杯・甕、須恵器杯・蓋・甕が出土している。土師器杯にはＳＩ298住居跡床面出土のものと同じ特徴をもつ内黒の丸底杯(図2)などがみられる。須恵器はすべて破片である。周溝からは体部と底部の境にわずかな屈曲をもち、口縁部外面をヨコナデした後軽いヘラミガキを加えた土師器の内黒小型杯(図1)や、泥岩質の砥石が出土している。杯には内面に油煙状の付着物がみられる。煙道煙出し孔の底面付近からは半裁された状態の土師器甕(図3)が出土した。口縁部がゆるや



1	周溝埋土	土師器	杯	内面に油煙状の付着物	3	煙出し孔	土師器	甕	頸部に段、半裁
2	床面直上	土師器	杯						

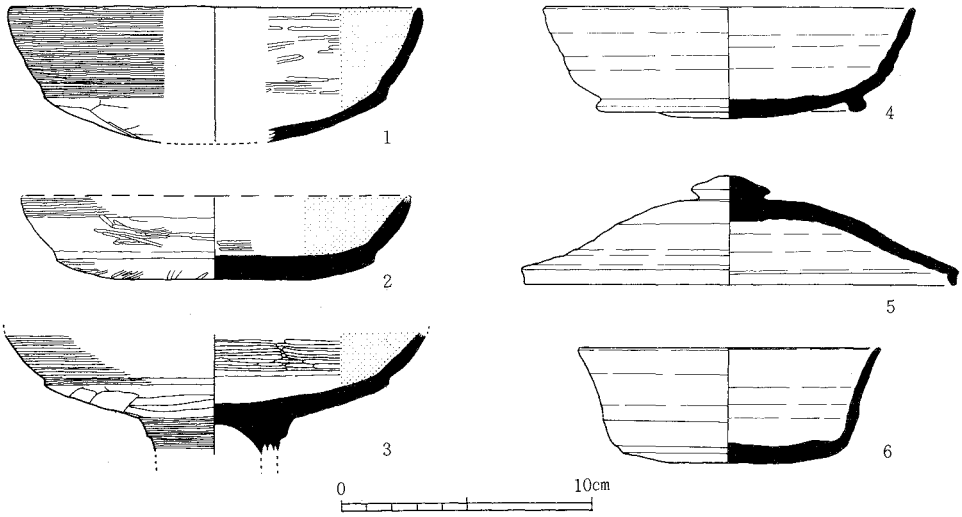
第7図　ＳＩ299住居跡出土遺物

かに外反し、頸部に軽い段をもつ長胴甕で、口縁部はヨコナデ、体部は内外両面がハケ目調整されている。堆積土各層からも比較的多量の土師器と少量の須恵器が出土しているが、いずれも破片のため、細かな特徴は不明である。なお、本住居跡からは須恵系土器の破片が少量出土しているが、堆積土には上面から掘りこまれた柱穴や小ピットが多数みられたことからそれらからの混入とみられる。

ＳＩ 300 住居跡　（第４図）

調査区の南西隅付近で全形を検出した竪穴住居跡である。この住居跡はＳＢ 282 建物跡、ＳＩ 301 住居跡、ＳＤ 356 溝と重複しており、ＳＩ 301 より新しくＳＢ 282・ＳＤ 356 よりも古い。ＳＢ 282 建物跡の柱穴が浅いため、本住居跡については東半部しか精査を行っていない。平面形、規模、方向などは表に示したとおりである。

遺物は住居跡東半部の床面、および住居跡堆積土中から土師器、須恵器、瓦などが出土している(第８図)。量的には土師器が大部分を占め、他の遺物は少ない。土師器はすべて非ロクロ調整のものである。床面からは土師器杯・高杯・甕、須恵器杯・高台杯・蓋・甕が出土している。土師器杯には口縁部と底部の境の内外に小さな屈曲をもち、口縁部外面をヨコナデ、底部をヘラケズリ調整した内黒の丸底杯(図１)、口縁部と底部の境の外面に段をもち、口縁部外面をヨコナデした後口縁部から底部にかけて軽くヘラミガキ調整した内黒の丸底杯(図２)がみられる。高杯は図１とほぼ同じ特徴をもつ杯に脚部が付けられたものである(図３)。甕では住居跡の北東隅付近の床面から口縁部が大きく外反し、体部は



1	床　面	土師器	杯	底部欠損	4	床　面	須恵器	高台杯	底面突出
2	床　面	土師器	杯	口唇部欠損	5	床　面	須恵器	蓋	扁平な擬宝珠形つまみ
3	床　面	土師器	高　杯	口縁部・脚部欠損	6	第２層	須恵器	杯	丸底風

第８図　ＳＩ 300 住居跡出土遺物

外面が縦方向のヘラミガキ、内面がヘラナデ調整された底部を欠く長胴甕が据えられた状態で出土している。須恵器には底部を回転ヘラケズリ調整した杯や、口径が大きく丸底風の底部に低い高台がついた高台杯(図４)、扁平な擬宝珠形のつまみをもち、口端部が直角に下方に折れ曲がる蓋(図５)などがみられる。図10の高台杯の底部は回転ヘラケズリ調整され、中央部は高台よりも下方に突出しており特徴的である。堆積土からは底部から口縁部にかけて直立気味にわずかに外反する須恵器杯(図６)などが出土した。瓦は堆積土から出土したもので、丸瓦の破片である。

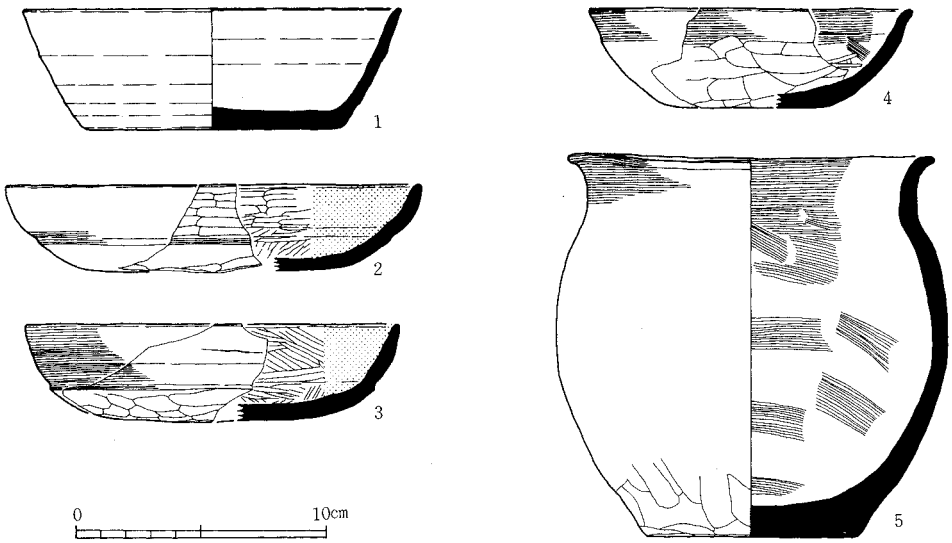
ＳＩ 305住居跡　(第４図)

調査区の中央部で全形を検出した竪穴住居跡である。この住居跡はＳＩ 306・308住居跡、ＳＤ 113・353溝と重複しており、ＳＩ 306・ＳＩ 308・ＳＤ 113溝より新しくＳＤ 353より古い。

残存状況は良好で、壁の高さは30～38cmほどある。平面形は方形であり、規模は東西約6.4ｍ、南北約6.3ｍである。住居の方向は東辺で測るとＮ２°Ｗとなる。床面には壁周辺に１～２ｍ幅の掘り方がみられ、この部分は貼床されているが、中央部は地山をそのまま床としている。そのため、地山の床面部分では本住居跡よりも古いＳＩ 306やＳＤ 113の輪郭が明瞭に確認された。主柱穴は住居の対角線上で４個検出している。いずれにも２時期の重複がみられることから、本住居は一度建て替えられたことが知られる。新しい方の柱穴は径約50cmの不整円形をなし、柱痕跡は径約20cmの円形である。また住居の壁際には約1.5ｍの間隔で径約20cmの壁柱穴とみられる小柱穴が計13個確認された。カマドは北辺中央部に灰白色粘土で構築されている。このカマドは一度造り替えられており、当初のものは住居の床面をカマドの底面としているが、新しい方のカマドでは焼土や凝灰岩粒を含む暗赤褐色土でカマド底面のレベルアップを計り、その上面のほぼ中央に底径7.5cm、頭径5.0cm、長さ10.5cmの土製支脚を据えている。新しい方のカマドは内幅60cm、奥行1.2ｍ、奥壁の立ち上がり約10cmで、煙道は幅30cm、長さ約１ｍであり、先端に50×70cmほどの楕円形の煙出し孔をもつ。周溝は貼床上面より掘り込まれており、北壁東半部を除く部分に認められる。幅10～15cm、深さ約10cmで、断面は緩やかなＵ字形をなす。周溝内の堆積土は地山の細粒を多量に含む暗褐色土で、住居跡内の堆積土とは区別される。

住居跡内の堆積土は４層に分けられる。第１層は地山の細粒や凝灰岩粒を少量含む極暗褐色土で、住居跡のほぼ全面に分布しており、南壁付近を除き床面を直接覆っている。第２層は地山の細粒をごく少量含む黒褐色土、第３層は焼土を多量に含む暗赤褐色土、第４層は焼土を少量含む極暗褐色土でいずれも南壁付近に分布する。

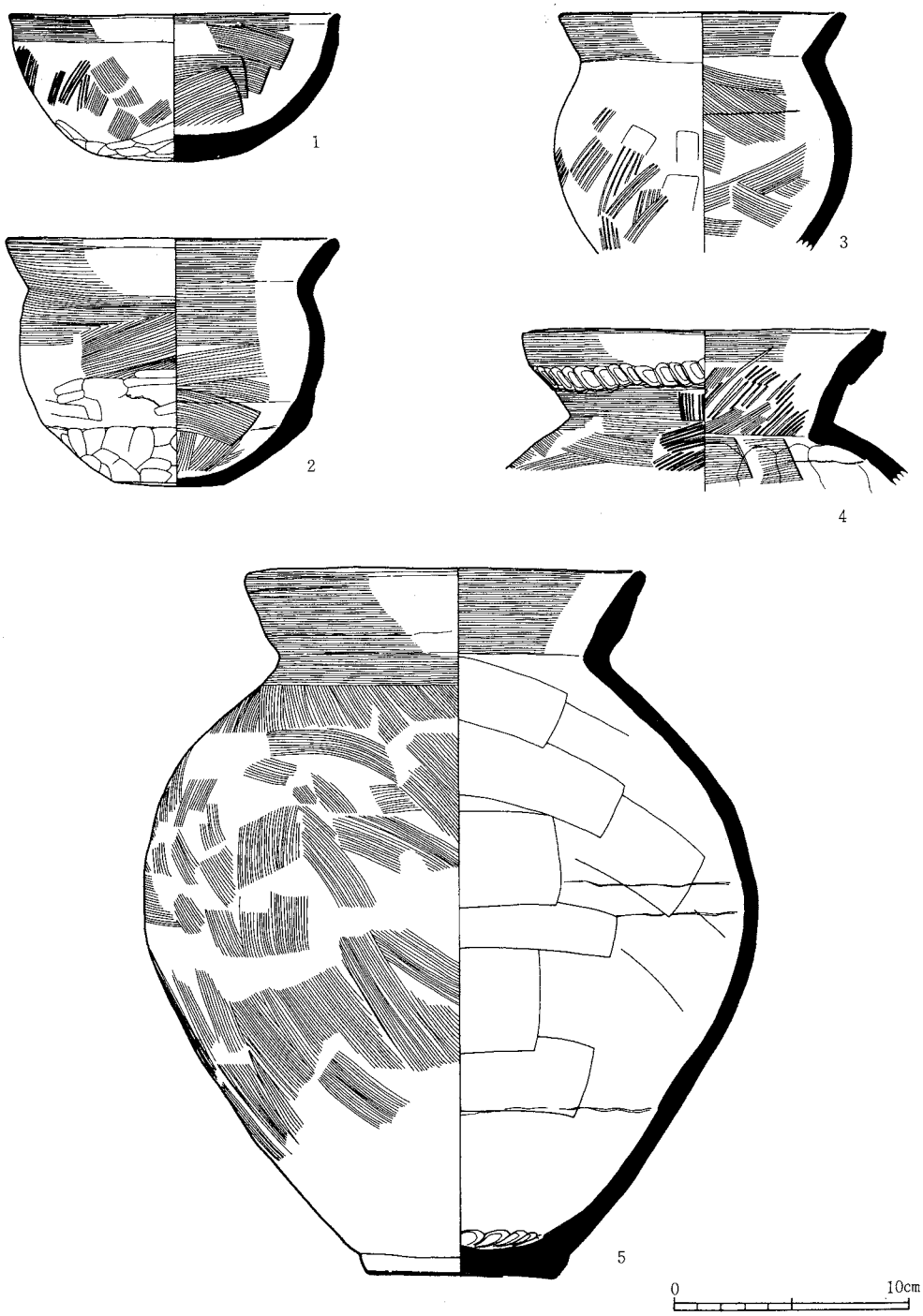
遺物は床面、新しい方の柱穴埋土、堆積土各層から土師器、須恵器、瓦、鉄製品などが



1	床　面	須恵器	杯	底部手持ちヘラケズリ	4	第 1 層	土師器	杯	非内黒、底面に木葉痕
2	第 3 層	土師器	杯	口縁部外面ヘラミガキ	5	第 2 層	土師器	甕	底面ヘラケズリ
3	第 1 層	土師器	杯						

第9図　S I 305住居跡出土遺物

出土している(第9図)。量的には土師器が圧倒的に多く、他の遺物は微量である。土師器はすべて非ロクロ調整のものである。床面からは外面がハケ目調整された土師器甕と、底径が大きく底部を手持ちヘラケズリした須恵器杯(図1)が出土している。柱穴埋土からは土師器杯・甕の破片が出土している。堆積土からは第1層を中心に比較的多量の土器が出土した。土師器には杯と甕がある。杯には口縁部と底部の境の内外にわずかな屈曲をもち、口縁部が内湾気味に短く立ち上がり、口縁部外面がヘラミガキ調整された内黒の丸底杯(図2)が第3層から、口縁部と底部の境に軽い段をもち、口縁部が内湾気味に短く立ち上がり、口縁部外面がヨコナデ調整された内黒の丸底杯(図3)と、体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部の内外両面がヨコナデ調整されてわずかに外反する古墳時代の非内黒杯(図4)が第1層から出土している。図4の非内黒杯の底部外面には木葉痕がみられる。各層から出土した他の破片資料も大部分がこれらとほぼ同様の特徴をもつものであり、他に内外両面がヘラミガキ・黒色処理されたものもみられる。甕では口縁部が直立気味に外反する胴張りの小型甕(図5)が第2層から出土している。ほかはすべて破片資料であるが、体部外面の調整ではハケ目調整のものとヘラケズリ調整のものとがみられ、前者がやや多い。須恵器はすべて破片資料である。杯でみると、底部が回転ヘラケズリ調整されているものが多い。ほかに堆積層からは円面硯、瓦、土製支脚、鉄鏃、刀子、鉄釘、泥岩質の砥石が出土している。円面硯は脚部の破片で、外面には縦位の平行線が3本刻まれている。



1	堆 積 土	土師器	杯	非内黒	4	堆 積 土	土師器	壺	複合口縁
2	堆 積 土	土師器	小型甕	内外丹塗り	5	堆 積 土	土師器	壺	煤付着
3	堆 積 土	土師器	小型甕						

第10図　S I 302 住居跡出土遺物

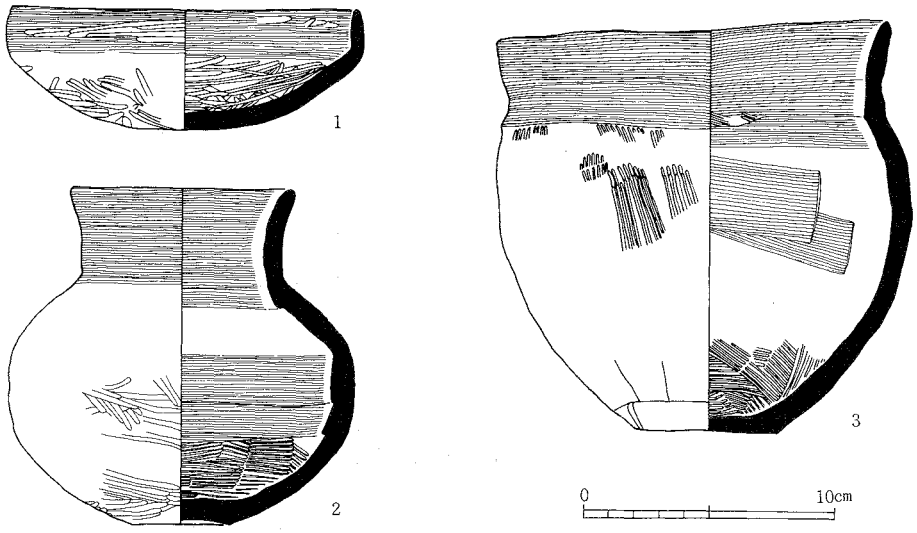
瓦は凸面に花文状の叩き目をもつ平瓦片である。また、土製支脚はカマドに据えられたものと類似する頭部破片である。

ＳＩ302住居跡出土遺物（第４図）

ＳＩ302は調査区の南西部でほぼ全形を検出した竪穴住居跡で、南辺部分は南側の調査区外に位置する。この住居跡については調査日程の関係などで精査を行っていないが、検出段階で東壁付近の堆積土中から古墳時代の土師器杯・甕がまとまって出土した(第10図)。杯には口縁部がヨコナデ調整され、外面がわずかに外反する、半球形の丸底杯(図１)がみられる。甕には体部が球形状で、口縁部が外傾する小型甕(図２・３)と、体部が倒卵形で口縁部がわずかに有段状をなす大型の甕(図５)がみられる。２は内外両面が丹塗りされており、体部下半には粘土の継ぎ足しによる小さな段がみられる。また５の体部外面には煤が付着している。壺には粘土を縁帯状に貼付してその下端に連続的にオサエを施した複合口縁の壺(図４)がみられる。

ＳＩ308住居跡出土遺物（第４図）

ＳＩ308は調査区の北東部で検出した竪穴住居跡で、大部分は北側の調査区外に位置している。この住居跡はＳＩ305住居跡、ＳＤ354溝と重複しており、いずれよりも古い。本住居跡は残存状況がきわめて悪く、検出段階で一部床面に達していたため、検出部分についてのみ精査を行ったもので、平面形、規模、方向などは表に示したとおりである。床面は貼床されており、その上面に多量の炭化材がみられることから、本住居は火災によっ



1	床　面	土師器	杯	丸底	3	床　面	土師器	甕	底面ヘラケズリ
2	土　坑	土師器	中型壺	内外丹塗り					

第11図　ＳＩ308住居跡出土遺物

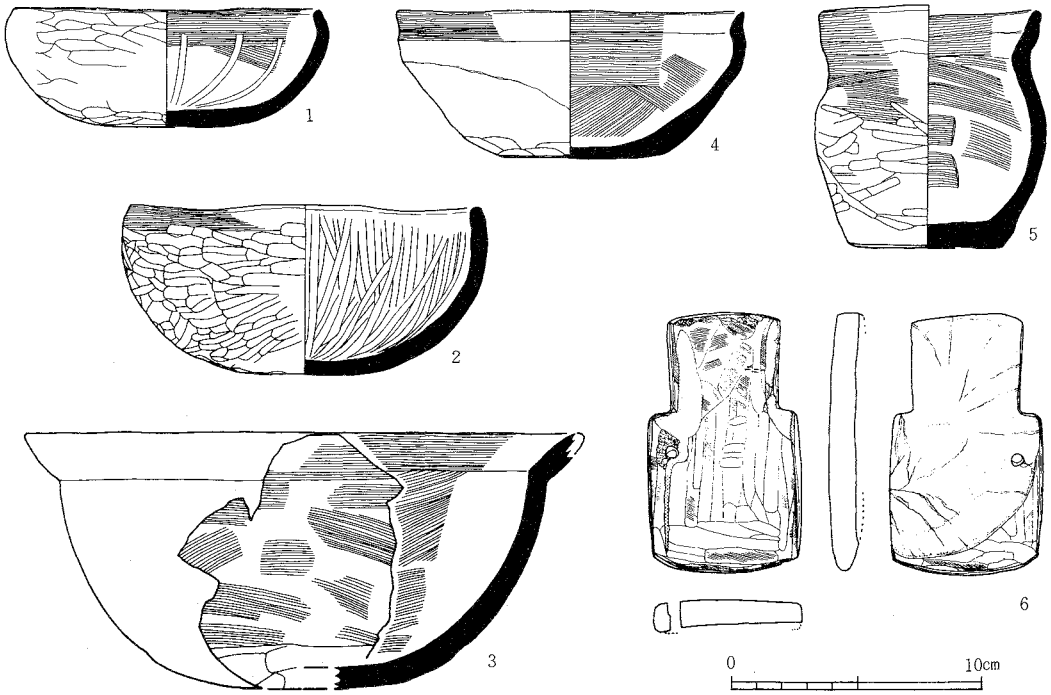
て廃絶したものと考えられた。

遺物は床面、住居跡南西隅付近の土坑などから古墳時代の土師器杯・甕・壺が少量出土している(第11図)。床面からは杯と甕が出土している。杯は底部から体部にかけてゆるやかに立ち上がり、口縁部が直立する丸底杯(図１)で、内外面ともに口縁部はヨコナデの後にヘラミガキ、体部はヘラミガキしている。甕は口縁部がわずかに外傾する胴張りの小型甕(図３)である。土坑からは球を押しつぶしたような体部に直立気味に外反する口縁部がつく中型の壺(図２)が出土している。底部は小さく、若干上底風をなす。内外両面が丹塗りされている。床面直上の堆積土中からは内外両面をヘラミガキした土師器高杯が出土している。

ＳＩ 312住居跡　(第４図)

ＳＩ 312は調査区の南東隅で全形を検出した竪穴住居跡である。この住居跡はＳＢ 284・285建物跡、ＳＤ 355溝、ＳＥ 368井戸跡と重複しており、いずれよりも古い。

残存状況はきわめて悪く、壁の高さは５cmほどである。平面形は長方形をなし、規模は東西約 3.4 m、南北約 5.4 mである。住居の方向は南辺で測ると約Ｗ３°Ｎとなる。床面



1	堆積土	土師器	杯	非内黒、内外丹塗り	4	堆積土	土師器	杯	非内黒、内外丹塗り
2	堆積土	土師器	杯	非内黒	5	堆積土	土師器	小型壺	
3	堆積土	土師器	杯	非内黒、内外丹塗り	6	堆積土	石製模造品	斧形品	大型

第12図　ＳＩ 312住居跡出土遺物

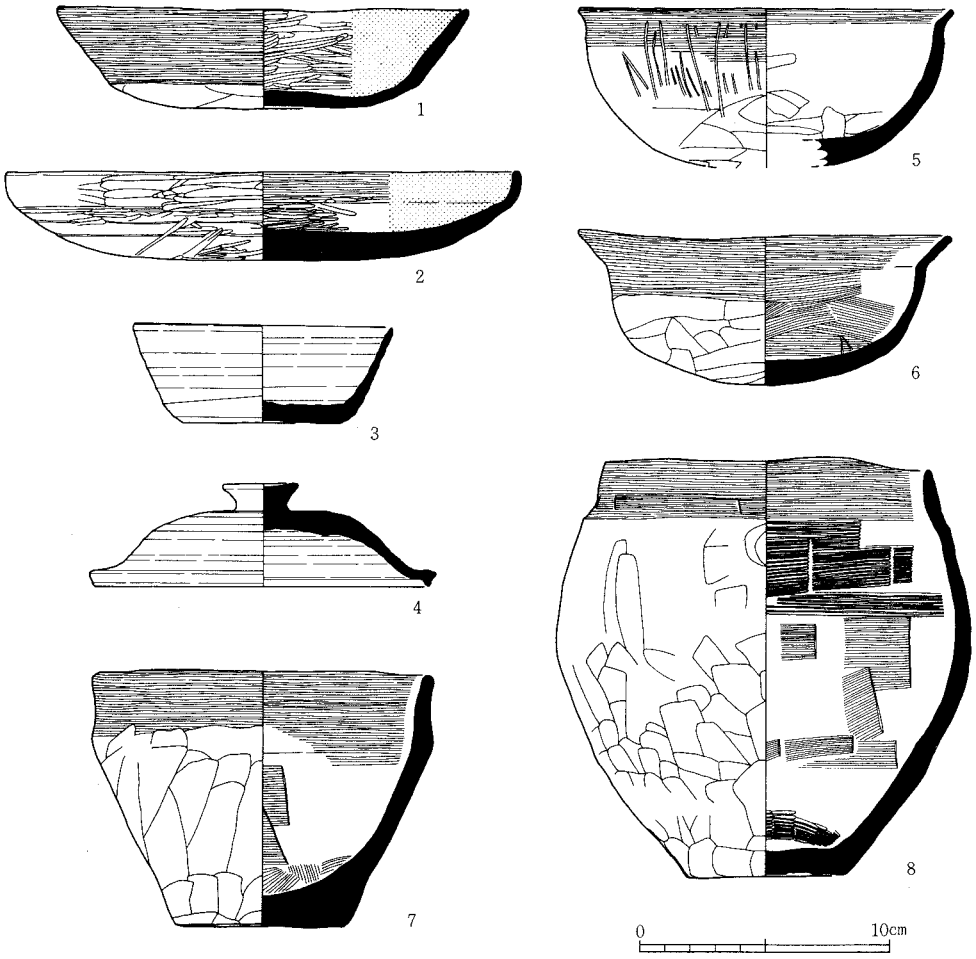
は全面が地山ブロックを多量に含む黒褐色土で貼床されている。柱穴は判然としない。カマドはみられず、住居跡中央部やや南寄りの床面には南北約50cm、東西約40cmの範囲に楕円形の焼け面が認められた。周溝は北辺、西辺部分に認められ、貼床上面から掘り込まれている。幅約20cm、深さ約３cmで、断面はＵ字形をなす。堆積土は１層のみで地山ブロックをやや多く含む暗褐色土である。

遺物は床面直上の堆積土中から古墳時代の土師器と斧形石製模造品が出土している。(第12図)。土師器には杯・甕・壺がある。杯には内湾しながらひらく丸底杯(図１・２)、内湾しながらひらき、口縁部が大きく外傾する丸底杯(図３)、内湾しながらひらき、口縁部がわずかに外傾する平底杯(図４)がみられる。図１・３・４は内外両面を丹塗りしている。甕はすべて破片であるが、この中にも内外両面を丹塗りしたものが２点みられる。壺は体部が算盤球状の広口の小型平底壺(図５)で、体部下半をヘラミガキしている。石製模造品は凸形をなす斧形品で、刃部幅6.1cm、長さ10.3cm、厚さ約1.0cmの大型で比較的薄手のものである(図６)。袋部にはえぐり込みなどの表現はない。刃部の側縁付近には貫通孔が１個みられる。一面が大きく剝落しており、材質は粘板岩と推定される。

(4) 土　　坑　(第４図)

土坑は７基検出している(ＳＫ330・333・335・340・341・343・344)。

ＳＫ330は調査区の北西隅付近で検出した不整形の土坑で、西はさらに調査区外まで延びている。この土坑はＳＩ298住居跡、ＳＤ113・353溝と重複しており、ＳＩ298・ＳＤ113より新しく、ＳＤ353より古い。規模は南北2.8ｍ、東西3.8ｍ以上で、深さは約30cmである。底面には南北に延びる低い高まりがあり、これによって東西２つの部分に分けられるが、堆積土が共通していることから一連の土坑とみられる。堆積土は16層認められ、いずれも東から西に向かって斜めに堆積している。遺物は堆積土中から土師器杯・皿・甕、須恵器杯・高台杯・蓋・甕、瓦が比較的多く出土している(第13図)。土師器はすべて非ロクロ調整のものである。杯には体部と底部の境にわずかな段をもち、口縁部が外傾する内黒の丸底風平底杯で、口縁部外面をヨコナデしたもの(図１)や、内外両面をヘラミガキ・黒色処理したものなどがみられる。皿には口縁部が内湾する内黒の丸底皿で、外面をヘラミガキしたもの(図２)がある。甕はすべて破片であるが、中には内黒のものもみられる。須恵器杯には静止糸切りで、体部下端と底部周縁を回転ヘラケズリしたもの(図３)や、底部全面を回転ヘラケズリないし手持ちヘラケズリしたものがみられる。蓋には中央が周縁部よりも凹む扁平なつまみをもち、口縁部が内側に折れ曲がるもの(図４)がある。



1	ＳＫ 330	土師器	杯		5	ＳＫ 335	土師器	杯	非内黒、内外丹塗り
2	ＳＫ 330	土師器	皿	口縁部外面ヘラミガキ	6	ＳＫ 335	土師器	杯	非内黒、内外丹塗り
3	ＳＫ 330	須恵器	杯	底部静止糸切り	7	ＳＫ 341	土師器	鉢	底面木葉痕
4	ＳＫ 330	須恵器	蓋		8	ＳＫ 341	土師器	甕	底面木葉痕

第13図　各土坑出土遺物

瓦は丸瓦片が１点みられる。

ＳＫ 333は調査区中央部やや西寄りで検出した隅丸方形の土坑である。この土坑はＳＩ 304住居跡と重複しておりこれより新しい。規模は東西約 2.6 m、南北約 3.1 mで、深さは約60cmである。底面はほぼ平坦で壁は比較的ゆるやかに立ち上がる。堆積土は５層認められる。遺物は堆積土中から土師器と須恵器が比較的多く出土している。いずれも破片であるが、土師器はすべて非ロクロ調整のもので杯には内黒のものや内外両面をヘラミガキ・黒色処理したものなどがみられる。

ＳＫ 335は調査区の西半部南端で検出した不整形の土坑で、さらに南に続いている。この土坑はＳＢ 283建物跡と重複しており、これより古い。この土坑については精査を行っていないため、詳細は不明であるが、堆積土である黒色土中から古墳時代の土師器杯と甕が数点出土した(第13図)。杯には体部が内湾しながらひらき、口縁部が外傾する丸底杯が２点みられ(図５・６)、これらはいずれも内外両面が丹塗りされている。

ＳＫ 340は調査区の南東部で検出した楕円形の小土坑である。ＳＩ 307住居跡と重複しており、それによって北西部が壊されている。規模は東西約60cm、南北約70cmで深さは約10cmである。土坑内には古墳時代の土師器甕が埋設されていた。この甕は体部が下膨らみの球形をなし体部下端に粘土の継ぎ足しによる軽い段をもつ平底のもので、口縁部は欠損している。体部上半の外面には強い火熱を受けた痕跡がみられる。

ＳＫ 341は調査区南東隅付近で検出したやや歪んだ楕円形の土坑である。この土坑はこれより新しいＳＤ 354溝と重複しており、東辺部分が壊されている。規模は南北約3.0ｍ、東西 2.6ｍ以上である。精査を行っていないため、深さや壁の状況などは不明である。遺物は堆積土である木炭を含むにぶい褐色土中から非ロクロ調整の土師器鉢と甕および鉄製紡錘車が出土している(第13図)。鉢には体部が外傾しながら立ち上がり、口縁部が外反気味に直立するもの(図７)、甕には胴部が内湾しながら立ち上がり口縁部が内傾するもの(図８)がある。いずれも口縁部はヨコナデしており、底部には木葉痕がみられる。

ＳＫ 343は調査区の東端中央部で検出した円形をなすとみられる土坑で、大部分は調査区外に位置している。ＳＤ 355溝と重複しており、それより新しい。またこの土坑はＳＡ 280塀跡の柱穴が位置する場所にあたっていることから、それを壊しているものと推定される。規模は南北 2.1ｍ以上で、深さは約50cmである。堆積土は上下２層認められ、上層が地山の細粒を含む暗褐色土、下層がやはり地山の細粒を含む褐色土である。遺物は堆積土中から非ロクロ調整の土師器杯・甕および須恵器杯・甕が少量出土している。いずれも破片であるが、土師器には口縁部外面をヘラミガキした内黒杯がみられる。また須恵器杯には底部を回転ヘラケズリや手持ちヘラケズリしたものがある。

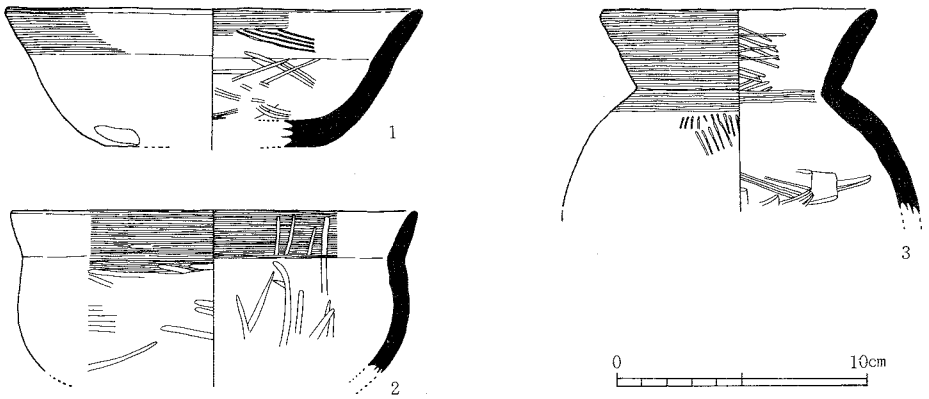
ＳＫ 344は調査区の東端中央部付近で検出した隅丸長方形の土坑である。この土坑はＳＡ 280塀跡、ＳＢ 284建物跡と重複しており、ＳＡ 280より新しく、ＳＢ 284より古い。

規模は長辺が約1.5ｍ、短辺が約1.0ｍで、深さは約50cmである。底面には若干の凹凸がみられ、壁はかなりゆるやかに立ち上がっている。壁の上半部約20cmほどの部分は全周にわたって火熱を受けて著しく赤変しており、本土坑内で火が使用されたことを示している。堆積土は5層認められた。第1層は木炭や焼土を含む暗褐色土層、第2層は焼土層、第3層は木炭層、第4層と第5層は木炭や焼土を全く含まないかたい極暗褐色土である。堆積状況や焼け面の位置関係からみて第4層上面を底面として火が使用されたものと考えられるがその目的は判然としない。遺物は堆積土中から非ロクロ調整の土師器甕と須恵器甕の破片が少量出土している。

(5) 溝　(第4図)

溝は主なものが6本検出されている(ＳＤ113・353～357)。

ＳＤ113は調査区の北端付近で検出した東西溝で、約49ｍ続き両端はさらに調査区外に延び、東延長部は第2次調査でも検出している。この溝は多くの遺構と重複しており、ＳＩ306・311住居跡より新しく、ＳＩ298・299・304・305住居跡、ＳＢ281Ａ・Ｂ建物跡、ＳＫ330土坑、ＳＤ354溝より古い。また、ＳＡ279塀跡とも重複するが、交差する部分が両者より新しいＳＩ298によって破壊されているため、新旧関係はとらえられなかった。溝の方向は真北に対してほぼ直交している。幅は上端で2.0～2.2ｍ、下端で1.5～1.8ｍ、深さは約50cmであり、断面は逆台形をなす。底面はわずかに東へ傾斜している。堆積土は3層認められ、いずれも地山のブロックや細粒を含む黒色土である。遺物



1	堆積土	土師器	杯	非内黒	3	堆積土	土師器	壺	
2	堆積土	土師器	杯	非内黒、内外丹塗り					

第14図　ＳＤ113溝出土遺物

は堆積土中から古墳時代の土師器杯・甕・壺が少量出土している(第14図)。これらの土器はこの溝と重複しているＳＩ 311住居跡部分から出土したものであり、本来はＳＩ 311に関連する土器とみられる。杯には体部が外傾し、口縁部がヨコナデ調整されたもの(図１)や体部が内湾しながら立ち上がり、口縁部が外傾する内外丹塗りのもの(図２)がみられる。また壺は口縁部が外傾し、体部が球形と推定されるもの(図３)である。

なお、この溝は規模・形状の共通性および堆積土の類似により西地区で検出したＳＤ 358南北溝と連続するものと推定される。

ＳＤ 353は調査区の中央やや北寄りで検出した東西溝で、約49ｍ続き両端はさらに調査区外に延び、東延長部は第２次調査でも検出している。この溝も多数の遺構との重複がみられ、ＳＡ 279塀跡、ＳＢ 281Ａ・Ｂ建物跡、ＳＩ 298・304・305・306・311住居跡、ＳＫ 330土坑より新しく、ＳＤ 354溝より古い。溝の方向はＥ２°Ｓである。幅は 0.5～1.0ｍ、深さは約30cmで、断面は逆台形をなす。底面はわずかに東に傾斜しており、凹凸が著しい。堆積土は上下２層に分けられ、上層は褐色土、下層は暗褐色土である。遺物は堆積土中から土師器、須恵器の破片が出土している。

ＳＤ 354は調査区の東半部で検出した南北溝で、約21ｍ続き両端はさらに調査区外に延びている。この溝も多くの遺構と重複しており、ＳＡ 280塀跡、ＳＩ 308住居跡、ＳＤ 113・353・355・357溝、ＳＫ 341土坑より新しく、ＳＥ 368井戸跡より古い。また位置的にはＳＢ 284・285建物跡とも重複するが、直接的な切り合いがなく新旧関係は不明である。溝の方向はおおむねＮ14°Ｗである。幅は約 1.0ｍ、深さは約60cmで断面はＵ字形をなす。底面は南へ傾斜している。堆積土は３層に分けられ、上２層がにぶい褐色土、最下層が暗褐色土である。遺物は堆積土中から土師器、須恵器の破片が出土している。須恵器の中には高台杯の底部外面を硯として転用したものもみられる。

ＳＤ 355は調査区の南東隅付近で検出した北辺と西辺からなるＬ字状の溝で、両端はさらに調査区外まで延びている。方形にめぐる溝の北西部分の可能性もある。この溝はＳＩ 312住居跡、ＳＢ 284・285建物跡、ＳＫ 343土坑、ＳＥ 368井戸跡と重複しており、ＳＩ 312・ＳＢ 284・ＳＢ 285より新しく、ＳＫ 343・ＳＤ 354・ＳＥ 368より古い。方向は北辺でＥ31°Ｎである。幅は約60cm、深さ約60cmで断面はＵ字形をなす。堆積土は２層に分けられ、上層が地山ブロックを多量に含む暗褐色土、下層が地山細粒を含む暗褐色土で、上層には小礫を多量に含む部分もみられる。遺物は堆積土中から土師器、須恵器の破

片が少量出土している。

ＳＤ 356は調査区の南西隅で検出した北西－南東方向の溝で、両端はさらに調査区外に延びている。この溝はＳＩ 300・301住居跡と重複しており、これらより新しい。溝の方向は約Ｅ31°Ｓである。幅約1.5ｍ、深さ約50cmで、断面はＶ字形をなす。堆積土は２層に分けられ、上層が暗褐色土、下層が極暗褐色土である。遺物は出土していない。

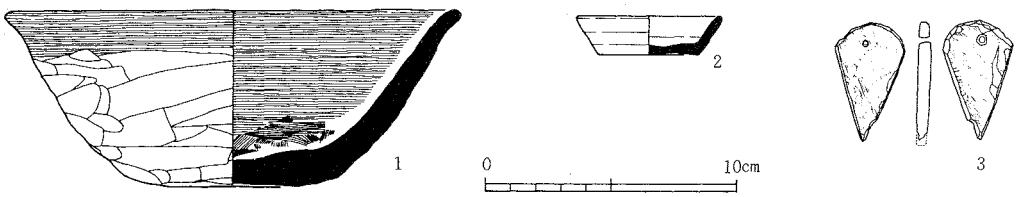
ＳＤ 357は調査区の東半部やや南寄りで検出した中央付近で屈曲する東西溝である。この溝はＳＡ 280塀跡、ＳＢ 284建物跡、ＳＤ 354溝と重複しており、いずれよりも古い。長さは屈曲部より西が約3.0ｍ、東が約4.0ｍで、幅は約80cmである。深さは1.0ｍ以上であるが底面まで掘り下げていないため正確には把握していない。溝中には地山の細粒を含む黒色土が堆積している。遺物は出土していない。

(6) 井　戸　跡　（第４図）

調査区の南東隅で円形のＳＥ 368素掘井戸跡を検出している。この井戸跡はＳＢ 284・285建物跡、ＳＩ 312住居跡、ＳＤ 354・355溝と重複しており、いずれよりも新しい。径約3.0ｍもある大規模な井戸跡で、側壁はほぼ垂直である。約６ｍの深さまで掘り下げたが、湧水が激しく、側壁の崩壊が著しいため底面まで掘り下げることはできなかった。遺物は堆積土中より土師器、須恵器が少量出土している。土師器はいずれも非ロクロ調整のもので、杯と甕がみられる。杯には体部が外傾し、口縁部をヨコナデしたもの（第15図１）や、口縁部をヘラミガキした内黒のものなどがみられる。須恵器にはヘラ切り無調整のものと、底部を回転ヘラケズリしたものとがある。

(7) 墓　（第４図）

調査区の南端中央付近で近世の土坑墓２基を検出している（ＳＸ 336・337）。これらは



1	ＳＥ 368	土　師　器	杯	非内黒	3	ＳＩ 306	石製模造品	剣形品	
2	ＳＸ 336	灯　明　皿		内外に油煙付着					

第15図　その他の遺構出土遺物

近接しておりいずれもＳＩ 303 住居跡を切ってつくられている。

ＳＸ 336 は東西約 1.2 ｍ、南北約 1.5 ｍの隅丸長方形の土坑墓で、深さは約30cmある。埋土は地山ブロックを含む暗褐色土で、底面付近からは劣化が進んだ人骨と共に寛永通宝38枚と煙管・毛抜き各１点および底部に糸切り痕をもつ灯明皿１点(第15図２)が出土している。

ＳＸ 337 は一辺約１ｍの方形の土坑墓で、深さは約40cmある。埋土はＳＸ 336 と同様で、やはり底面付近から劣化が進んだ人骨が出土した。

2　西　地　区

西地区では掘立柱建物跡12、竪穴住居跡18、土坑６、溝11、井戸１などが検出されている(第16図)。

(1)　掘立柱建物跡

ＳＢ 286 建物跡　(第16図)

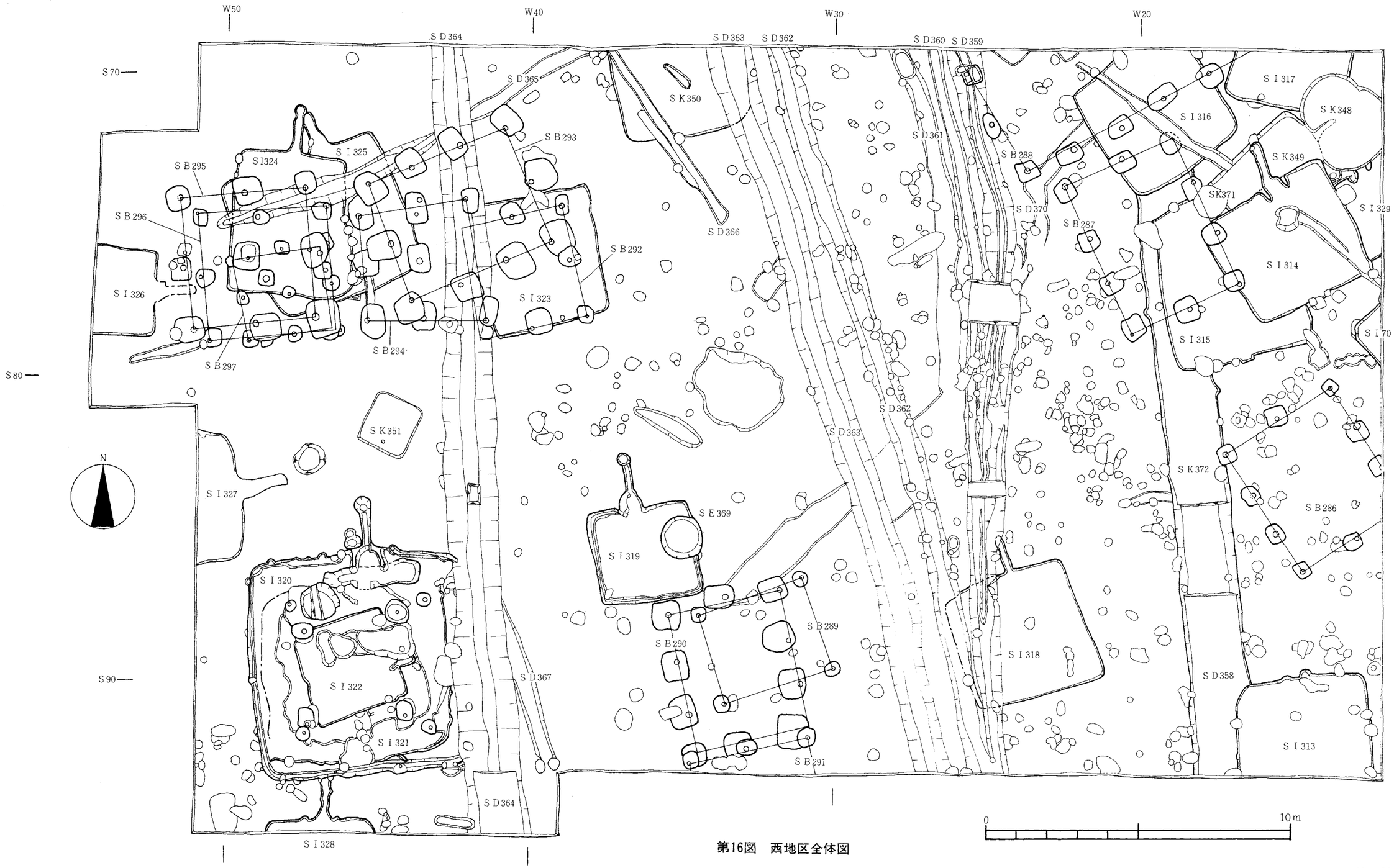
調査区の東端部で検出した桁行３間、梁行２間の南北棟掘立柱建物跡である。この建物跡はＳＤ 358 溝と重複しており、これより新しい。

柱穴は調査区外に位置する南東隅の柱穴を除く９個を検出しており、いずれにも径15～20cmの円形の柱痕跡が認められた。規模は桁行が西側柱列で4.61ｍ、梁行が北妻で4.09ｍで、柱間は桁行が西側柱列で南から1.51ｍ・1.49ｍ・1.61ｍ、梁行が北妻で西から2.08ｍ・2.02ｍである。建物の方向は西側柱列で測るとＮ34°Ｗとなる。柱穴は一辺が50～60cmの方形で、深さは35～50cmである。埋土は地山の小ブロックを含む極暗褐色土や暗褐色土が互層をなす。遺物は出土していない。

ＳＢ 287 建物跡　(第16図)

調査区の北東部で検出した桁行３間、梁行２間の南北棟掘立柱建物跡である。この建物跡はＳＤ 358 溝、ＳＩ 314・315・316 住居跡、ＳＫ 371 土坑と重複しており、ＳＤ 358・ＳＩ 314～316 より新しく、ＳＫ 371 より古い。また後述するＳＢ 288 建物跡とも近接しており、両者が同時に存在したとは考え難い。

柱穴はすべて検出しており、北東隅の柱穴を除く９個で径15～25cmの円形の柱痕跡が認められた。規模は桁行が西側柱列で5.33ｍ、梁行が南妻で3.91ｍで、柱間は桁行が西側柱列で南から1.90ｍ・1.55ｍ・1.89ｍ、梁行が南妻で西から2.05ｍ・1.86ｍである。建物の方向は西側柱列で測るとＮ25°Ｗとなる。柱穴は一辺が60～80cmの方形で、深さは20～40


W50
W40
W30
W20
S70
S80
S90
N
S D364
S D365
S D363
S D362
S D360
S D359
S K350
S D361
S B288
S D370
S B287
S I 317
S I 316
S K348
S K349
SK371
S I 329
S I 314
S I 315
S I 70
S K372
S B286
S I 325
S I324
S B295
S B296
S B293
S B292
S I 323
S I 326
S B297
S B294
S D366
S K351
S I 327
S E369
S I 319
S I 320
S I 322
S I 321
S D367
S D364
S I 328
S B290
S B289
S B291
S I 318
S D358
S I 313
0
10m

第16図　西地区全体図

cmである。埋土は地山の小ブロックを含む極暗褐色土や褐色土が互層をなす。

遺物は柱穴の埋土から土師器・須恵器・瓦の破片が出土している。土師器はすべて非ロクロ調整のもので、杯と甕があり、杯には口縁部外面がヨコナデ調整された内黒のものがみられる。瓦は丸瓦の破片である。

ＳＢ 288 建物跡　（第16図）

調査区の北東部で検出した東西４間以上、南北２間以上で、さらに北側に延びる東西棟と推定される掘立柱建物跡である。この建物跡は、ＳＩ 316 住居跡、ＳＤ 358 ・ 359 溝と重複しており、ＳＤ 358 ・ＳＩ 316 より新しく、ＳＤ 359 より古い。

柱穴は南側柱列と西妻で計７個検出しており、いずれにも径20～30cmの柱痕跡が認められた。規模は桁行が6.81ｍ以上、梁行が3.80ｍ以上で、柱間は桁行が南側柱列で西から1.68ｍ・1.75ｍ・1.68ｍ・1.72ｍ、梁行が西妻で南から1.92ｍ・1.90ｍである。建物の方向は南側柱列で測るとＥ29°Ｎとなる。柱穴は一辺が70～80cmの方形ないしは60× 100 cmほどの長方形で、深さは60～90cmである。埋土は地山の小ブロックや細粒を含む黒褐色土、極暗褐色土、暗褐色土などが互層をなす。

遺物は柱穴の埋土から土師器・須恵器の破片が出土している。土師器にはロクロ調整でヘラ切り無調整の杯と非ロクロ調整の甕がみられ、須恵器には底部を回転ヘラケズリ調整した杯などがある。また、柱痕跡の埋まり土からは土師器甕と須恵器杯の破片が出土している。

ＳＢ 289 建物跡　（第16図）

調査区の中央南端部で検出した東西１間、南北１間の東西棟と推定される掘立柱建物跡である。この建物跡は位置的に後述するＳＢ 290 建物跡と重複するが、新旧関係は不明である。

柱穴は４個すべてを検出しており、いずれにも径15～20cmの円形の柱痕跡が認められた。規模は桁行が南側柱列で3.75ｍ、梁行が西妻で3.00ｍである。建物の方向は西側柱列で測るとＮ16°Ｗとなる。柱穴は一辺が40～50cmの方形をなし、深さは50cmほどである。埋土は地山の小ブロックや細粒を含む黒褐色土である。

遺物は柱穴の埋土から須恵器甕の破片が出土している。

ＳＢ 290 建物跡　（第16図）

調査区の中央南端部で検出した桁行３間、梁行２間の南北棟掘立柱建物跡である。この建物跡はＳＢ 291 建物跡と重複し、これより古い。また、前述のＳＢ 289 建物跡とも重複する位置にあるが、その新旧関係は不明である。

柱穴はすべて検出しており、うちＳＢ 291 の柱穴と重複する南妻を除く７個で径約20cm

の円形の柱痕跡が確認された。柱痕跡が不明な南妻の柱穴ではＳＢ 291 との重複部分に柱位置を想定すると、規模は桁行が約 4.8 ｍ、梁行が北妻で3.77ｍとなり、柱間は桁行が西側柱列で南から約 1.5 ｍ・1.79ｍ・1.54ｍ、梁行は北妻で西から1.97ｍ・1.81ｍである。建物の方向は西側柱列で測るとＥ13°Ｎとなる。柱穴は一辺が70～ 110 ㎝の方形ないし長方形で、深さは40～50㎝である。埋土は地山の小ブロックや細粒を含む黒褐色土や極暗褐色土などが互層をなす。

遺物は柱穴の埋土から比較的多量の土師器・須恵器の破片が出土しているほか、鉄鏃も１点みられる。土師器には杯と甕があり、いずれにもロクロ調整のものと非ロクロ調整のものとの両者がみられる。須恵器には杯と甕があるが詳細な特徴は不明である。また、柱痕跡からは須恵器蓋の破片が出土している。

ＳＢ 291 建物跡　（第16図）

前述のＳＢ 290 建物跡の南妻に重複する３個の柱列により想定した掘立柱建物跡である。この建物跡はＳＢ 290 より新しい。

いずれの柱穴にも径約20㎝の柱痕跡が確認されている。規模は東西が3.95ｍで、柱間は東から1.94ｍ・2.01ｍである。建物の方向はＥ12°Ｎとなる。柱穴は一辺が50㎝ほどの方形ないし50×60㎝ほどの楕円形で、深さは30～50㎝である。埋土は地山の小ブロックや細粒を含む黒褐色土と極暗褐色土が互層をなす。

遺物は柱穴の埋土から土師器と須恵器の破片および鉄鏃が１点出土している。土師器には非ロクロ調整の杯・甕、ロクロ調整の甕があり、須恵器には杯、高台杯、甕がみられる。

ＳＢ 292 建物跡（第17図）

調査区の北西部で検出した東西２間、南北２間の掘立柱建物跡である。この建物跡はＳＢ 293・294 建物跡、ＳＩ 323 住居跡、ＳＤ 364 溝と重複しており、ＳＢ 293・ＳＢ 294・ＳＩ 323 より新しく、ＳＤ 364 より古い。

柱穴はＳＤ 364 と重複する西側柱列の２個を除く６個を検出しており、うち５個に径15～25㎝の円形の柱痕跡が認められた。規模は東西の柱間が等間と仮定すると東西南北ともに3.74ｍとなる。柱間は東西の東１間分が南側柱列で1.87ｍ、南北は東側柱列で南から1.92ｍ・1.82ｍである。建物の方向は東側柱列で測るとＮ14°Ｗとなる。柱穴は一辺が50～80㎝方形ないしは不整方形をなす。ＳＤ 364 と重複する南西隅の柱穴で約40㎝である。埋土は地山の小ブロックを含む暗褐色土である。遺物は全く出土していない。

ＳＢ 293 建物跡　（第17図）

調査区の北西部で検出した桁行３間、梁行２間の東西棟掘立柱建物跡である。この建物跡はＳＢ 292・294 建物跡、ＳＩ 323・325 住居跡、ＳＤ 364 溝と重複しており、ＳＢ 294

第17図　西地区北西隅付近検出遺構

・ＳＩ 323・ＳＩ 325より新しく、ＳＢ 292・ＳＤ 364より古い。

柱穴はすべて検出しており、いずれにも径約25cmの円形の柱痕跡が認められた。規模は桁行が南側柱列で4.96ｍ、梁行が東側柱列で4.04ｍで、柱間は桁行が南側柱列で西から1.70ｍ・1.71ｍ・1.56ｍ、梁行が東側柱列で南から2.10ｍ・1.95ｍである。建物の方向は南側柱列で測るとＥ24°Ｎとなる。柱穴は一辺が80～110cmの方形をなし、深さは80～100cmである。埋土は地山の小ブロックを多量に含む黒褐色土、極暗褐色土、暗褐色土などが互層をなす。

遺物は柱痕跡から非ロクロ調整の土師器甕とヘラ切り無調整の須恵器杯の破片が出土している。

ＳＢ 294 建物跡　（第17図）

調査区の北西部で検出した東西２間、南北２間の総柱の掘立柱建物跡である。この建物跡はＳＩ 323・325住居跡、ＳＢ 292・293建物跡、ＳＤ 364溝と重複しており、ＳＩ 323・ＳＩ 325より新しく、ＳＢ 292・ＳＢ 293・ＳＤ 364より古い。

柱穴はＳＤ 364と重複する東側柱列中央の柱穴を除く８個を検出しており、いずれにも径20～25cmの柱痕跡が認められた。ただし、これらのうち、北東隅の柱痕跡については柱穴の残存状況がきわめて悪いため確実性を欠き、また北側柱列中央の柱穴では、検出された２個の小ピットのいずれが本建物の柱痕跡か確定できなかった。柱痕跡の確実な南側柱列および西側柱列でみると、規模は東西が3.89ｍ、南北が3.43ｍで、東西が若干長い。柱間は東西が南側柱列で西から1.86ｍ・2.03ｍ、南北が西側柱列で南から1.65ｍ・1.78ｍである。建物の方向は西側柱列で測るとＮ５°Ｗとなる。柱穴は70×90cmほどの南北に長い長方形のものが多く、深さは25～45cmである。埋土は地山の小ブロック、木炭、凝灰岩粒を含む極暗褐色土と暗褐色土が互層をなす。

遺物は柱穴の埋土から土師器と須恵器が出土している。土師器には杯と甕があり、いずれも非ロクロ調整のものである。須恵器は甕の破片である。

ＳＢ 295 建物跡　（第17図）

調査区の北西部で検出した東西２間、南北２間の総柱の掘立柱建物跡である。この建物跡はＳＩ 324・325・326住居跡、ＳＢ 296・297建物跡、ＳＤ 365溝と重複しており、ＳＩ 324・ＳＩ 325・ＳＢ 296・ＳＢ 297より新しく、ＳＤ 365より古いが、ＳＩ 326との新旧関係は不明である。

柱穴はすべて検出しており、本建物より新しいピットと重複する中央の柱穴を除くすべての柱穴で径25～30cmの円形の柱痕跡が認められた。規模は東西が南側柱列で4.09ｍ、南北が東側柱列で4.27ｍで、南北が若干長い。柱間は東西が南側柱列で西から2.14ｍ・1.96

m、南北が東側柱列で南から2.22m・2.05mである。建物の方向は東側柱列で測るとN6°Wとなる。柱穴は一辺が70～120cmの方形で深さは40～55cmである。柱穴の形状や大きさ、深さなどは側柱列と中央の柱穴での違いはみられない。埋土は地山の小ブロックや細粒を含む極暗褐色土と暗褐色土が互層をなす。

遺物は柱穴の埋土から土師器杯・甕、須恵器杯・蓋、瓦の破片および完形の土製紡錘車が出土している。土師器はすべて非ロクロ調整で、杯には内黒のものがみられる。瓦は凸面に格子叩き目を残す平瓦である。土製紡錘車は断面形が台形をなすものである。

ＳＢ296建物跡（第17図）

調査区の北西部で検出した東西２間、南北２間の総柱の掘立柱建物跡である。この建物跡はＳＩ324・325住居跡、ＳＢ295・297建物跡、ＳＤ365溝と重複しており、ＳＩ324・ＳＩ325・ＳＢ297より新しく、ＳＢ295・ＳＤ365より古い。

柱穴はすべて検出しており、うち７個に径15～20cmの円形の柱痕跡が認められた。規模は東西が北側柱列で4.23m、南北が西側柱列で4.23mで、方形をなす。柱間は東西が北側柱列で西から2.00m・2.24m、南北が西側柱列で南から2.11m・2.14mである。建物の方向は西側柱列で測るとN6°Wとなる。柱穴は一辺が50cmほどの方形のものが多く深さは30～40cmである。柱穴の埋土は地山の小ブロックや細粒を含む黒褐色土・極暗褐色土・暗褐色土が互層をなす。

遺物は柱穴の埋土から非ロクロ調整で内黒の土師器杯の破片が出土している。

ＳＢ297建物跡（第17図）

調査区の北西部で検出した東西２間、南北２間の総柱の掘立柱建物跡である。この建物跡はＳＩ324・325住居跡、ＳＢ295・296建物跡と重複しており、ＳＩ325・ＳＩ326より新しく、ＳＢ295・ＳＢ296より古い。

柱穴はすべて検出しており、うち８個で径15～20cmの円形の柱痕跡が認められた。規模は東西が南側柱列で2.96m、南北が東側柱列で2.84mで、ほかの総柱建物に比べて小規模である。柱間は東西が南側柱列で西から1.46m・1.49m、南北が東側柱列で南から1.52m・1.31mである。建物の方向は東西の中央柱列で測るとN7°Wとなる。柱穴は径50cmほどの不整円形のものが多く、深さは30～50cmである。埋土は地山の細粒を含む極暗褐色土や暗褐色土が互層をなす。

遺物は柱穴の埋土から非ロクロ調整の土師器甕の破片が出土している。

(2) 竪穴住居跡

竪穴住居跡は18棟検出している（ＳＩ70・313～329）。これらの住居跡のうち、今回精

遺構No.	検出部分	重複関係	平面形	規模	住居内施設				方向	備考
					床面	主柱穴	周溝	カマド		
SI70	北西隅	なし	隅丸方形	東辺約5.3m 南辺約5.0m	検出部分全面貼床	?	なし	東辺中央南寄り	南辺でE39°N	未精査
SI313	北半部	SD358→SI313	方形	北辺約4.0m 東辺3.4m以上	?	?	?	?	北辺でE7°N	未精査
SI314	全形	SI329 SD358→SI315→SK349→SI314→SB287→SK371	方形	東辺約4.2m 北辺約4.7m	?	?	?	?	東辺でN31°W	未精査
SI315	全形	SI329 SD358→SI315→SK349→SI314→SB287→SK371	方形	南辺約4.6m 西辺約5.0m	?	?	?	?	西辺でN12°W	未精査
SI316	ほぼ全形	SB288 SD358→SI316→SB287→SK371	正方形	南辺約4.1m 西辺約4.1m	?	?	?	?	南辺でE34°N	未精査
SI317	南半部	SI317→SK348	方形	東西約3.9m 南北2.0m以上	?	?	?	?	南辺でE13°S	未精査
SI318	全形	SI318→SD359→SD360	方形	東辺約4.2m 南辺約4.3m	?	?	?	北辺中央東寄り	東辺でN22°W	未精査
SI319	全形	SI319→SE369	方形	東辺約3.0m 南辺約3.3m	全面貼床	なし	北東部以外、幅15～20cm、深さ3～5cm	北辺中央西寄り	西辺でN11°W	全面精査
SI320	全形	SI328 SI322→SI321→SI320→SD364	方形	西辺約7.0m 北辺7.0m以上	ほぼ全面貼床	対角線上に4個	東辺以外、幅15～30cm、深さ6～12cm	北辺中央	西辺でN5°W	全面精査
SI321	全形	SI328 SI322→SI321→SI320→SD364	方形	南辺約6.0m 西辺約5.3m	ほぼ全面貼床	対角線上に4個	?	北辺中央	南辺でE7°N	全面精査
SI322	全形	SI328 SI322→SI321→SI320→SD364	正方形	東辺約3.0m 南辺約3.0m	ほぼ全面貼床	なし	なし	東辺中央	南辺でE17°W	全面精査
SI323	全形	SI325 SD365 SI323→SB294→SB293→SB292→SD364	方形	東辺約4.2m 南辺約3.8m	?	?	?	北辺中央	東辺でN12°W	未精査
SI324	全形	SI325→SI324→SB297→SB296→SB295→SD365	長方形	北辺約3.5m 西辺約4.6m	?	?	?	北辺中央	西辺でN6°E	未精査
SI325	全形	SI325→SI324→SB297→SB296→SB295→SD365	方形	北辺約5.5m 西辺約4.9m	?	?	?	北辺中央東寄り	西辺でN28°W	未精査
SI326	東半部	SB295・296と重複するが新旧関係は不明	方形	東辺約2.8m 南辺2.0m以上	?	?	?	東辺中央	東辺でN3°E	未精査
SI327	東半部	なし	隅丸方形	東辺約4.0m 南辺1.5m以上	?	?	?	東辺中央	東辺でN4°W	未精査
SI328	北端部	SI328 SI322→SI321→SI320→SD364	隅丸方形?	北辺約3.3m 東辺0.5m以上	?	?	?	北辺中央	北辺でE2°N	未精査
SI329	西半部	SI329→SK348 SD358→SI315→SK349→SI314→SB287→SK371	?	南北約2.8m 東西1.5m以上	?	?	?	北辺	北辺でE30°N	未精査

表3　西地区検出竪穴住居跡一覧

査を行ったのはSI 319・320・321・322の4棟だけであり、ほかについては平面確認のみで埋め戻した。各住居跡の検出状況、重複関係、規模、構造、方向などは表3に示したとおりである。以下、精査を行った4棟の住居跡についてその概要を述べる。

SI 319住居跡　(第16図)

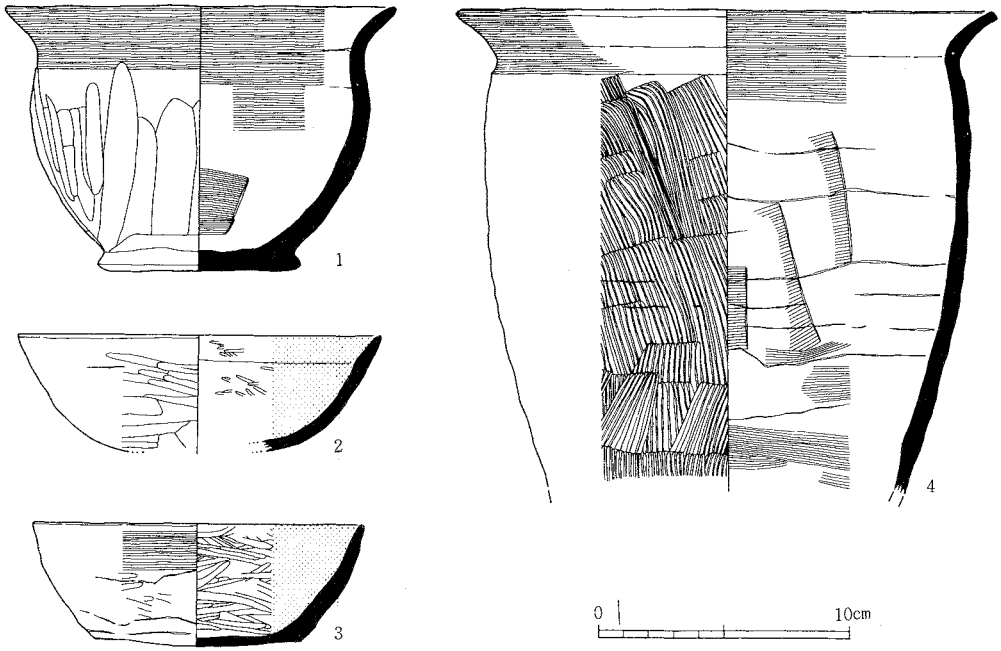
調査区中央部のやや南寄りで全形を検出した竪穴住居跡である。この住居跡はSE 369井戸跡と重複しており、これより古い。

残存状況は良好で、壁の高さは最も保存の良い部分で約25cmある。平面形は方形をなし、規模は南北約3m、東西約3.3mである。住居の方向は、西辺で測るとN11°Wとなる。床面は全面が地山ブロックを多量に含む黒褐色土により貼床されている。柱穴はみられない。カマドは北辺中央部に壁を掘りこんで付設されており、貼床上面より灰白色粘土で構築されている。このカマドは焚口部が住居の側壁付近に位置し、燃焼部が住居外に大きく張り出すタイプのもので、焚口部西側壁は土師器の小型甕で補強されている。燃焼部

は内幅50cm、奥行70cmで、奥壁は15cm立ち上がり煙道の底面に続いている。煙道は長さ約90cm、幅約25cmで、底面はほぼ平坦であり、先端に径40cm、深さ50cmの煙出し孔をもつ。周溝は貼床上面より掘り込まれており、幅10～20cm、深さ３～５cmで、断面は緩やかなU字形をなす。周溝内の堆積土は地山の細粒を多く含む黄褐色土で、住居内の堆積土とは区別される。

住居跡内の堆積土は４層に分けられる。第１層は住居跡のほぼ全体に分布する地山細粒を含む暗褐色土で、中央部では直接床面を覆う。含まれる地山細粒の量により、多量に含まれる南半部(１ｂ層)と、少量しか含まれない北半部(１ａ層)に細分される。第２層は住居跡の南壁ぎわを中心に分布する地山細粒を少量含む黒褐色土で、直接床面を覆う。第３層はカマドの崩落後に堆積した地山細粒を少量含む暗褐色土である。第４層はカマドの崩落土で灰白色粘土層である。

遺物はカマド焚口部西側壁に用いられた土師器甕のほかに、堆積土第１層を中心として各層から比較的多量の土師器、須恵器が出土している(第18図)。土師器はすべて非ロクロ調整のものである。カマド西側壁に用いられた土師器甕は鉢形をなす小型の甕で、底縁が若干張り出し、頸部にわずかな段をもつものである(図１)。堆積土第１層からは土師器杯



1	カマド側壁	土師器	小型甕	底縁張り出し	3	第　1　層	土師器	杯	体部外面へラミガキ
2	第　1　層	土師器	杯	体部外面へラミガキ	4	第　1　層	土師器	長胴甕	頸部に段

第18図　ＳＩ319住居跡出土遺物

・甕、須恵器杯・甕・瓶が出土している。土師器杯には体部外面をヘラミガキした内黒の丸底杯(図２)および平底杯(図３)などがみられる。また甕には頸部にわずかな段をもつ長胴甕がある(図４)。須恵器杯には糸切り無調整のものと、底部を回転ヘラケズリ調整したものとがみられ、瓶では長頸瓶の体部破片が出土している。ほかの層からは土師器、須恵器の甕の破片が出土したのみである。

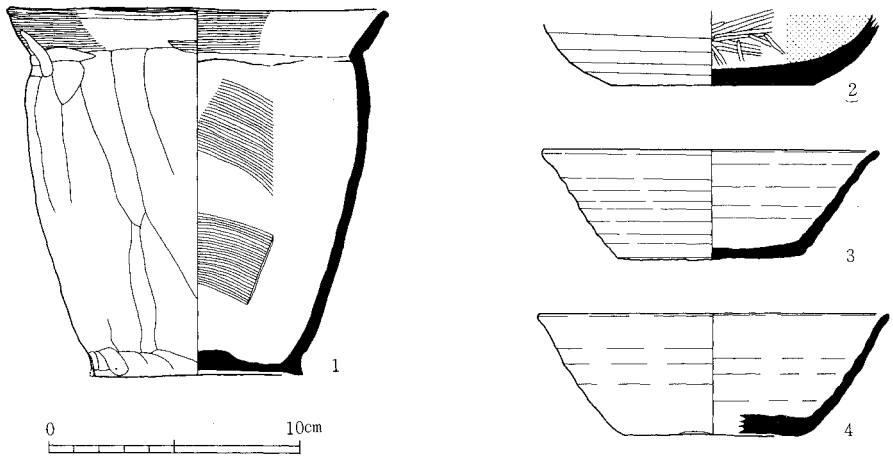
ＳＩ 320住居跡 (第16図)

調査区の南西隅で検出した竪穴住居跡である。この住居跡はＳＩ 321・322・328住居跡、ＳＤ 364溝と重複しており、ＳＩ 321・322・328より新しく、ＳＤ 364より古い。

残存状況は東辺がＳＤ 364により失われているものの比較的良好で、壁の高さは10～28cmある。平面形は正方形と推定され、規模は西辺が約 7.0 ｍで大型の住居跡である。住居の方向は西辺で測るとＮ５°Ｗとなる。床面はほぼ全面が地山細粒、木炭粒、焼土を含む極暗褐色土による貼床で、中央部が周辺部より５～６cm高くなっている。主柱穴は住居の対角線上で４個検出しており、径30～50cmの不整円形をなす。柱痕跡は径約10cmの円形である。また住居の壁際には約 1.5 ｍ間隔で径20～30cmの不整円形の壁柱穴とみられる小柱穴が確認された。カマドは北辺中央に付設されており、カマド付近の住居側壁は若干北へ張り出している。貼床上面より灰白色粘土で構築され、焚口部東側壁の内面は土師器甕で補強されている。燃焼部は内幅約90cm、奥行約70cmで、奥壁は10cm立ち上がり煙道底面に続いている。燃焼部の中央やや西寄りには完形の土師器小型甕を倒立させ、支脚としている。煙道は長さ約 1.6 ｍ、幅約20cmで、先端に径約50cm、深さ30cmの煙出し孔をもつ。周溝は貼床上面で検出しており、東辺がＳＤ 364で壊されているが全周するとみられる。幅15～30cm、深さ６～12cmで、断面はＵ字形をなす。周溝内の堆積土は地山ブロックを含む極暗褐色土などで、住居内の堆積土とは区別される。そのほか、カマド前面西側の床面に径約１ｍ、深さ約70cmの土坑がみられた。この土坑はフラスコ状をなし、堆積土には多量の焼土が含まれている。

住居跡内の堆積土は３層に分けられる。第１層は地山細粒を含む極暗褐色土で、住居跡全体に分布し、中央から南半部では直接床面を覆う。第２層は地山ブロックや焼土を含む褐色土で、住居北半部に分布する。第３層は地山ブロックを含む暗褐色土で北壁際では直接床面を覆う。

遺物はカマド焚口部東側壁に用いられた土師器甕、支脚に用いられた土師器甕のほかに、貼床および住居掘り方埋土、床面、周溝、カマド、住居内堆積土各層から土師器、須恵器、土製紡錘車、砥石、鉄製品などが比較的多量に出土している(第19図)。土器ではほかの住居跡に比べて須恵器の出土量がやや多い。カマド東側壁に用いられていた土師器



1	カマド支脚	土師器	小型甕	体部外面ヘラケズリ	3	床　　面	須恵器	杯	ヘラ切り無調整
2	カ マ ド 中	土師器	杯	体部下端～底部回転ヘラケズリ	4	カ マ ド 中	須恵器	杯	ヘラ切り＋手持ちヘラケズリ

第19図　ＳＩ 320 住居跡出土遺物

甕はロクロ調整で、外面をタタキ調整した長胴甕の体部資料である。カマド支脚に用いられていた土師器甕は非ロクロ調整で、体部外面をヘラケズリ調整した小型甕(図１)である。貼床および掘り方埋土からは土師器甕の破片と泥岩質の砥石が出土したのみであるが、土師器甕の中にはロクロ調整のものも少量みられる。周溝内からは断面が台形をなす土製の紡錘車が出土した。床面からは土師器杯・甕、須恵器杯・甕、鉄製品が出土している。土師器はいずれも破片である。杯はすべて非ロクロ調整で内黒のものであるが、甕には非ロクロ調整のものとロクロ調整のものの両者がみられる。須恵器杯にはヘラ切り無調整のもの(図３)、ヘラ切りで底部周縁を手持ちヘラケズリしたもの、底部全面を手持ちヘラケズリしたものなどがある。鉄製品には刀子がみられる。カマド内の堆積土中からは土師器杯・甕、須恵器杯・高台杯・蓋・甕が出土している。土師器にはロクロ調整で体部下端と底部を回転ヘラケズリした内黒杯(図２)、須恵器にはヘラ切りで、底部周縁を手持ちヘラケズリした杯(図４)や、双耳杯の耳部などがみられる。住居内の各堆積層からは比較的多量の土師器、須恵器が出土したが、いずれも破片資料であり、それらの特徴は床面やカマド内堆積土などから出土したものとさして変わらない。そのほか、堆積層中からは刀子や鉄鏃などの鉄製品が出土している。

ＳＩ 321 住居跡　(第16図)

調査区の南西隅で検出した竪穴住居跡である。この住居跡はＳＩ 320・322 住居跡と重複しており、ＳＩ 322 より新しくＳＩ 320 より古い。

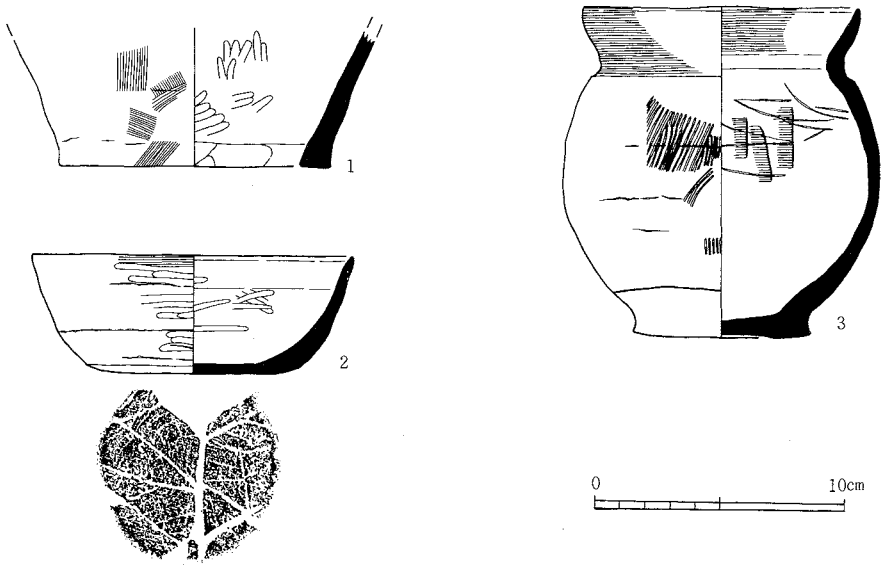
全体がＳＩ 320 と重複しているため残存状況は極めて悪く、壁は東辺の一部で高さ３～６cmを残すのみで、ほかの部分では掘り方を検出しただけである。掘り方は壁際を溝状に

めぐる状況を示す。平面形は掘り方から推定すると隅丸の方形をなし、規模は東西約6m、南北約5.3mと推定される。住居の方向は南辺で測るとW7°Sとなる。床面は東辺付近で確認しており、地山ブロックや木炭を含む極暗褐色土により貼床されている。柱穴は住居の対角線上で4個検出している。いずれにも重複がみられることから、この住居は一度建て替えられたことが知られる。新しい方の柱穴は70～80cmの不整方形ないしは、長径70cm、短径40cmほどの楕円形をなす。柱痕跡は径10～15cmである。カマドは本体がSI 320によって壊されているが煙出し孔が存在することより北辺中央部に付設されていたことがわかる。周溝は確認されていない。また、住居跡中央やや北寄りに重複する不整方形の土坑が5個認められたがその性格は不明である。

遺物は住居掘り方および柱穴埋土、土坑から土師器、須恵器、鉄製品などが出土している。掘り方および柱穴埋土からは土師器杯・甕、須恵器杯の破片と鉄鏃が出土している。土師器杯はすべて非ロクロ調整で内黒のものであるが、甕には非ロクロ調整のものとロクロ調整のものの両者がみられる。土坑からは土師器杯・甑・甕、須恵器甕の破片が出土している。土師器にはロクロ調整で、回転糸切りした後に体部下端と底部周縁を回転ヘラケズリした内黒杯や、非ロクロ調整の無底式甑(第20図1)がみられる。

SI 322住居跡 (第16図)

調査区の南西隅で全形を検出した竪穴住居跡である。この住居跡はSI 320・321住居



1	SI 321	土　坑	土師器	甑	無底式	3	SI 322	堆積土	土師器	小型甕	胴張り、頸部に段
2	SI 322	堆積土	土師器	杯	底面に木葉痕						

第20図　SI 321・322住居跡出土遺物

跡と重複しており、これらより古い。

全体がＳＩ 320・321と重複しているため、残存状況は極めて悪く、壁の高さは５～８cmである。平面形は正方形をなし、規模は一辺がほぼ３ｍである。住居の方向は南辺で測ると、Ｅ21°Ｎとなる。床面は全面が地山細粒や凝灰岩粒を含む極暗褐色土により貼床されている。柱穴や周溝はみられない。カマドは東辺中央部に付設されており、貼床上面より粘土で構築されているが、南側壁と煙道の一部を除きＳＩ 321によって壊されている。住居跡内の堆積土は１層で、地山ブロックや木炭を多量に含む黒色土であり、床面全体を覆う。なお、床面上には炭化材や木炭が多量に認められたことから、本住居は火災によって廃絶したものと推定される。

遺物は堆積土中から土師器杯・甕・甑、須恵器杯、鉄製品が出土している。土師器はすべて非ロクロ調整のものである。杯には底部から口縁部にかけてやや内湾気味に外傾し、体部外面をヘラミガキした平底杯(第20図２)がある。底部外面には木葉痕がみられ注目される。この杯は内面が赤色を呈するが、火熱を受けた痕跡が認められることから、本来は内黒であったものが再酸化を受けたものと考えられる。ほかにもこの杯と同様に体部に段や屈曲をもたない内黒の平底杯が１点出土している。甕には体部が球形をなし、頸部に段をもつ平底の小型甕(第20図３)などがみられる。須恵器杯は破片である。鉄製品では鉄鏃、刀子などが出土している。

(3) 土　　坑　(第16図)

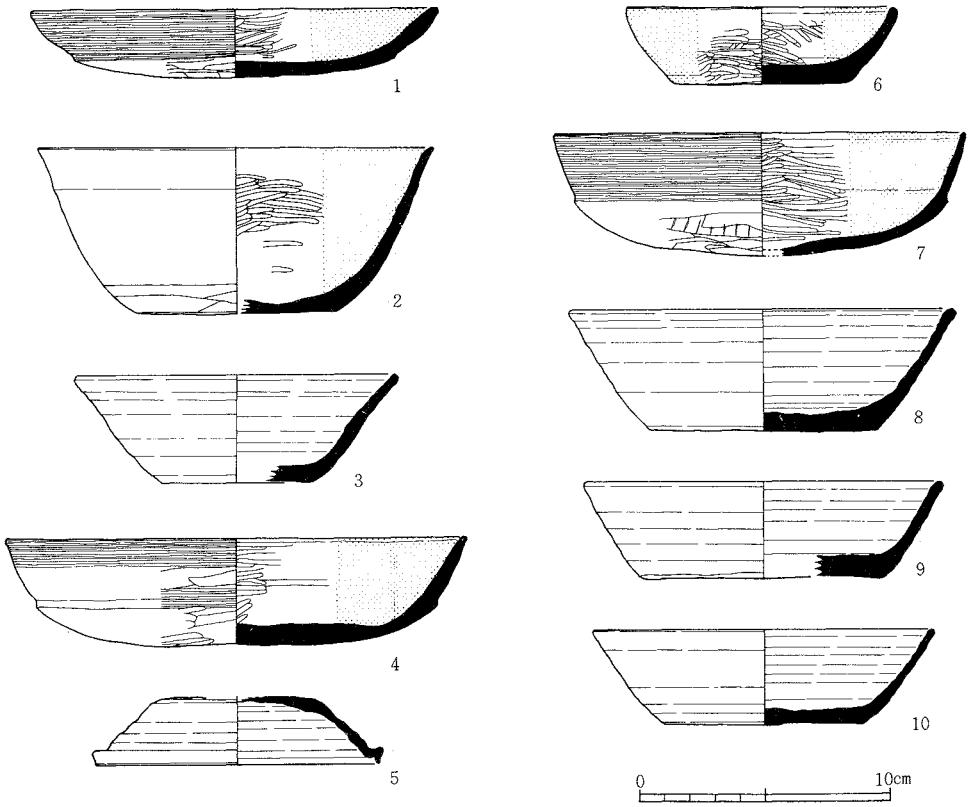
土坑は６基検出している(ＳＫ 348～351・371・372)。

ＳＫ 348は調査区の北東隅で検出した不整楕円形の土坑で、東側は一部調査区外まで延びている。この土坑はＳＩ 317・329住居跡、ＳＫ 349土坑と重複しており、いずれよりも新しい。中央付近に若干高まった部分があり、２つの土坑の重複のようにみえるが、堆積土に明瞭な新旧関係が認められなかったためひとつの土坑と理解した。規模は長径が約3.2ｍ、短径が約2.8ｍで、深さは底面まで掘り下げていないため不明である。堆積土は地山ブロックと多量の木炭を含む褐色土である。遺物は堆積土中から土師器、須恵器、鉄滓などが比較的多量に出土している(第21図)。土師器には杯と甕がみられ、杯には非ロクロ調整で内黒の杯とロクロ調整で体部下端と底部を回転ヘラケズリした内黒の杯(図２)との両者がある。甕にもやはり非ロクロ調整のものとロクロ調整のものがみられる。須恵器には杯・高台杯・蓋・甕などがあり、比較的量が多い。杯では口径に対する底径の比がとくに小さい糸切り無調整のもの(図３)や、ヘラ切り無調整のもの、体部下端と底部を回転

ヘラケズリしたものなどがある。

ＳＫ 349 は調査区の北東隅付近で検出した長方形と推定される土坑である。この土坑はＳＩ 314 ・ 315 住居跡、ＳＫ 348 ・ 371 土坑と重複しており、ＳＩ 314 ・ＳＩ 315 ・ＳＫ 348 ・ＳＫ 371 よりも古い。規模は長辺が約 3.8 ｍ、短辺が約 2.0 ｍで、深さは底面まで掘り下げていないため不明である。堆積土は地山ブロックを含む黒褐色土である。遺物は堆積土中から非ロクロ調整の土師器内黒杯・甕、静止糸切りで、体部下端と底部を回転ヘラケズリした須恵器杯・甕などが少量出土している。

ＳＫ 350 は調査区の北端中央付近で検出した隅丸方形の土坑で、北半は調査区外まで延



1	ＳＩ 327	土師器	杯		6	第 1 層	土師器	杯	内外面ヘラミガキ・黒色処理
2	ＳＫ 348	土師器	杯	ロクロ調整	7	第 1 層	土師器	杯	
3	ＳＫ 348	須恵器	杯	糸切り無調整	8	第 1 層	須恵器	杯	ヘラ切り無調整
4	ＳＫ 372	土師器	杯		9	第 1 層	須恵器	杯	底部手持ちヘラケズリ
5	ＳＤ 364	須恵器	蓋	つまみ部欠損	10	第 1 層	須恵器	杯	ヘラ切り無調整

第21図　その他の遺構出土遺物

びている。この土坑はＳＤ 363 ・ 366 溝と重複しており、ＳＤ 363 より新しく、ＳＤ 366 より古い。規模は東西約 4.2 ｍ、南北 3.2 ｍ以上で、深さは底面まで掘り下げていないため不明であるが、ＳＤ 363 溝の底面でみると60cm以上となり、壁はゆるやかに傾斜している。堆積土は第１層が地山の細粒を少量含む暗褐色土、第２層が地山ブロックや凝灰岩の細粒を含む暗褐色土である。遺物は堆積土中から土師器杯・甕、須恵器杯・甕、瓦が出土している。土師器は大部分が非ロクロ調整のものであるが、甕にはロクロ調整のものも少量みられる。須恵器杯には体部下端と底部を回転ヘラケズリしたものがある。瓦は丸瓦片が１点みられる。

ＳＫ 351 は調査区の西半中央付近で検出した方形の土坑である。規模は一辺が約 1.7 ｍで、深さは約 0.3 ｍである。底面はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がっている。堆積層は２層認められ、上層が地山の細粒を含む暗褐色土、下層が地山ブロックを含む極暗褐色土である。遺物は堆積土中から土師器甕、須恵器杯・甕、瓦が少量出土している。土師器甕はすべて非ロクロ調整のものである。瓦では花文叩き目をもつ桶巻き作りの平瓦片が２点出土している。

ＳＫ 371 は調査区の北東隅付近で検出した径約 1.0 ｍの円形の土坑である。この土坑はＳＢ 287 建物跡、ＳＩ 315 住居跡、ＳＫ 349 土坑と重複しており、いずれよりも新しい。底面まで掘り下げていないため、深さなどは不明である。堆積土は地山の細粒を含む暗褐色土である。遺物は堆積土中から土師器杯・甕、須恵器杯・瓶が少量出土している。土師器はすべて非ロクロ調整のもので、杯には内黒のものと、非内黒で内外ナデ調整のものとがある。また、須恵器杯には体部下端と底部を回転ヘラケズリしたものがみられる。

ＳＫ 372 は調査区の東半中央付近で検出した径約40cmの円形の小土坑である。この土坑はＳＤ 358 溝と重複しておりこれより新しい。堆積土は地山ブロックを含む黒褐色土である。堆積土中から非ロクロ調整で、体部外面に段をもつ内黒の土師器丸底杯(第21図４)が出土している。

(4)　溝　（第16図）

溝は主なものが11本検出されている(ＳＤ 358 ～ 367 ・ 370)。

ＳＤ 358 は調査区の東端付近で検出した南北溝で、約24ｍ続き両端はさらに調査区外に

延びている。この溝はＳＢ 286 ・ 287 建物跡、ＳＩ 313 ・ 315 ・ 316 住居跡、ＳＫ 372 土坑と重複しており、いずれよりも古い。溝の方向はＮ７°Ｗである。幅は上端で1.8～2.0ｍ、下端で約 1.4 ｍ、深さは約50cmであり、断面は逆台形をなす。底面まで掘り下げた部分が少ないため、底面の傾斜方向は判然としない。堆積土は３層認められ、第１層が黒褐色土、第２層が極暗褐色土、第３層が黄褐色土で、いずれも地山の細粒を含み、第３層では特に著しい。遺物は堆積土中から体部下端と底部を回転ヘラケズリした須恵器平底杯が出土している。この溝は規模・形状が共通しさらに堆積土が類似することから南地区で検出したＳＤ 113 東西溝と連続するものと推定される。

ＳＤ 359 ・ 360 ・ 361 ・ 370 はいずれも調査区中央やや東寄りで検出した南北溝である。これらのうち、ＳＤ 359 ・ 360 ・ 370 は相互に重複しており、その新旧関係はＳＤ 370→ＳＤ 359→ＳＤ 360 となる。またＳＤ 359 はＳＢ 288 建物跡とＳＩ 318 住居跡、ＳＤ 360 ・ 370 はＳＩ 318 住居跡とも重複しておりこれらより新しい。ＳＤ 359 ～ 361 の３本の溝は共に調査区の中央部および南半部ではほぼ真北に一致しているが北端部では約10°ほど西に折れ曲がっている。規模はＳＤ 359 が幅 0.8 ～ 1.1 ｍ、深さ約40cm、ＳＤ 360 が幅約40cm、深さ約15cm、ＳＤ 361 が幅約60cm、深さ約10cmである。このうちＳＤ 361 は南にゆくにしたがって浅くなり、調査区の中央付近で途切れている。ＳＤ 370 はＳＤ 359 の東側に部分的に残る溝で、ＳＤ 359 により西半が壊されているため幅は不明で、深さは約５cm と浅い。堆積土はＳＤ 359 とＳＤ 361 が暗褐色土、ＳＤ 360 とＳＤ 370 が褐色土でいずれにも地山の細粒が含まれており、きわめて類似している。遺物はＳＤ 359 とＳＤ 361 の堆積土中から土師器甕、須恵器杯・甕が、ＳＤ 359 からはほかに瓦も出土している。土師器甕はいずれも非ロクロ調整のものであり、須恵器杯には糸切り無調整のものや、底部を回転ヘラケズリないし手持ちヘラケズリしたものがみられる。ＳＤ 359 出土の糸切り無調整の杯は硯として転用したものである。また、ＳＤ 359 から出土した瓦には花文、格子などの叩き目をもつ桶巻き作りの平瓦、有段の丸瓦などのほか単弁蓮花文軒丸瓦の破片も１点ある。ＳＤ 360 とＳＤ 370 からは遺物は出土していない。

ＳＤ 362 ・ 363 は調査区中央付近で検出した南北溝である。ＳＤ 362 はＳＩ 318 住居跡と、ＳＤ 363 はＳＫ 350 土坑と重複しており、いずれもそれらより新しい。またＳＤ 362 はＳＤ 360 溝とも接しているが新旧関係は明確には把握できなかった。ＳＤ 362 とＳＤ 363 は約80cm離れて平行して延びており、方向はＮ８°Ｗである。規模はＳＤ 362 が幅約80cm、深さ約20cm、ＳＤ 363 が幅約 1.1 ｍ、深さ約50cmで、断面はＵ字形をなし、底面は

いずれも南に傾斜している。堆積土はＳＤ 362が地山の細粒を少量含む暗褐色土、ＳＤ 363が地山ブロックを含む暗褐色土である。遺物は両溝の堆積土中から土師器、須恵器の破片などが少量出土している。ＳＤ 362には土師器杯・甕、須恵器杯・高台杯・甕がある。土師器はほとんどが非ロクロ調整で、ロクロ調整のものは甕に１点みられるだけである。須恵器杯にはヘラ切り無調整のものがみられる。ＳＤ 363には土師器杯・甕、須恵器杯・甕がある。土師器はすべて非ロクロ調整で、須恵器杯には静止糸切りで底部周辺を手持ちヘラケズリしたものやヘラ切り無調整のものがある。ＳＤ 363からはほかに用途不明の鉄製品が出土している。

ＳＤ 364は調査区西半で検出した南北溝である。この溝はＳＢ 292・293・294建物跡、ＳＩ 320・323住居跡、ＳＤ 365・367溝と重複しており、いずれよりも新しい。溝の方向はＮ４°Ｗである。規模は幅約1.6ｍ、深さ約50cmで、断面はＵ字形をなし、底面は南へ大きく傾斜している。堆積土は上下で若干異なり、上層が地山の細粒を微量含む暗褐色土、下層が地山ブロックを含む暗褐色土である。遺物は堆積土中から土師器、須恵器、馬の下顎骨が出土している。土師器には杯・甕・甑があり、ほとんどが非ロクロ調整のものであるが、甕にはロクロ調整のものも少量含まれている。須恵器には杯・高台杯・甕・蓋があり、杯には静止糸切りで体部下端を回転ヘラケズリしたもの、ヘラ切り無調整のもの、糸切り無調整のものがみられる。蓋は口縁部が鋭く折れ曲がるもの(第21図５)で、つまみ部を欠いている。馬の下顎骨には歯の大部分が残存している。

ＳＤ 365は調査区北西隅付近で検出した北東－南西方向に延びる小規模な溝である。この溝は多くの遺構と重複しており、ＳＢ 293・295・296建物跡、ＳＩ 324・325住居跡より新しく、ＳＤ 364溝より古い。溝の方向はＮ64°Ｅ、規模は幅約60cm、深さ約10cmで、断面は皿状にわずかに凹む程度である。堆積土は地山ブロックを少量含む極暗褐色土であり、遺物は出土していない。

ＳＤ 366は調査区の北端で検出した北西－南東方向に延びる小規模な溝である。この溝はＳＫ 350土坑と重複しており、これより新しい。溝の方向はＮ35°Ｗである。規模は幅約30cm、深さ約５cmで、断面は皿状にわずかに凹む程度である。堆積土は地山の細粒を少量含む暗褐色土である。遺物は堆積土中から非ロクロ調整の土師器杯・甕の破片が少量出土している。

ＳＤ 367は調査区の南西隅付近で検出した小規模な南北溝である。この溝はＳＤ 364溝と重複しており、これより古い。方向はＮ17°Ｗ、規模は幅約60cm、深さ約５cmである。堆積土は地山ブロックを含む極暗褐色土であり、遺物は出土していない。

(5) 井　戸　跡　（第16図）

調査区中央部のやや南寄りで円形のＳＥ 369素掘井戸跡を検出している。この井戸跡はＳＩ 319住居跡と重複しており、これよりも新しい。規模は径1.35ｍ、深さ 3.1ｍで、底面はほぼ平坦であり、側壁は垂直に立ち上がる。堆積土は砂質地山土で検出面から底面まで同一の土で埋まっている。この井戸は水脈に達しておらず湧水が全くないこと、底面に泥土の堆積がみられないことなどから、掘削後すぐに埋め戻されたものと推定される。遺物は堆積土中から非ロクロ調整の土師器甕および須恵器甕の破片が出土している。

Ⅶ．考　　察

今回の第５次調査は、第１・２次調査で検出していた城内地区Ｂ期の官衙中枢部について、全体の規模・構造を把握することと、その西隣接地における官衙遺構の様相を解明することをおもな目的として、城内地区に南地区・西地区の２つの調査区を設定して実施した。調査の結果、南地区ではＢ期官衙中枢部の西辺および南辺を区画する一本柱列による塀跡が検出されたのをはじめ、これと時期を異にする多数の掘立柱建物跡や竪穴住居跡などが発見された。また、西地区でもやはり掘立柱建物跡や竪穴住居跡などが数多く検出されるなど大きな成果が得られた。これらの成果は第１・２次調査の成果と密接に関連するものであるため、以下ではまず今回の調査成果について整理し、次いで第１・２次調査の成果も含めて城内地区の遺構変遷とその性格を検討してみたい。

1　第５次調査の成果

(1)　重複関係

本調査で検出したおもな遺構には塀跡２、掘立柱建物跡18、竪穴住居跡33、土坑13、溝17、井戸跡２、墓２などがある。これらはすべて地山面で検出したものであるが、相互に切り合っているものが多く、それをもとにした重複関係を南地区、西地区に分けて示すと表４のようになる。

(2)　各遺構の特徴と年代

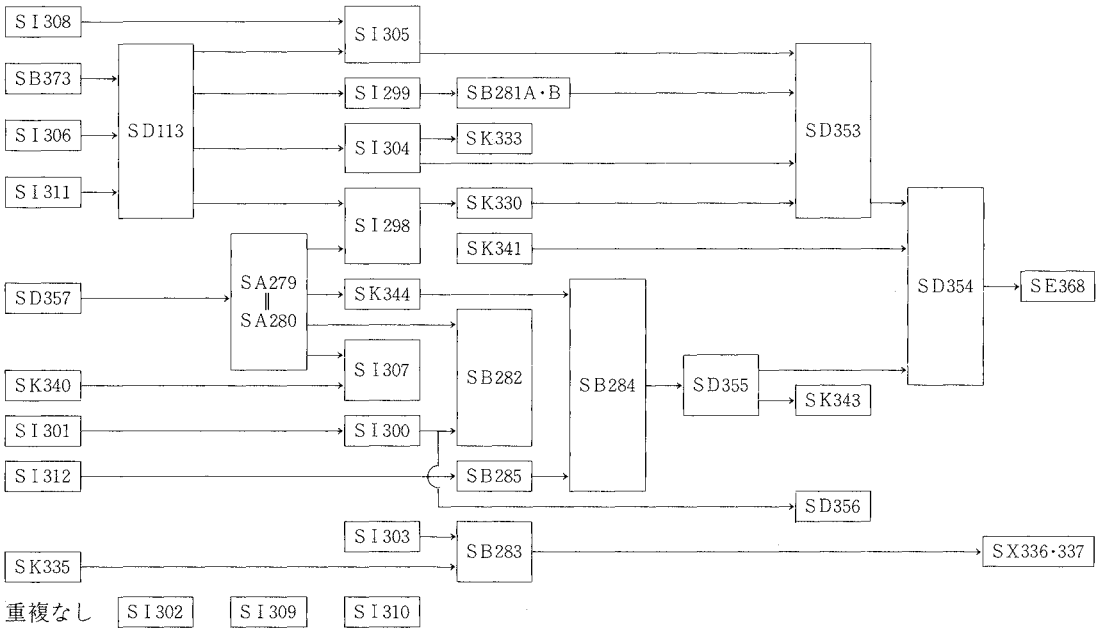
つぎに各遺構の特徴、他の遺構との新旧関係、年代などについて調査区ごとに検討してみたい。

［南地区］

a　塀跡・掘立柱建物跡

南地区で検出した塀跡にはＳＡ279とＳＡ280がある。これらはいずれも第１・２次調査で検出している城内地区Ｂ期官衙中枢部を区画する一本柱列による塀である。ＳＡ279は西辺、ＳＡ280は南辺の塀で、両者は直角に接続している。また掘立柱建物跡にはＳＢ281Ａ・281Ｂ・282～285・373の７棟がみられる。これらの塀や建物跡（以下一括して建物として扱う）は南北柱筋の方向および柱穴の特徴により次の４群に分けることができる。

〔南地区〕



〔西地区〕

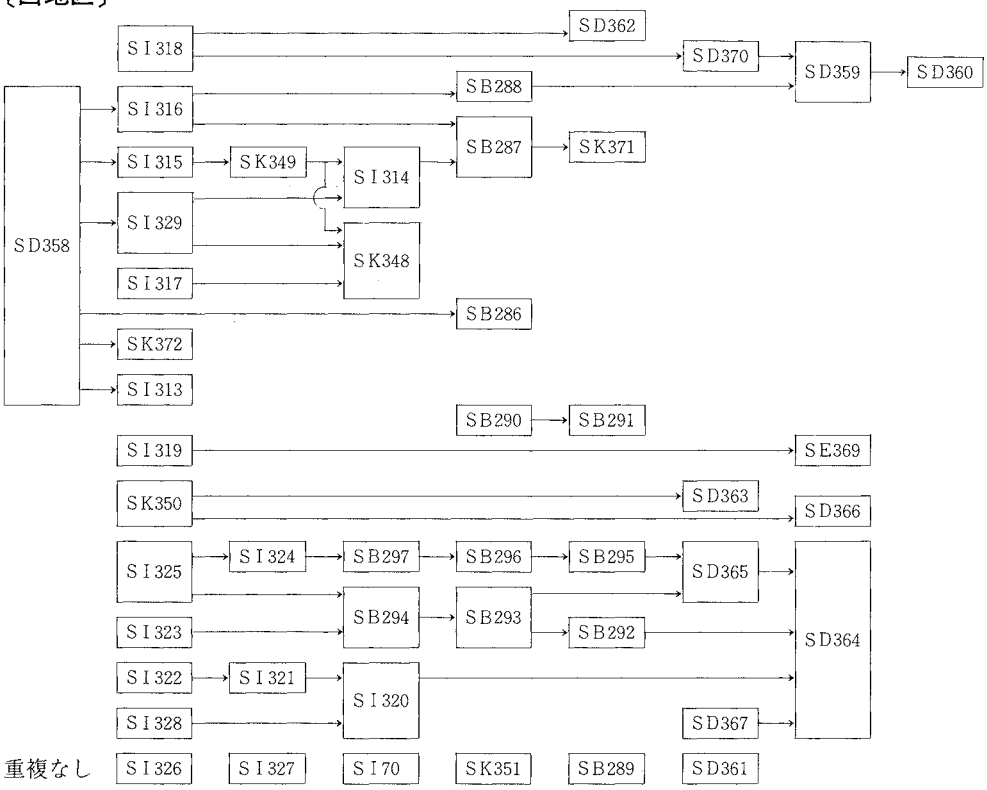


表 4　第 5 次調査検出遺構重複関係

建物A：発掘基準線に方向がほぼ一致するもので、ＳＡ279・280塀跡がこれにあたる。柱穴は方形を基調とし、大きさは60～90cmと比較的大きく、埋土は黒色土と黄褐色土が互層をなす。

建物B：発掘基準線に対してＮ５°Ｗ～Ｎ７°Ｗの方向をもつ建物群で、ＳＢ281Ａ・ＳＢ281Ｂ・ＳＢ282・ＳＢ283・ＳＢ285の５棟があげられる。柱穴は方形を基調とし、大きさは50～80cmと比較的大きく、埋土は極暗褐色土・暗褐色土・褐色土などが主体となっている。

建物C：発掘基準線に対してＮ17°Ｗの方向をもつ建物で、ＳＢ284がこれにあたる。柱穴は隅丸方形ないし円形で、大きさや埋土の特徴は建物Ｂとほぼ共通する。

建物D：ＳＢ373がこれにあたる。この建物は平面形にかなりの歪みがみられ、方向は各辺で異なるため確定できないが、柱穴が円形で、大きさは径約40cmと小さく、埋土は黒褐色土が主体をなす点で建物Ａ～Ｃとは区別される。なお、参考までに建物の方向を西側柱列で測るとＮ０°20′Ｗとなり、発掘基準線にほぼ一致している。

これらの建物群のおもな重複関係をみると、建物ＡがＳＩ298住居跡・建物Ｂより古いこと、建物ＢがＳＤ113溝、ＳＩ299・300住居跡、建物Ａより新しく、建物Ｃより古いこと、建物ＤがＳＤ113溝よりも古いと推定されることなどが確認されている。したがって建物群相互の新旧関係は建物Ａ→建物Ｂ→建物Ｃ、建物Ｄ→(ＳＤ113)→建物Ｂ→建物Ｃ、の順となり、建物Ａと建物Ｄの新旧関係は確定できない。

つぎに年代について検討する。建物Ａ、建物Ｂと重複関係をもつＳＩ298～300は後述するようにいずれも８世紀前半頃と考えられる住居跡である。建物ＡはＳＩ298住居跡より古いことから、ＳＡ279・280塀の廃絶年代は８世紀前半以前に限定できる。Ｂ期の構築年代についてはすでに第１・２次調査で、正殿に葺かれた山田寺系単弁蓮花文軒丸瓦とロクロ挽き重弧文軒平瓦をもつ瓦類の検討により７世紀末から８世紀初頭頃と推定されている(註１)。建物ＤはＳＩ298・299住居跡より古いＳＤ113溝よりもさらに古いと推定されることから８世紀前半以前のものとみることができる。建物ＢはＳＩ299・300住居跡より新しいことから８世紀前半以降、建物Ｃは建物Ｂより新しいことからやはり８世紀前半以降と考えられる。なお、この中で最も新しい建物Ｃも柱穴の規模・形状、埋土の状況などからみてその年代は古代に収まるものと考えられる。

b　竪穴住居跡

竪穴住居跡はＳＩ298～312の15棟を検出している。以下、全面精査を行った３棟の住居跡と遺物を比較的多く出土した６棟の住居跡についてその年代を検討したい。

ＳＩ302・308・312は出土した土師器の器形や調整技法の特徴から古墳時代中期の南

小泉式期に位置づけられる住居跡である。また、ＳＩ306・311住居跡からもこの時期の土師器や石製模造品（ＳＩ306）が出土していることから、これらもやはり南小泉式期に属する住居跡と推定される。城内地区からは第２次調査でもこの時期の住居跡が１棟（ＳＩ85）検出されている。南小泉式の土師器については近年、丹羽茂によって３段階に細分する試みがなされている(註２)。城内地区の土師器にも出土する住居跡によって多少の特徴の相違が認められることから、一定の時間幅を考慮する必要があるものと思われるが、各住居跡出土の土師器がいずれの段階に対応するかなどは後日改めて検討したい。

精査を行ったＳＩ298・299・305の３棟の住居跡とＳＩ300住居跡からは全体の特徴がわかる土師器、須恵器が比較的多く出土している。土師器はすべて非ロクロ調整のものである。

ＳＩ298住居跡の床面からは土師器の杯と甕が出土している。杯には体部と底部の境に軽い段をもち、口縁部が内湾気味に立ち上がり、口縁部外面がヨコナデされた内黒杯がみられる。甕には頸部にわずかな段をもち、口縁部が大きく外反する長胴甕と、やはり頸部に段をもち、口縁部が小さく外反する鉢状の小型甕がみられる。両者とも外面は体部がハケ目、口縁部がヨコナデされている。

ＳＩ299住居跡では床面直上、周溝、煙道底面などから土師器杯・甕などが出土している。このうち、床面直上から出土した杯および煙道底面から出土した甕はいずれもSI298出土のものとほぼ同じ特徴を備えたものである。周溝から出土した小型杯は体部と底部の境の内外に段をもち、外面には部分的にヘラミガキが施されている。

ＳＩ300住居跡の床面からは土師器杯・高杯・甕、須恵器高台杯・蓋、堆積土からは須恵器杯などが出土している。土師器杯には体部と底部の境の内外に段をもち、口縁部がヨコナデされたものと、外面に段をもちSI299周溝出土の杯と同様に外面に部分的にヘラミガキが施されたものとがある。土師器高杯の杯部の特徴は前者の杯にほぼ一致している。須恵器高台杯は丸底杯の底部に、やや外側に張り出す低い高台を貼付したもので、底部外面の中央が高台よりも突出する点を特徴としている。また堆積土から出土した須恵器杯は体部が直立気味に外反する小鉢状の丸底杯である。

SI305住居跡では、床面および堆積土中から土師器杯・甕、須恵器杯が出土している。土師器にはＳＩ298およびＳＩ299出土の杯と同様の特徴をもつ杯、胴張りの小型甕などがみられる。須恵器には底径が大きく、体部が直線的に外傾する杯がある。

これら４棟の住居跡から出土した土器のうち、土師器では相互に共通した特徴をもつ杯が含まれている。また、これらの土師器杯・甕はいずれも器形や調整技法が高清水町観音沢遺跡の各住居跡から出土した土器群(註３)などに類似しており、一定のまとまりをもつ

土器群と考えられる。こういった特徴を持つ土師器は本遺跡の小館地区の住居跡からも出土しており８世紀前半頃と考えられる須恵器杯と共伴している(註４)。

須恵器についてみると、ＳＩ 305 出土の杯は小館地区から出土し８世紀前半頃と考えられた須恵器杯と同様のものである。また、ＳＩ300から出土した高台杯と蓋は仙台市善応寺横穴古墳群第12号墳などに類例がみられる(註５)。底部中央が高台部よりも突出する特徴をもつ高台杯は東海地方の須恵器窯跡のうち愛知県岩崎41号窯、同高蔵寺２号窯(註６)、岐阜県老洞１号窯(註７)などでは比較的多く出土しており、岩崎41号窯と高蔵寺２号窯にはＳＩ 300 出土の杯と類似したもの、老洞１号窯にはＳＩ 300 出土の蓋と類似したものも含まれている。年代的には岩崎41号窯が７世紀末～８世紀初頭に、高蔵寺２号窯と老洞１号窯はいずれも８世紀前半に位置付けられている。

以上の検討により、４棟の住居跡の年代はともに８世紀前半頃と推定するのが妥当と考えられる。

８世紀前半の４棟の住居跡と他の遺構との重複関係をみると、ＳＩ 298 ・ 299 ・ 305 はＳＤ 352 溝より新しいこと、ＳＩ 298 は建物ＡのＳＡ 279 塀より新しいこと、ＳＩ 299 ・ 300 が建物ＢのＳＢ 281 Ａ・Ｂ、ＳＢ 282 よりも古いことなどが判明しており、ＳＤ 113 溝や建物ＡのＳＡ 279 ・ 280 塀より古い住居跡および建物Ｂより新しい住居跡はみられない。このことから、これらの住居跡はいずれもＳＤ 113 や建物Ａの後で、建物Ｂが建てられる前に存在した可能性が高いものと思われる。

ｃ　土　　坑

土坑は７基検出している。これらには、隅丸方形で大型のもの（ＳＫ333)、隅丸方形で焼け面をもつ中型のもの（ＳＫ344)、楕円形で大型のもの（ＳＫ341)、楕円形で土師器甕が埋設された小型のもの（ＳＫ340)、円形と推定される中型のもの（ＳＫ343)、不整形で底面に低い土手状の高まりをもつ大型のもの（ＳＫ330)、不整形で中型のもの（ＳＫ335)がみられ、形状・規模などはすべて異なる。

７基のうち、出土土器によって所属年代の推定が可能な土坑にはＳＫ 330 ・ 335 ・ 340 ・ 341 の４基がある。

ＳＫ 330 土坑からは土師器杯・皿、須恵器杯・蓋などが出土している。土師器はすべて非ロクロ調整のものであり、杯には体部と底部の境にわずかな段をもち、口縁部が直線的に外傾する内黒の丸底風平底で、口縁部外面がヨコナデされたものがみられる。皿は口縁部が内湾する内黒の丸底皿で、外面には細くて浅い沈線が３本めぐり、全面がヘラミガキ調整されている。須恵器杯には体部が直線的で急角度に立ち上がり、小鉢状をなす小型の平底杯がある。須恵器蓋は比較的器高が高く、扁平なつまみをもち、口縁部が内側に折り

返されたものである。これらのうち、須恵器の蓋は志波姫町糠塚遺跡で第１群土器（国分寺下層式）とされている土師器に共伴した須恵器蓋(註８)の特徴に類似し、須恵器杯は伊治城跡ＳＩ04住居跡から出土した須恵器の中に同様な器形のものがみられる(註９)。したがってＳＫ330は糠塚遺跡第１群土器および伊治城跡ＳＩ04住居跡に近い時期のものと考えられ、年代的には８世紀後半頃とみることができる。

ＳＫ335土坑からは前述した古墳時代の住居跡から出土した土師器と同じ特徴をもつ杯が出土していることから、この土坑は南小泉式期に位置付けられる。

ＳＫ340は土師器甕が埋設された土坑である。この甕は古墳時代中期の南小泉式とみられるものであり、土坑の年代は南小泉式期に位置付けられる。

ＳＫ341土坑からは非ロクロ調整で底部に木葉痕をもつ土師器鉢と甕が出土している。これらと器形や調整技法が類似した鉢・甕は小館地区の８世紀前半頃とされた住居跡出土土師器の中にも含まれていることから、この土坑もやはり同じ時期の遺構と考えられる。

以上の土坑の性格についてはいずれも判然としなかった。

ｄ　溝

溝はＳＤ113・353～357の６本が検出されている。これらの溝はいずれも出土遺物が少いため、直接に年代を推定することは困難である。したがって、溝の年代については他の遺構との重複関係により検討してみたい。ＳＤ113溝は南小泉式期と推定されるＳＩ306・311住居跡より新しく、ＳＩ298・305住居跡より古いことから古墳時代中期～８世紀前半に位置づけられる。ＳＤ353・354溝は相互に重複関係をもち、古い方のＳＤ353は８世紀後半頃と推定されるＳＫ330土坑より新しく、新しい方のＳＤ354は中世以降とみられるＳＥ368井戸跡よりも古い。ＳＤ355は古代のＳＢ284建物跡より新しく、ＳＤ354より古い。ＳＤ356はＳＩ300住居跡より新しいことから８世紀前半以降のものであることがわかる。ＳＤ357は７世紀末～８世紀初頭のＳＡ280塀跡より古い。

これらの溝のうち、古墳時代中期～８世紀前半に位置づけられるＳＤ113溝は東西方向に直線的に延びて南地区の西で北に折れ、西地区で検出されているＳＤ358南北溝に連続するものとみられる。

ｅ　井戸跡・墓

ＳＥ368は古代のＳＢ284建物跡より新しい井戸跡であり、側壁がほぼ垂直に立ち上がる円形の素掘りの井戸である点から中世以降のものと考えられる。

ＳＸ336と337はともに同形態の土坑墓であり、ＳＸ336から副葬された寛永通宝38枚などが出土したことから近世の墓とみられる。

［西地区］

a　掘立柱建物跡

掘立柱建物跡にはＳＢ 286 ～ 297 の12棟がある。これらの建物跡は南北柱筋の方向によって次の３群に分けられる。柱穴の特徴には建物群間での顕著な違いは認められない。

建物ａ：発掘基準線に対してＮ５°Ｗ～Ｎ７°Ｗの方向をもつ建物群…ＳＢ 294 ～ 297

建物ｂ：発掘基準線に対してＮ12°Ｗ～Ｎ16°Ｗの方向をもつ建物群…ＳＢ 289 ～ 292

建物ｃ：発掘基準線に対してＮ24°Ｗ～Ｎ34°Ｗの方向をもつ建物群…ＳＢ 286 ～ 288・293

建物ａの４棟はすべて調査区の北西隅付近に位置する２間×２間の総柱建物跡で、小規模な倉庫跡と考えられるものである。このうちＳＢ 295 ・ 296 ・ 297 の３棟は重複しており、新しいものほど規模が若干大きくなっている。

建物ｂの４棟のうち３棟は調査区の中央南端部で、他の１棟は北西隅付近で検出されている。中央南端部の３棟はほぼ同位置で重複している。柱間や規模は建物によってそれぞれ異なっている。

建物ｃの４棟のうち３棟は調査区の東端で、他の１棟は北西隅付近で検出されている。規模の不明なＳＢ 288 を除く３棟はいずれも桁行３間、梁行２間で、ほぼ同規模の建物である。

各建物群相互の重複関係をみると、調査区の北西部で建物ａのＳＢ 294 →建物ｃのＳＢ 293 →建物ｂのＳＢ 292 といった新旧関係が確認されている。

つぎに他の遺構との重複関係をみると、建物ａがＳＩ 323 ～ 325 住居跡、建物ｃがＳＤ 358 溝・ＳＩ 314 ～ 316 住居跡より新しいことなどが判明している。以下では、柱穴から出土した遺物により各建物群の年代を検討してみたい。

建物ａでは各建物跡の柱穴から土師器や瓦が少量出土している。これらの中には８世紀前半頃と考えられる非ロクロ調整で内黒の土師器杯が含まれている。したがって建物ａは８世紀前半以降の建物群と推定される。

建物ｃではＳＢ 288 の柱穴からロクロ調整でヘラ切りの土師器杯が出土しており、その年代はロクロ調整の土師器が出現する８世紀末頃以降(註９)とすることができる。

建物ｂではＳＢ 292 を除く建物跡の柱穴から少量の土師器や須恵器が出土している。このうち、ＳＢ 290 からはロクロ調整の土師器杯・甕、ＳＢ 291 からもロクロ調整の土師器甕が出土していることからこの建物ｂの年代もやはり８世紀末頃以降とみられる。

b　竪穴住居跡

竪穴住居跡はＳＩ 70・ 313 ～ 329 の18棟を検出している。このうち精査を行った住居跡

はＳＩ 319 ～ 322 の４棟だけである。以下、これらについて年代を検討する。

ＳＩ 319 住居跡では床面から出土した土器はないが堆積土第１層からは全体の特徴がわかる土器が比較的多く出土している。土師器はすべて非ロクロ調整のものであり、これらの中には体部外面がヘラミガキされた内黒の丸底杯および平底杯で、志波姫町糠塚遺跡第１群土器(註８)に類似した特徴をもつものもみられる。したがって、この住居跡の埋没年代は８世紀後半頃と推定することができる。

ＳＩ 320 ～ 322 の３棟の住居跡は調査区の南西隅付近で相互に重複しておりその新旧関係は、ＳＩ 322 → ＳＩ 321 → ＳＩ 320 の順になる。

最も古いＳＩ 322 は火災によって廃絶したとみられる住居跡で、床面上の薄い堆積層中からは土師器、須恵器などが出土している。土師器はすべて非ロクロ調整のもので、これには糠塚遺跡第１群土器に類似した特徴をもつ杯・甕が含まれている。このことから、ＳＩ 322 は８世紀後半頃の住居跡とすることができる。

ＳＩ 321 住居跡では住居掘り方や床面から掘りこまれた土坑などから少量の土師器、須恵器が出土している。土師器杯・甕などには非ロクロ調整のものとロクロ調整のものの両者があり、前者には外面をハケ目調整した無底式甑、後者には回転糸切り後に体部下端と底部を回転ヘラケズリ調整した内黒杯などがみられる。出土土器が少いため、土器の細かな特徴は把握できないが、伊治城跡や多賀城跡ではロクロ調整の土師器の出現は８世紀末頃と考えられており(註９)、さらに後述するように本住居跡より新しいＳＩ 320 の年代が８世紀末頃と推定されることから、ＳＩ 321 も８世紀末頃に位置づけるのが妥当と思われる。

最も新しいＳＩ 320 住居跡の床面やカマドなどからは比較的多量の土師器、須恵器が出土している。ＳＩ 321 住居跡の場合と同様に土師器杯・甕にはともに非ロクロ調整のものとロクロ調整のものの両者がみられ、量的には非ロクロ調整のものが圧倒的に多い。須恵器杯ではヘラ切りのものが主体となっている。こういった土器群の組成は、伊治城跡出土の土器群や多賀城跡Ｂ群土器の特徴に類似するものであることから、この住居跡の年代は８世紀末頃と推定できる。

以上の検討により、精査を行った４棟の住居跡の年代は、ＳＩ 319 とＳＩ 322 が８世紀後半頃、ＳＩ 321 とＳＩ 320 は８世紀末頃と推定するのが妥当と考えられる。

ｃ　土　　坑

土坑は６基検出している。これらには南地区の場合と同様に隅丸方形で大型のもの（ＳＫ349・350)、不整楕円形で大型のもの（ＳＫ348)、方形で中型のもの（ＳＫ351)、円形で中型のもの（ＳＫ371)、円形で小型のもの（ＳＫ372）などがみられ、形状・規模ともにさ

まざまである。これらの土坑では出土遺物が少いため年代を限定することが困難なものが多いが非ロクロ調整で体部外面がヨコナデされた内黒の丸底土師器杯を出土したＳＫ372は８世紀前半頃、出土遺物の中にロクロ調整の土師器を含むＳＫ348・350は８世紀末以降と推定することができる。また、ＳＫ371は８世紀末以降とみられる建物ｃのＳＢ287より新しいことからそれ以降のものであることが知られる。

ｄ　溝

溝はＳＤ358～367・370の11本が検出されている。これらの溝もいずれも出土した遺物が少いため、直接に年代を推定することは難しい。重複関係をみるとＳＤ358を除く10本の溝で他の遺構と重複しているものはすべて建物跡、竪穴住居跡、土坑よりも新しい。

ＳＤ358は８世紀前半頃とみられるＳＫ372土坑より古い溝で、規模・形状・堆積土が類似することから南地区のＳＤ113溝に連続すると推定される溝である。

ｅ　井戸跡

ＳＥ369は８世紀後半頃と推定されたＳＩ319住居跡より新しい井戸跡である。堆積土の状況から未使用のまま埋戻された井戸と考えられ、出土遺物には古代のものしかみられないが、側壁がほぼ垂直に立ち上がる円形の素掘りの井戸であることから、中世以降のものと推定される。

(3)　第５次調査の整理

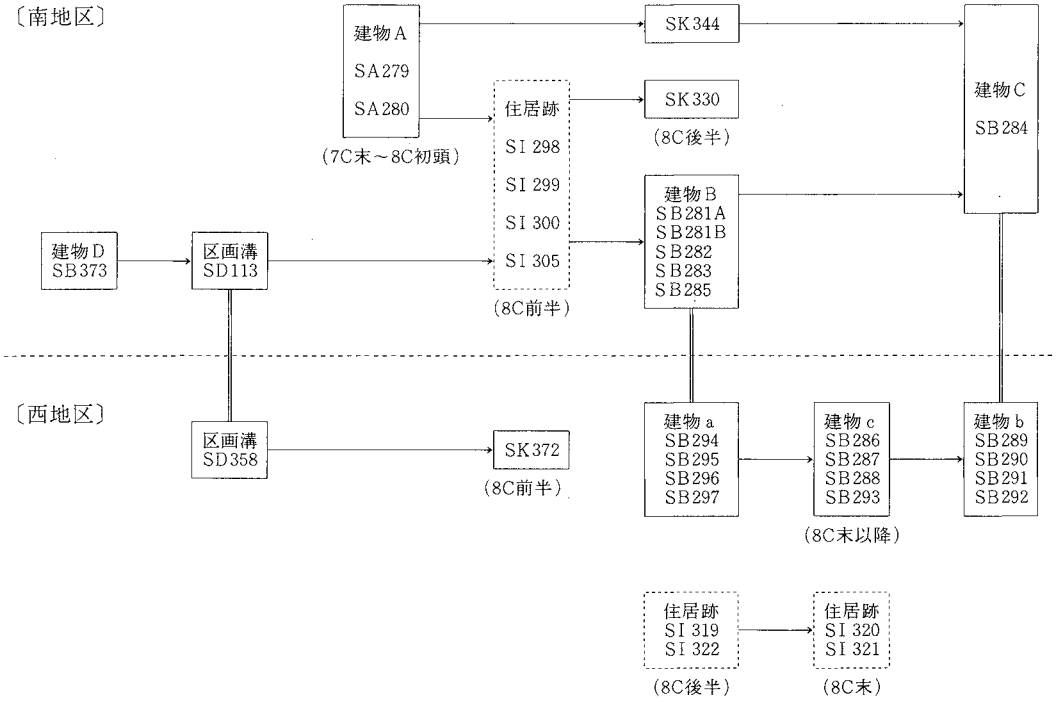
ここでは、まず前項で述べた南地区と西地区の検出遺構のうち、相互に関連をもつ建物跡と溝について検討を加え、ついで両地区のおもな遺構の新旧関係と年代について整理しておきたい。

建物跡では、南地区で建物Ａ・建物Ｄ→建物Ｂ→建物Ｃ、西地区で建物ａ→建物ｃ→建物ｂといった新旧関係が確認されている。このうち、南地区の建物Ｂと西地区の建物ａはともにＮ５°Ｗ～Ｎ７°Ｗの方向をもつ建物群で、柱穴の特徴もほぼ共通しており、年代はいずれも８世紀前半以降とみられるものである。したがって両者は同一の建物群として把握できるものと考えられる。また、南地区の建物ＣはＮ17°Ｗの方向をもつ建物であり、方向が西地区のＮ12°Ｗ～Ｎ16°Ｗの建物ｂときわめて近似し、柱穴の特徴にも大きな違いはみられない。年代も建物Ｃが８世紀前半以降、建物ｂが８世紀末頃以降と考えられとくに矛盾はしないことから、これらは同じ建物群とみなしてさしつかえないものと推定される。以上により両地区の成果を総合すると、建物群では建物Ａ・建物Ｄ→建物Ｂ＝建物ａ→建物ｃ→建物Ｃ＝建物ｂ、という変遷が把握できたことになる。なお、南地区の建物Ａと建物Ｄの新旧関係は明らかにできなかったが、これについては次節でさらに検討した

い。

南地区のＳＤ113東西溝と西地区のＳＤ358南北溝はいずれも幅約２ｍ、深さ約50cmで、断面が逆台形をなし、堆積土も類似している。年代は両者ともに８世紀前半以前と考えられるものである。したがって、これらは南地区の西で接続する一連の溝とみられ、東西70ｍ以上、南北50ｍ以上の範囲を区画する溝と推定される。

これまでの検討結果をもとにして第５次調査で検出した古墳時代以外のおもな遺構について遺構群の新旧関係、年代などを整理すると次のようになる。



2　第１・２次調査との対応関係

第１・２次調査では一本柱による塀跡４、掘立柱建物跡22、竪穴住居跡44、大溝２などの遺構が検出され、それらは重複関係や遺構の方向、柱穴の規模・形状、出土遺物の検討などから、Ａ期→Ｂ期→C_1期→C_2期→Ｄ期の５期に区分されることが判明している。それぞれの時期の遺構と推定年代は表５のようになる。また、各期の遺構の特徴は第Ⅳ章に記したとおりであるが、主要な点を再度簡単に示しておく。

Ａ期：次のＢ期に先行する遺構群で、掘立柱建物跡７と土坑１がある。この期の建物跡では、方向が発掘基準線にほぼ一致するものが多く、柱穴が30～50cmの円形ないし方形で

	遺構		年代
	第1次調査	第2次調査	
A期	SB05・10・19・35・36 SK45	SB63・119	7世紀末
B期	SB01・11・60 SA06・07	SB11・60・61 SA62・64	8世紀初頭頃
C_1期	SB17・18 SD02	SD02	8世紀後半頃
C_2期	SB12・13・20・32・33・34・38・47 SI04・15・22・44、SD21	SB120、SI69・74・78・79・81～84 SD21・110・111・114	8世紀後半～9世紀
C_1～C_2期		SI65～68・72・73・75・77・91～93 SK94・96	8世紀後半～9世紀
D期	SD50	SD50・106	15世紀頃

表5　第1・2次調査検出遺構（註10）

比較的小さく、柱穴の埋土は黒色土である。

B期：この地区に官衙中枢部が置かれた時期で、一本柱列による塀跡4と掘立柱建物跡4がある。この期の塀跡・建物跡では、方向が発掘基準線に一致し、柱穴が1m前後の方形で大きく、柱穴の埋土は黒色土と黄褐色土が互層をなす。

C_1期：この期の遺構群には方形にめぐる溝と掘立柱建物跡2がある。溝・建物跡の方向は発掘基準線にほぼ一致し、建物跡の柱穴が50～70cmの方形でB期に比べてやや小さく、柱穴の埋土は黒色土、暗褐色土、明褐色土などである。

C_2期：この期の遺構には掘立柱建物跡9、竪穴住居跡12、溝4がある。この期の建物跡では、方向が発掘基準線に対してN12°W～N38°Wと比較的東に大きく振れ、柱穴は60cmほどの方形で、柱穴の埋土は暗褐色土ないし褐色土である。

D期：中世の遺構で大溝2がある。大崎氏の居城である名生城に関わるものとみられる。

つぎにこれらの第1・2次調査の成果と第5次調査の成果との対応関係を塀跡と建物跡を中心に検討してゆきたい。

南地区のSA279・280塀跡はともにB期の官衙中枢部を区画する塀跡である。

南地区で建物DとしたSB373は、後述するSD113溝より古いとみられる建物跡であり、その年代は8世紀前半以前と考えられた。この建物跡の柱穴は径約40cmの円形で比較的小さく、埋土が黒褐色をなすものであり、A期の建物跡の特徴とほぼ一致する。したがってこの建物跡はA期に位置付けるのが妥当と考えられる。

南地区のSD113と西地区のSD358は一連の区画溝と考えられるもので、両溝とも8世紀前半の住居跡や土坑より古いものである。これらの溝とB期の塀跡は、SD114が南

地区で西辺のＳＡ279と、その東に位置する第２次調査区で東辺のＳＡ64と重複しており、同時期のものとすることはできない。しかし、重複部分がそれぞれこれらより新しいＳＩ298住居跡とＳＤ110・111溝によって壊されているため、両者の新旧関係は把握できていない。したがってこれらの溝がＢ期より古いものか新しいものかは全く不明である。仮にこれらをＢ期より新しいものとみた場合、８世紀後半のC_1期とは年代的に異なり、また今回の調査で検出した８世紀前半の竪穴住居跡群とも重複関係を持つため、これらによって区画される遺構は皆無となる。一方、Ｂ期より古いとした場合にはＡ期の建物跡は大部分がその区画内に位置することになり、これらの溝はＡ期の区画溝とみることができよう。したがって確証はないがここでは一応後者の可能性が高いものとみなし、ＳＤ113・358もＡ期に位置づけられる溝と推定しておきたい。この場合、Ａ期の遺構にはＳＢ373建物跡→ＳＤ113・358区画溝、といった重複関係が生じることになる。Ａ期の他の建物跡がいずれに属するかは明らかではないが、これらの建物跡中にも方向が著しく異なるものや、近接しているため同時には存在し得なかったとみられるものも含まれているため、今後細分を検討する必要があろう。

南地区の建物Ｂと西地区の建物ａはともに方向がＮ５°Ｗ～Ｎ７°Ｗをなすもので、柱穴の特徴も類似することから同時期と推定される建物跡群である。これらは南地区でＳＢ281Ａ・ＢとＳＢ282がそれぞれ８世紀前半のＳＩ299住居跡とＳＩ300住居跡より新しいことが確認されており、８世紀前半以降と推定される。また西地区のＳＢ294は、後述するようにC_2期と考えられる建物ｃのＳＢ293より古いことが判明している。したがって、南地区の建物Ｂと西地区の建物ａはC_1期に位置付けられる可能性があるが、方向はC_1期のＳＢ17(Ｎ２°Ｅ)やＳＢ18(Ｎ５°Ｅ)とは若干異なっている。このことからここでは南地区の建物Ｂと西地区の建物ａをC_1期ないしはＢ期とC_1期の間のいずれかに位置付けられるものとするに止めておきたい。

西地区の建物ｃは方向がＮ24°Ｗ～Ｎ34°Ｗをなし、発掘基準線に対して東に大きく振れる建物群である。このような方向をとる建物跡はC_2期の建物群の中にも多数みられる。また、柱穴の特徴にも両者の大きな違いは認められず、８世紀末以降という年代もとくに矛盾はしない。したがってこの建物ｃはC_2期に位置付けてさしつかえないものと考えられる。

南地区の建物Ｃと西地区の建物ｂは、方向がＮ12°Ｗ～Ｎ17°Ｗをなし、柱穴の特徴もほぼ類似することから同時期と推定される建物群である。この建物群は、西地区でＳＢ292が建物ｃのＳＢ293より新しいことが確認されており、さらに同様の方向をとる建物跡がC_2期の建物群の中に多く含まれていることから、C_2期のものと考えて何ら問題はない

		遺構			年代
		第1・2次調査	第5次調査〔南地区〕	第5次調査〔西地区〕	
A期		SB05・10・19・35・36・63 SB119	(建物D)SB373 SD113	SD358	7世紀末頃
B期		SB01・11・60・61 SA06・07・62・64	(建物A) SA279・280		7世紀末～ 8世紀初頭頃
			(建物B) SB281-A・B・282 SB283・285	(建物a) SB294・295・296 SB297	
C_1期		SB17・18 SD02			8世紀後半頃
C_2期	a	SB20・33・34・38・120		(建物c) SB286・287・288・293	8世紀後半～ 9世紀
	b	SB12・13・32・47	(建物C) SB284	(建物b) SB289・290・291・292	

表6　第1・2次調査と第5次調査成果の対応関係

ものと思われる。年代・柱穴の特徴ともにとくに矛盾する点はみられない。

以上のように、C_2期の建物群には、方向が異なる2つのグループが新旧関係をもって存在することが明らかとなり、第1・2次調査で検出したこの期の建物跡も再検討の結果すべてこのグループのいずれかに属することがわかった。したがってC_2期は建物の方向がN24°W～N38°Wと東に大きく振れるC_{2a}期（SB20・33・34・38・120・286～288・293の9棟）と、N12°W～N17°WをなすC_{2b}期（SB12・13・32・47・284・289～292の9棟）に細分できるものと考えられる。

これまでの検討によって推定された第1・2次調査と第5次調査の成果の対応関係を、建物跡、塀跡、区画溝を中心にまとめると表6のようになる。

第5次調査で検出した他の遺構については、8世紀前半頃とみられる南地区のSI 298～300・305住居跡と西地区のSK 372土坑はB期とC_1期の間に、8世紀後半頃とみられる南地区のSK 330土坑と西地区のSI 319・322住居跡はC_1期ないしC_2期に、8世紀末頃とみられる西地区のSI 320・321住居跡はC_2期に、B期より新しくC_2期より古い南地区のSK344土坑はB期～C_2期の間のいずれかに位置付けられることになる。

3　まとめ

南地区では目的としたB期官衙中枢部の南辺および西辺を区画する塀跡が検出された。これらの検出により中枢部全体の正確な規模が確定するとともに、その建物配置などの構

造も明確に把握できるようになったので、以下その概要をまとめておく。

B期官衙の中枢部は周囲が一本柱列による塀や建物で区画されている。その平面形は南北に長い長方形をなし、規模は南北が東辺で60.64 m、東西が南辺で53.00 mである。南北軸線の方向は発掘基準線（国家座標第X系の座標北）に一致する。建物配置をみると、北辺の中央やや西寄りに東西7間(17.15m)、南北5間(12.17m)の大規模な四面廂付掘立柱建物(ＳＢ01)を置いて正殿とし、その西側には西辺に沿って北に東西2間(4.08m)、南北10間（22.28m）の掘立柱建物(ＳＢ61)、南に東西2間(4.08m)、南北8間と推定される掘立柱建物(ＳＢ60)を柱筋をそろえて2棟並べ、正殿の東にも正殿身舎の北側柱列に北側の柱列を合わせた東西3間（5.14m）、南北2間（3.60m）とみられる小規模な掘立柱建物(ＳＢ11)を配している。ＳＢ01正殿は、柱抜き取り穴中から多量の瓦が発見されたことより、山田寺系単弁蓮花文軒丸瓦とロクロ挽き重弧文軒平瓦の組合わせをもつ瓦葺きの建物であったことが確認された。

正殿からは柱筋を北側柱列に合わせた一本柱列による塀が東(ＳＡ06)と西(ＳＡ07)に延びている。東のＳＡ06は20.3m東に延びて東辺の塀(ＳＡ64)に接続している。一方、西のＳＡ07は西に10.90 m延びてその西端はＳＢ61の北妻に接している。西側のＳＢ61とＳＢ60の間は7.5 m離れており、両者の間には棟通りに一本柱列による塀(ＳＡ62)が通っている。この塀の中央部分の柱間は約3.6 mと他よりも広くなっており、ここには塀に取りつく小規模な棟門が設けられていたものと考えられる。またＳＢ60の南では、この建物の西側柱列に柱筋を合わせた塀（ＳＡ279）が南に延びており、その南端は南辺の塀(ＳＡ280)に接続している。東辺と南辺は全体が一本柱列による塀であり、建物などは全く見られない。今回の調査にあたって、南辺には南門が取り付くのではないかと想定したが、その痕跡は全く検出されなかったことから、存在したとしても棟門程度の小規模な門であったと考えられる。

正殿の前面には建物は全くみられないことから、この部分は儀式などを行うための広場として確保されていたものと考えられる。この中枢部は建物配置には対称性はみられないものの、正殿が大規模で瓦葺きの建物であること、正殿の前面に儀式空間とみられる広場をもつこと、桁行の長い長大な建物が存在することなど、機能上は政庁的な性格の強い一郭と考えられ、一般の実務的な仕事を行う場は他に設けられていたものと思われる。

今回の調査では両調査区から塀跡や建物跡をはじめ、竪穴住居跡や土坑・溝などきわめて多数の古代遺構が検出された。これらは第1次調査で設定したＡ期～ C_2 期の各期にわたるものであり、これらによって城内地区における官衙遺構の分布と変遷がより明確に把握できるようになったことは大きな成果であった。なかでも、西地区では本遺跡からはこ

れまで全く検出されていなかった倉庫とみられる総柱建物跡が数棟発見され注目された。これらがどういった構成をとるのかは今のところ不明であるが、他の郡衙遺跡ではこのような倉庫跡が一定のブロックをなして存在することが知られており、今後この地域の発掘の進展によって本遺跡の性格も少しずつ明らかになるものと思われる。

南地区の建物Ｂと西地区の建物ａはこれまで設定していた遺構期には当てはまらない新たな建物群である可能性をもつことも知られた。遺構期については他にも、Ａ期が細分される必要があること、C_2期が建物方向の違いによって２時期に細分されることなどの問題が生じており、これらについては小館地区の遺構変遷を含めた本遺跡全体の遺構期の検討を待って補正してゆきたい。

また、今回の調査では古墳時代の竪穴住居跡や土坑が多数検出され、南小泉式土師器の良好な資料が得られたが、今回はこれらの遺構・遺物には充分な検討を加えられなかった。今後の課題としておきたい。

註１　宮城県多賀城跡調査研究所『名生館遺跡Ⅰ』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第６冊　1981

註２　丹羽茂「宮前遺跡」宮城県文化財調査報告書第96集『朽木橋横穴古墳群・宮前遺跡』PP.69～213　1983

註３　加藤道男・阿部博志「(3)観音沢遺跡」宮城県文化財調査報告書第72集『東北新幹線関係遺跡調査報告書－Ⅳ－』PP.131～349　1980

註４　宮城県多賀城跡調査研究所『名生館遺跡Ⅲ』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第８冊　1983
宮城県多賀城跡調査研究所『名生館遺跡Ⅳ』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第９冊　1984

註５　伊東信雄・氏家和典『仙台市燕沢善応寺横穴古墳群調査報告書』仙台市教育委員会　図版第32　1968

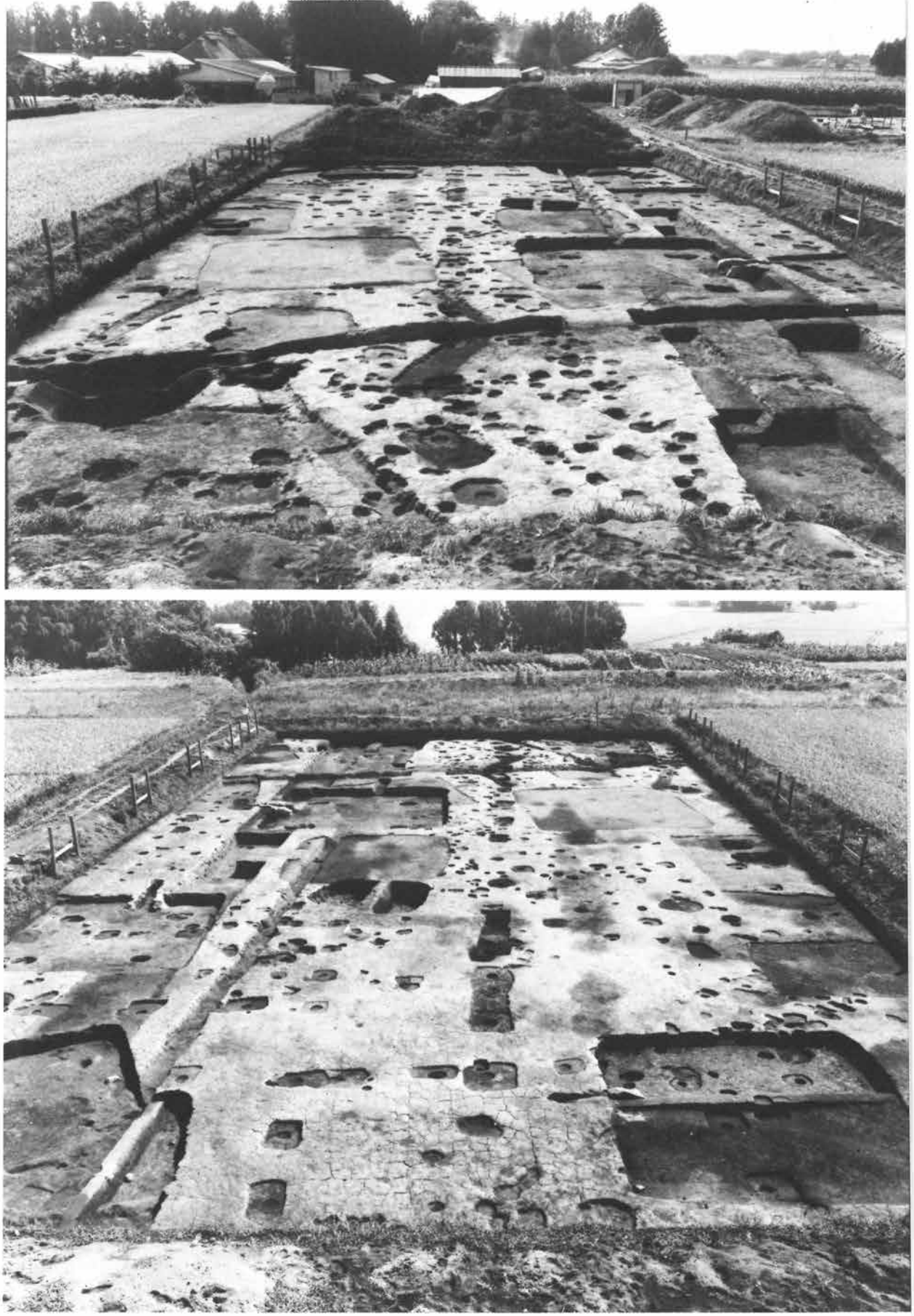
註６　楢崎彰一・斎藤孝正・他『愛知県古窯跡群分布調査報告書(Ⅲ)』愛知県教育委員会　P.62　1983

註７　楢崎彰一・荻野繁春・他『老洞古窯跡群発掘調査報告書』岐阜市教育委員会　図版８・９　1981

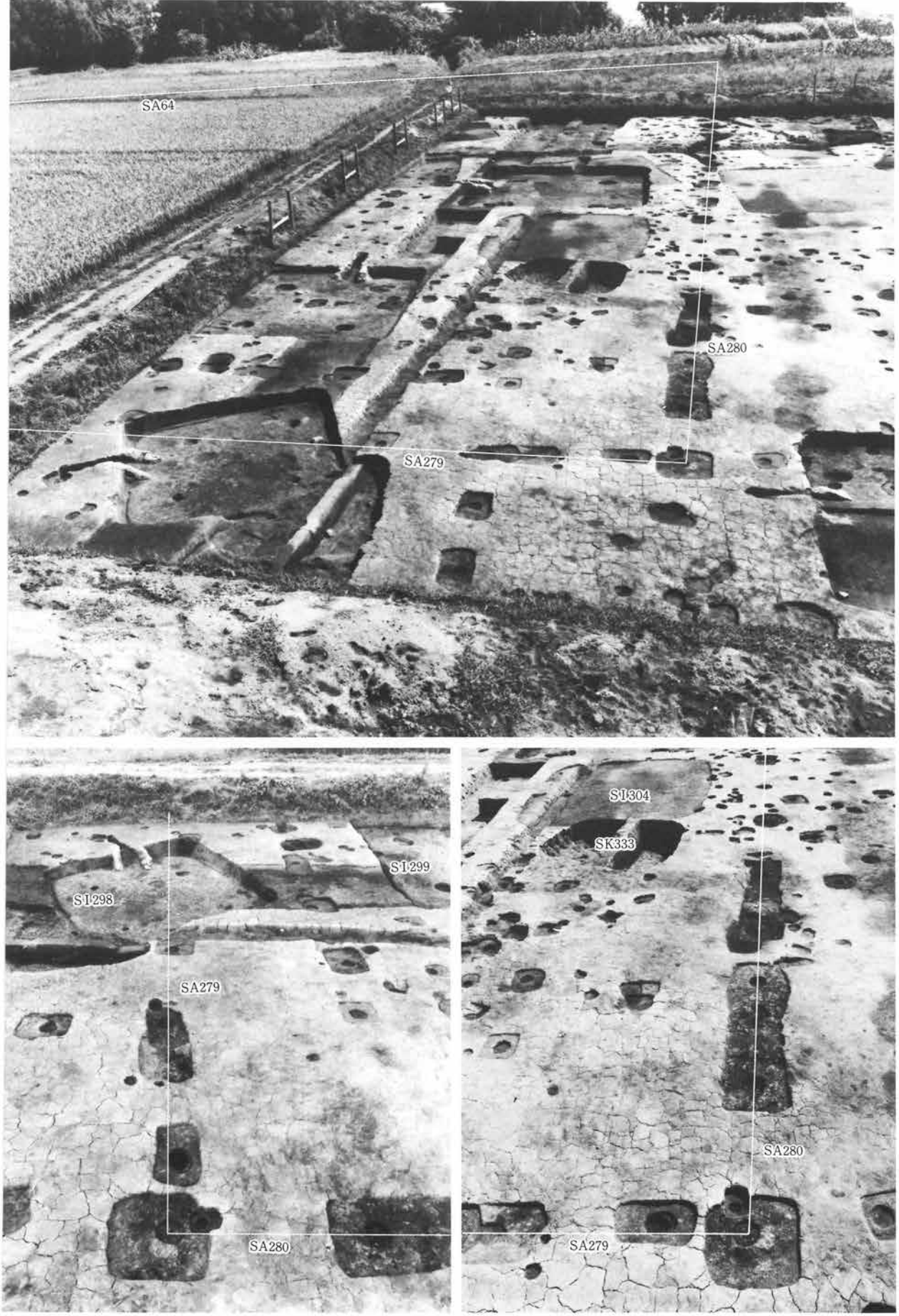
註８　小井川和夫・手塚均「(1)糠塚遺跡」宮城県文化財調査報告書第53集『宮城県文化財発掘調査略報(昭和52年度分)』PP.44～198　1978

註９　宮城県多賀城跡調査研究所『伊治城跡Ⅰ』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第３冊　1978
宮城県多賀城跡調査研究所『伊治城跡Ⅱ』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第４冊　1979
白鳥良一「多賀城跡出土土器の変遷」宮城県多賀城跡調査研究所『研究紀要Ⅶ』PP.1～38　1980

註10　宮城県多賀城跡調査研究所『名生館遺跡Ⅱ』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第７冊　1982



図版 1　上：南地区全景(東から)　下：南地区全景(西から)

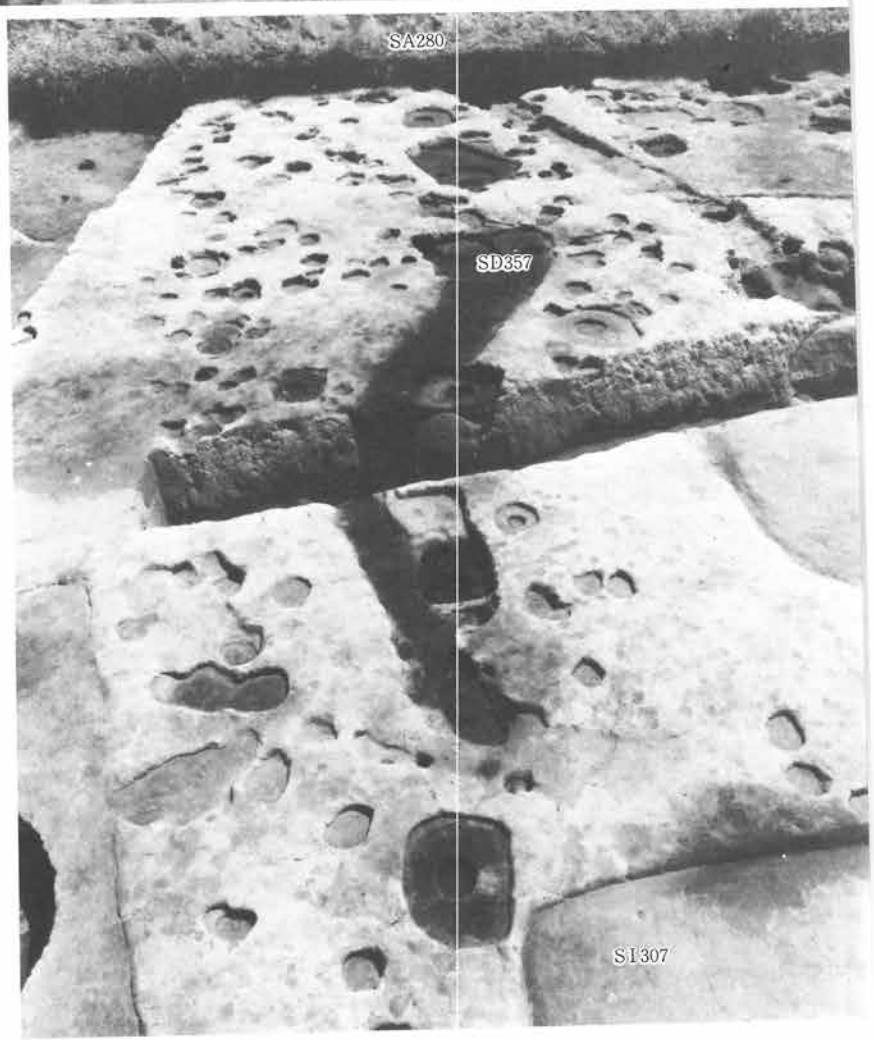


図版 2　上：ＳＡ279・280塀跡全景(西から)　左下：ＳＡ279塀跡(南から)　右下：ＳＡ280塀跡西端部(西から)

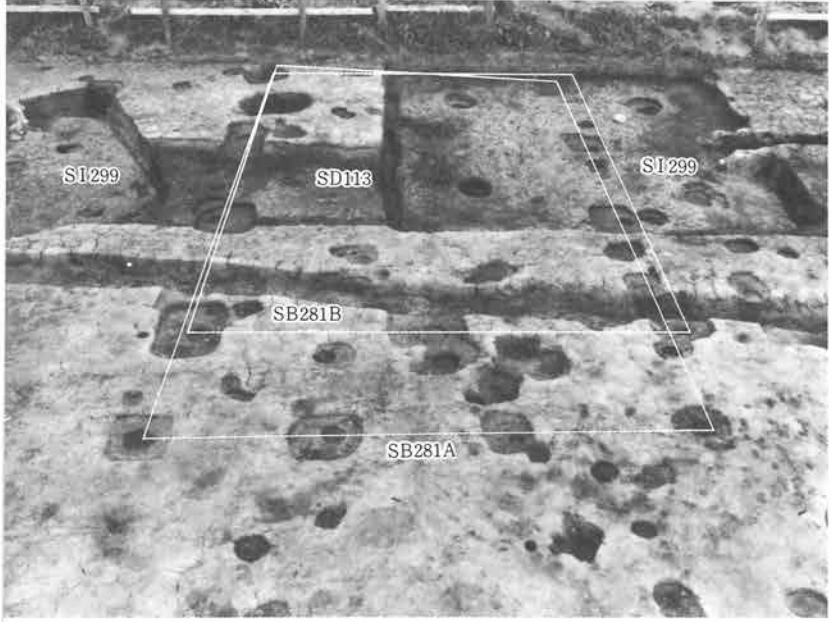
図版 3

上：ＳＡ280塀跡中央部
（西から）

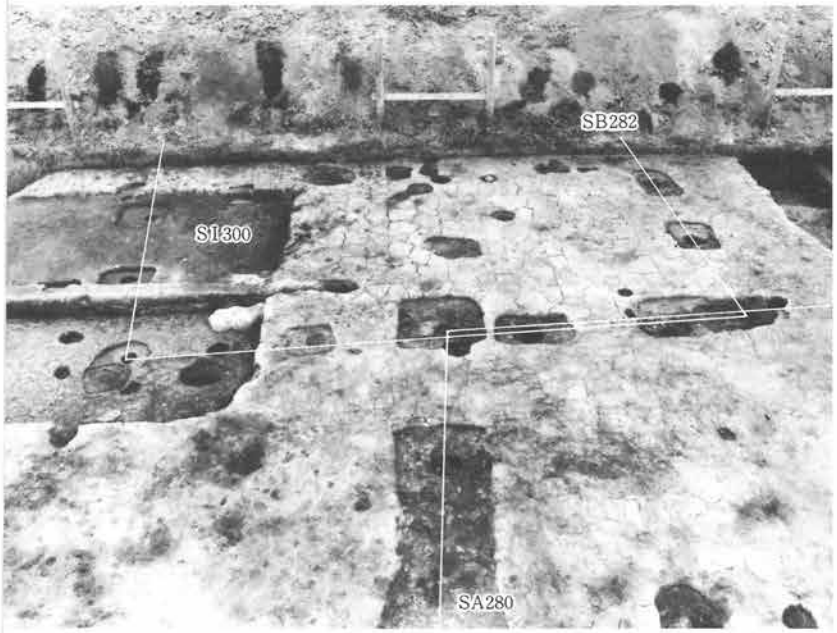
下：ＳＡ280塀跡東半部
（西から）



図版 4



上：ＳＢ281Ａ・Ｂ建物跡(南から)



中：ＳＢ282建物跡(東から)

下：ＳＢ283建物跡(北から)

図版 5

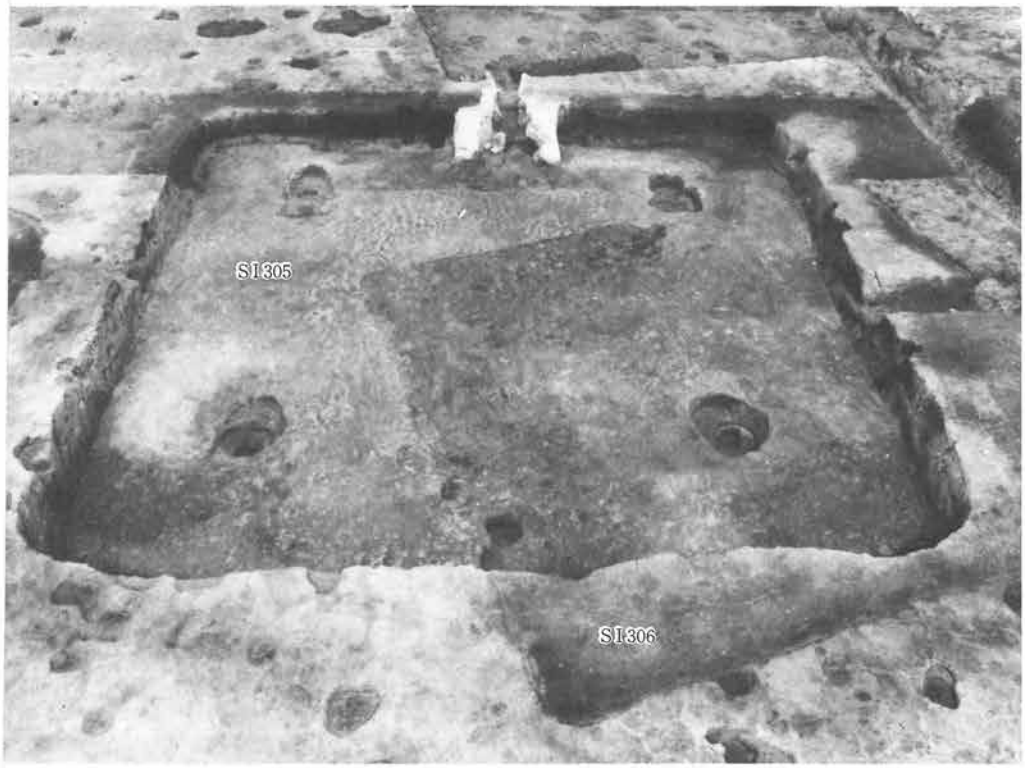
上：ＳＢ284・285建物跡(北から)

中：ＳＩ299住居跡(南東から)

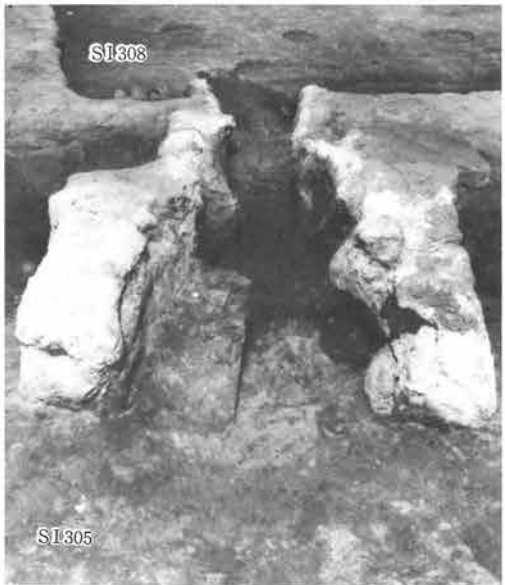
下：ＳＩ299住居跡カマド

図版 6

上：ＳＩ299住居跡
（西から）

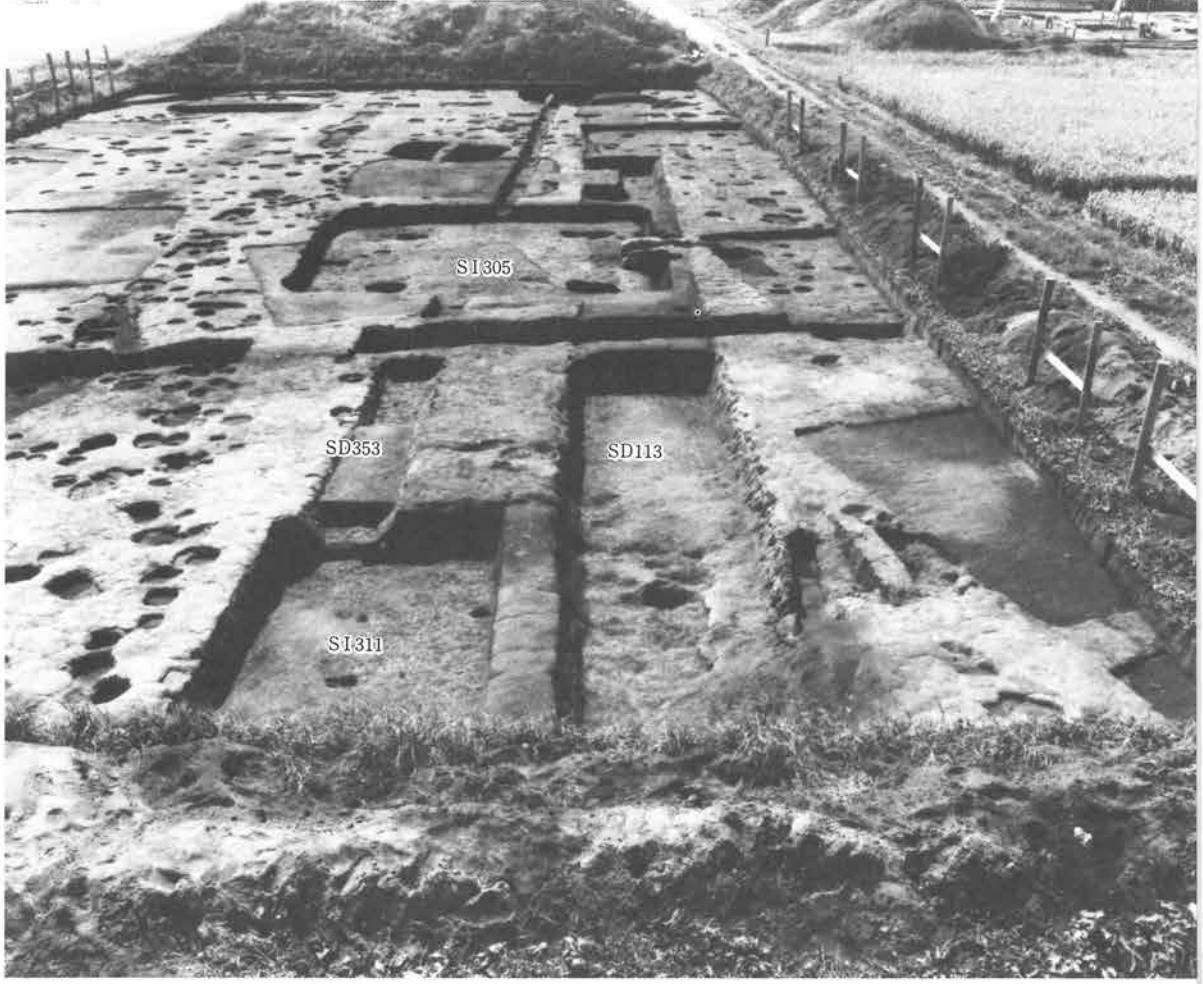


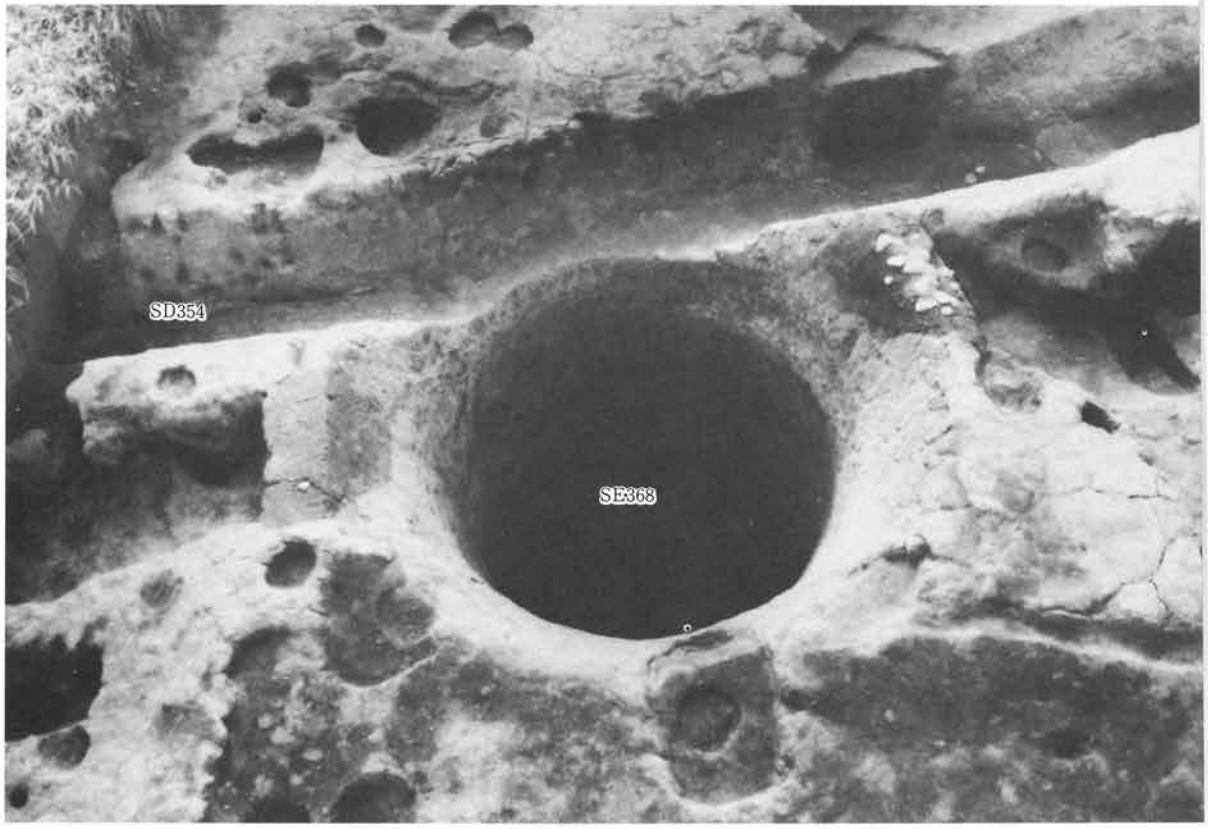
中：SI 305・306住居
跡（南から）



左下：ＳＩ299住居跡
カマド

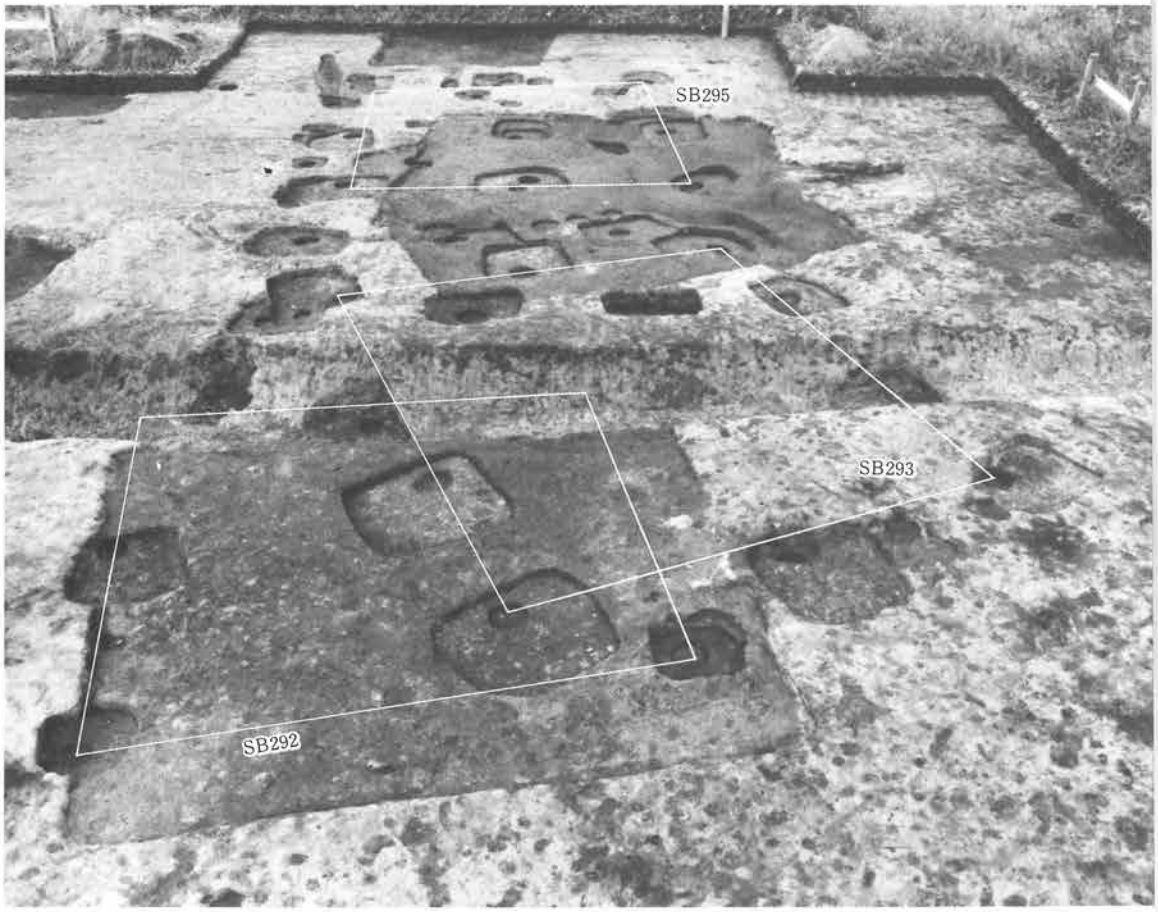
右下：ＳＩ305住居跡
カマド





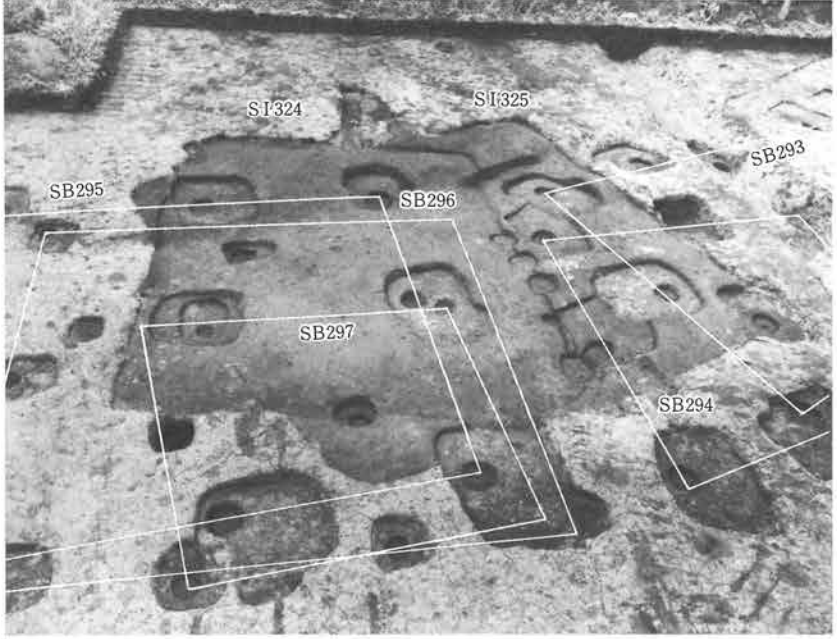
図版7　上：ＳＤ352･353溝(東から)　下：ＳＤ354溝･ＳＥ368井戸跡(東から)

図版 8　上：西地区西半部(東から)　下：西地区東半部(西から)

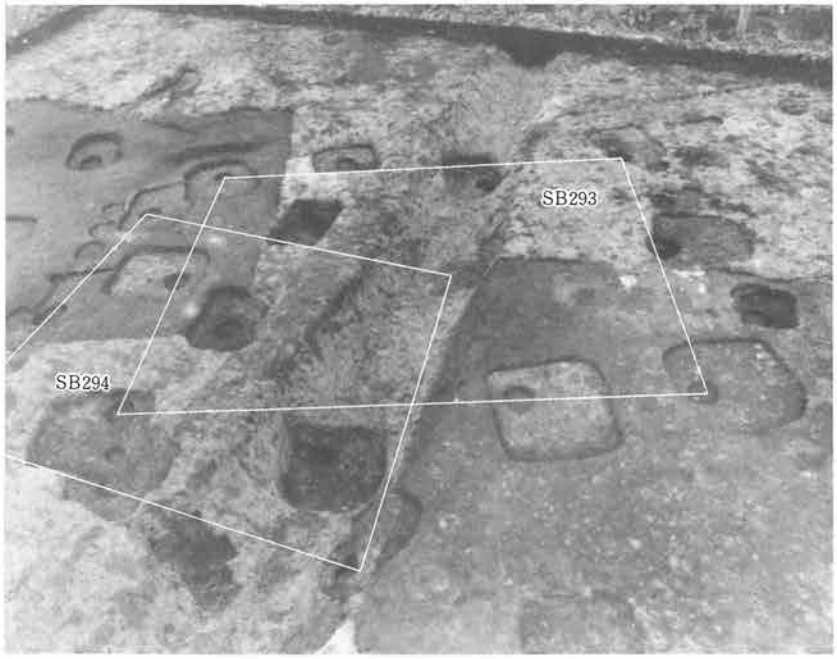


図版 9　上：西地区西端部検出遺構(南から)　下：西地区北西隅付近遺構重複状況(東から)

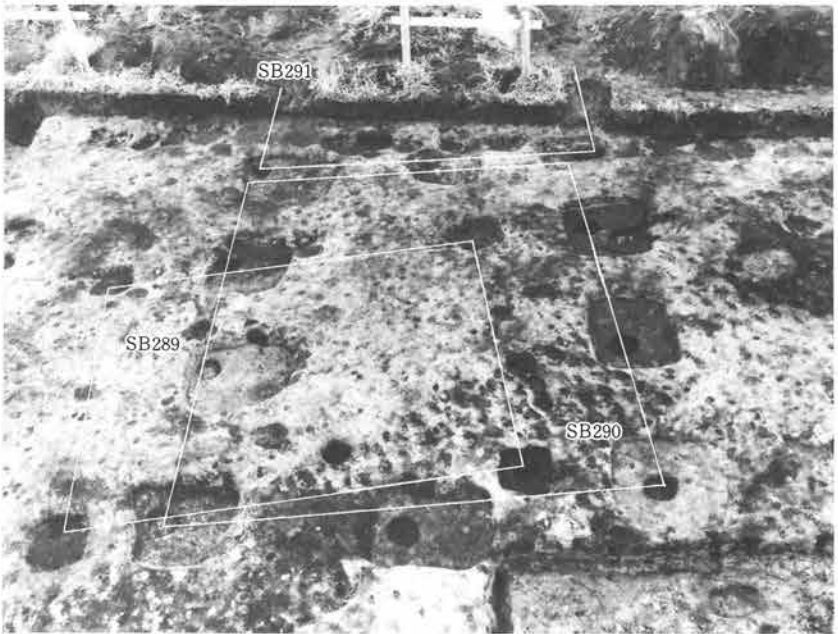
図版10



上：ＳＩ324･325住居跡、
ＳＢ293～297建物跡
（南から）



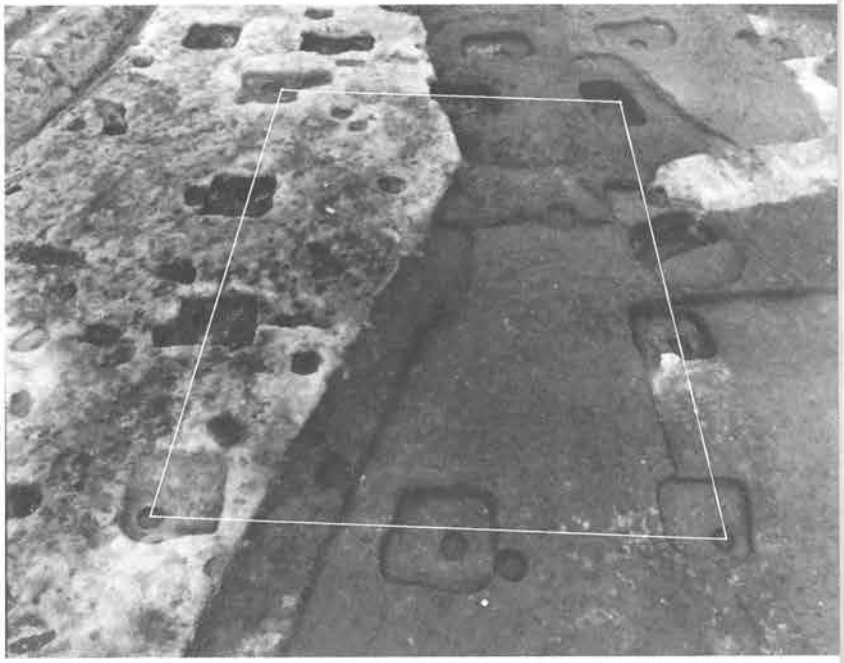
中：ＳＢ293･294建物跡（南から）



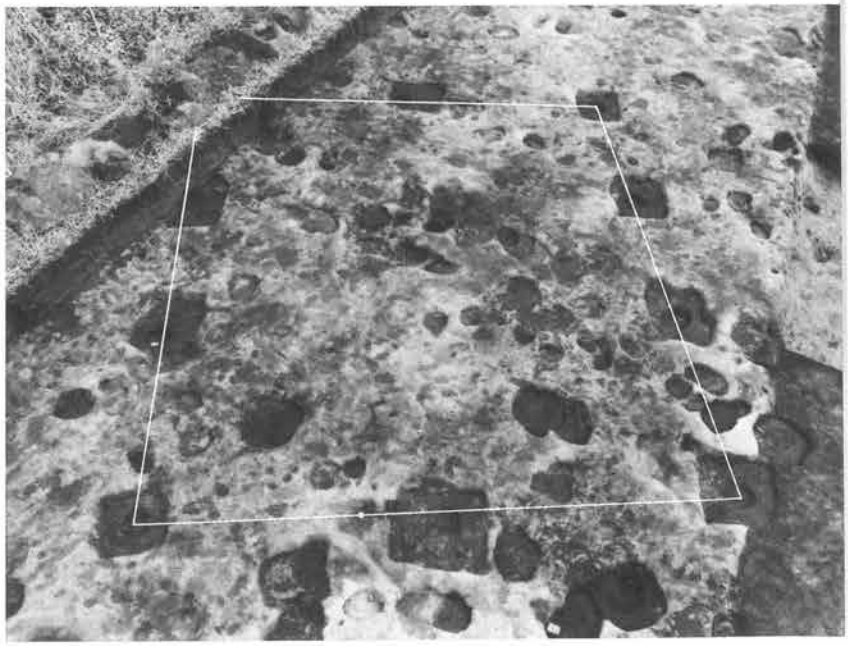
下：ＳＢ289～291建物跡（北から）

図版11

上：ＳＢ288建物跡(西から)

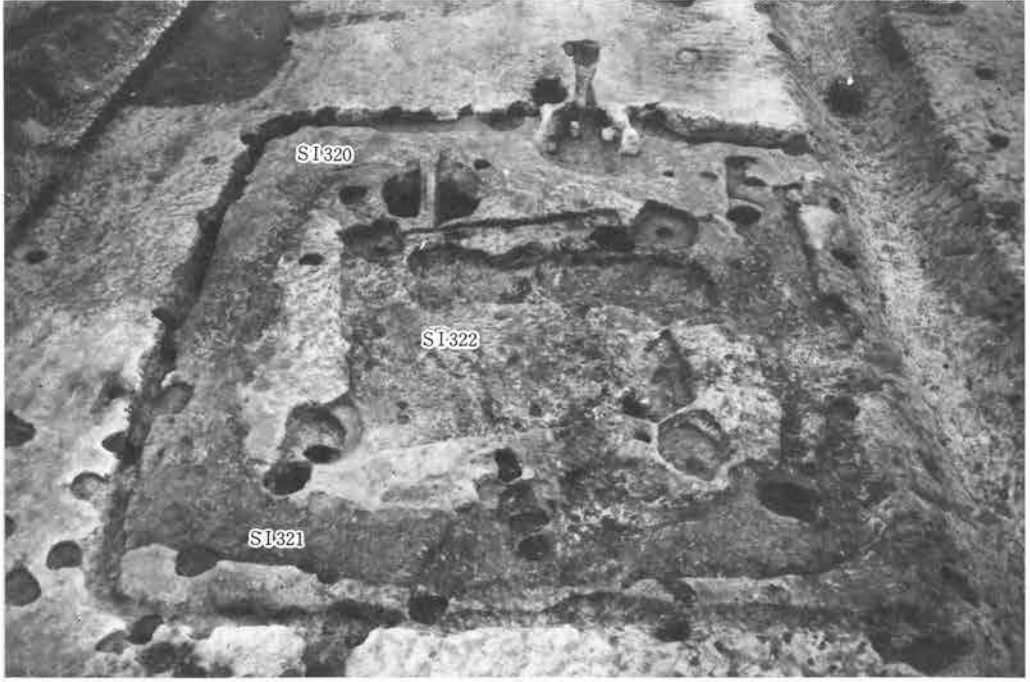


中：ＳＢ287建物跡(南から)

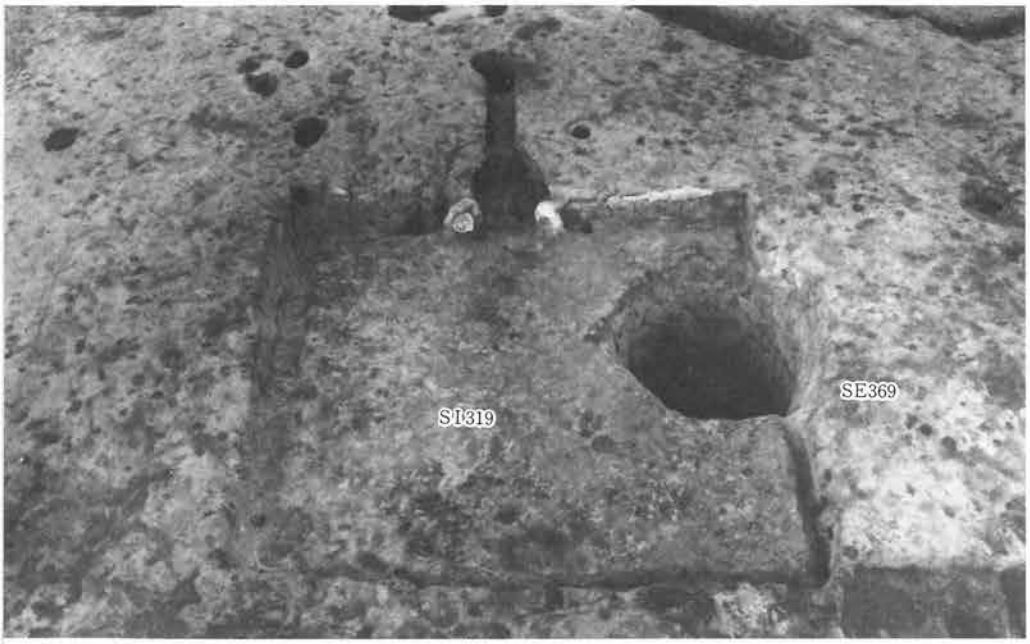


下：ＳＢ286建物跡(北から)

図版12



上：ＳＩ320～322住居跡
（南から）



中：ＳＩ319住居跡、
ＳＥ369井戸跡
（南から）

左下：ＳＩ320住居跡カマ

右下：ＳＩ319住居跡カマ

図版13

上：ＳＤ358溝(南から)

下：西地区北東隅付近
遺構重複状況
(南から)

1

2 A

2 B

3

4

5

6

7

8

図版14

1．土師器杯（ＳＩ298・第６図１）
2．土師器杯（ＳＩ299・第７図１）
3．土師器杯（ＳＩ299・第７図２）
4．土師器杯（ＳＫ348・第21図２）
5．土師器杯（ＳＩ322・第20図２）
6．土師器甕（ＳＩ298・第６図２）
7．土師器甕（ＳＩ319・第18図１）
8．土師器甕（ＳＩ320・第19図１）

1

3

4

2

5

図版15

1．土師器甕(ＳＩ322・第20図３)
2．須恵器高台杯(ＳＩ300・第８図４)
3．須恵器杯(ＳＩ300・第８図６)
4．須恵器杯(ＳＩ305・第９図１)
5．須恵器杯(ＳＩ320・第19図３)
6．須恵器杯(第１層・第21図10)
7．須恵器蓋(ＳＩ300・第８図５)
8．須恵器甕(ヘラ書き文字)

6

7

8

1

5

2

6

3

7 A

7 B

4

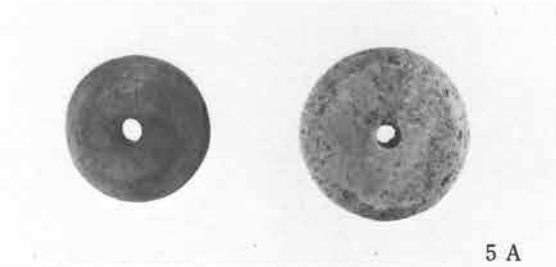
図版16

1．土師器杯（ＳＩ302・第10図１）
2．土師器甕（ＳＩ302・第10図２）
3．土師器甕（ＳＩ302・第10図５）
4．土師器壺（ＳＩ302・第10図４）
5．土師器杯（ＳＩ312・第12図２）
6．土師器壺（ＳＩ312・第12図５）
7．石製模造品（ＳＩ312・第12図６）

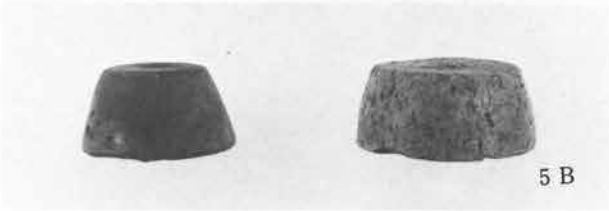
1

4

2



5 A



5 B

3

6

7

図版17

1．土師器杯(ＳＩ308・第11図１)
2．土師器壺(ＳＩ308・第11図２)
3．土師器甕(ＳＩ308・第11図３)
4．軒 丸 瓦(ＳＤ359)
5．土製紡錘車(左：ＳＢ295、右：ＳＩ320)
6．土製支脚(ＳＩ305)
7．砥　　石(上：ＳＩ320、下：ＳＩ305)
8．石製模造品(ＳＩ306・第15図３)
9．灯 明 皿(ＳＸ336・第15図２)

8

9

多賀城関連遺跡発掘調査報告書第10冊

名生館遺跡 V

昭和60年 3 月25日印刷
昭和60年 3 月31日発行

発行者　宮城県多賀城跡調査研究所
多賀城市浮島字宮前133
TEL（02236）8－0101
印刷所　小泉印刷株式会社